
黄昏のオオカミ The Twilight of Xenoatla

pandi剛種

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏のオオカミ The Twilight of Xenoa

ta

【Zコード】

N4601BA

【作者名】

pandai剛種

【あらすじ】

あらすじ：この世界は終わりを迎えようとしていた。『異人』化と呼ばれる現象は約九十億人いた人口を約一億人にまで減らし十年だった今でも神は『人』を人間と異人に選別した。俺は獣人、異人のなれの果て、或いは成りそこない、人の意思を持ち獣の体を持ち、仲間と共に『人』に争いを挑む者。

「コウ。君は何のために

戦うの？」

わからない。この戦いの果てに何があるかはわからない。ただ、別に戦いに勝利するつもりはない、差別をなくしたいわけじゃない。あの日起きた夕暮れの地獄を終わらせるため、仲間をこの地獄から救うため、俺はこの道を歩いていく。この作品は2012年一月二十日の22:00時に削除します

戦い続けて既に十年が過ぎた。

いつ終わるともわからない小競り合いの連續。

仲間は疲弊の色こそ見せないものの、刻苦は時の流れと共に確實に空気に滑り込み、体をむしばんでいった。

時が過ぎすぎるほどに、仲間は減っていく。
少しづつ死んでいく。

狙撃されるもの。

流れ弾に当たるもの。

失血死。

服毒死。

そして、自殺

仲間は少しづつ減つていった。

ソレと共に、道も遠のいていった。

誰かがやらなければならなかつた。

道を開く者が必要だつた。

この道を、たつた一人で歩く人間が必要だつた。

行こう。

この道の先に未来があると言つのなら、この先に行き戦いを終わらせることができるのなら。

一步を踏み出せば、砂塵が舞い上がり夕焼けを霞ませる。
空はどんどんとしてやがて街が黄昏に沈む時に差しかかる。

そこは東京。

かつて俺達が平和に過ぎた街、地下には迷路の如き線路と通路

が走り、地上には巨大なビルがいつくも立ち並ぶ。

今は、それらが全てカモフラージュ。

都庁ビルを中心に建物は巨大な遮蔽物になり、地下道は俺達の基地への道を繋ぎ、敵を遮る。

そこは東京。

巨大な戦場となつた、廃墟。今は亡き世界の中心。

そして、俺達の故郷。

行こう。

黄昏の夕闇に、広大な戦場が沈んでいく。

もうすぐあちこちでサーチライトが照らされ、街は夜の戦いへと色を変えていくだろう。

夕闇を縫い、俺達は再び地面を蹴り上げる。

銃は片手に、防弾スーツを身につけ、通信デバイスを口元に添え、灰の空氣を吸い込み、巨大な棺桶に身を包む。

六メートル強のパワードスーツ、徹甲弾を装備したガトリングを担ぎ、脚部には対地中用パルスバスターを装備。肩には予備弾薬を担ぎ、モニターの向こうに宵に濡れた戦場を捉える。

皆、一斉に操作レバーを握りしめる

東京が夜に沈んでいく。

暗闇に染まつた夜闇を無数のスポットライトが照らし、至る所で暗闇がかき消される。

不意に、夜風に硝煙が混ざり、突き出た鼻につく。

程なく遠くで対装甲ライフルの射撃音が尖つた耳に響き、小さく息を吸い込み、脚のレバーを踏みこむ。

『先発隊が敵とぶつかりました』

強化パワードスーツが動き、それだけで地面が揺れる。戦いの始まりだ。

明日に繋がるかもしれない、それともこれで終わりかもしない。

第一次強襲作戦。

朝が始まるまでに、決着を付けよう

「ガングレード、皆の命を預ける」

『はい、隊長』

「行こう 送電施設を今日こそ落とす」

夜の闇の中、俺達は駆ける。

これで終わることを信じ、明日へ命を繋げられる信じ、地面を踏みこみ、強く歩いていく。

そして、目指すは東京都庁。

巨大なビルの奥へ

黄昏のオオカミ The Twilight of Xen
oatla

十年前、この世界の片隅で異常な出来事が起きた。ある日。突然、何の前触れも前兆も、科学的予見も起こる余地もなく。

人が、水風船のように膨らみ、そして弾けた。

街の真ん中で鮮血が人々に振りかかり、やがて騒動が東京の街の片隅で起きた。

ただそれは、一時的な猟奇的な殺人事件だと思われた。

だけど、半年後、同じことが起きた。

一つだけじゃない。

渋谷。

人が行きかう、街の真ん中で三十の人間が場所を違えて一斉に破裂すると言う事が起きた。

同じく騒動になつた。

ただこれはここで終わらなかつた。

その後、別の人間が、人の姿をやめ、異形の化け物へと姿を変えた。

それが、最初の『異人』だった。

写真で見ただけだが、壮絶なものだ
の触手がイソギンチャクのように伸び、肩からは動物の頭が迫り出していた。股の間からは大量の毛がワサワサと生えて、イカのようだつた。

背中には翼が生え、胸からは同じ動物の顔が出ていた。

まさに 化け物だった。

その人間はすぐさまに捕らえられ、解剖され

程なくして、

解剖をする余裕がなくなつた。

当然だ、全世界で同じようなことが起きたのだから。

街中で同じように、化け物へと変化する人間が増えてきて、普通の人間を殺していく事が起きた。

街が血の海に沈んだ。

そんな事が、世界中で起きた。

子ども、老人、男女関係なく、無差別に、平等に全ての人間がそうなる可能性を、神は与えた。

そんな状況を誰も取り締まらなかつた。

政府という器には、既に化け物どもが跋扈していたから。ありえなかつた。

そんなあり得ない事が科学的に何の前兆もなく起きるわけがない。だけど、何一つ手掛かりが見つかることなく、その変異現象は世界でワクチンの無いインフルエンザの様に増えていった。

結果、九十億人いた人類のうち、八十億人が『化け物』に、そして残りが人間に振り分けられた

2056年、一月十四日。

夕日の眩しい、午後四時二十分。

神が与えたもう選別の時　　その日、人は生きるべき命と、死すべき命に選別された。

皆、死んでいった。

残つたのは、普通の肌をした『人間』と獸のような頭と毛むくじやらな肌をした、理性の残つた『獸人』の二種類。

今は、その十億人のうち、残つた二種類の人間が、互いに戦い、或いは狩りをしているだけだった。

獸と人が戦い、或いは異人と戦う日々。

文明はすでに退廃し、残つたのはいくつもの兵器と人だけ。

そして　　異人と魔法。

荒廃した世界が、この青空の下に広がつていた。

この世界は、もうすぐ終わろうとしていた。

だけどあの日の夕焼けは、未だに続いていた

2066年、十二月一日。

東京都心。

メグロ区画。

崩れ落ちた廃ビルがいくつも並び、かつて人が住んでいたであろう廃屋がひしめく居住区画。

人の気配はなく、街の明かり一つない夜の暗闇が周囲に広がる。瓦礫が縦横に走る道に無数に走り、横倒しに崩れたビルが大きく高速道路を横倒しに倒していた。

路地裏には野良猫など動物は消え、いるのは無数の触手の生えた

肉塊の骸。

『異人』の死体が暗闇の中、至る所に転がり、或いはビルの窓からダラリとだらしなく上体を垂らしていた。

五つの首を持ち、二つに裂けた胴をもつた化け物。

七つの目があり、口腔の中に無数の顔を迫り出す、異形の生物が暗闇広がるメグロの街に転がっていた。

そんな死体をつつく鳥、蠅一匹すら現れず、腐ることすらなく暗闇に肉の塊が佇む。

ただ、四十万が夜闇に広がる

ドオオオンツ

ビルの合間から空へと立ち上る黒い土煙。

ズルリ……

衝撃に『異人』の死体が不意にビルの窓から零れおちる。ビルとビルの間から迸る閃光。

闇を塗りつぶす光は絶え間なくフラッシュし、暗闇の中にドラムのような重たく激しい破裂音が走る。

ビルに反響する銃撃音

白い硝煙がビルの合間から昇る。

ズウウウンッ

地面に重たく響く衝撃音。

粉塵を大量に撒き散らし、崩れかけた廃ビルが中から折れて崩れる中、暗闇に飛び上がる大きな影があった。

六メートル超の巨体。

スラリとした四肢。

装甲は闇に溶け込むように、黒を基調にし、頭部は対照的に白く光を放つアイサイトが二つ、そして補助サイトアイが胸に一つ。

脚部には補助口ケットスラスターが装甲の内側から展開。噴射口の光は脚部から零れるままに、無骨で滑らかな黒の装甲を照らす。

四機の両腕にそれぞれ、狙撃銃が計二丁、突撃小銃一丁、大型ガトリングキャノンを装備し、背部の弾薬パックを装備。

閃光を放つビルの合間から飛び退くままに、近くのビルに飛び退くままに、硝煙の幕の向こうに四機の巨人が装備を構える。

『……今だ、撃て！』

重たい発射音。

地面上にアンカーを突き刺し固定した脚部がトリガーアームを引くままに、大きく後ずさりコンクリートが抉れる。

マズルブレー キから煙が立ち上り、閃光と共に対強化装甲用徹弾弾が一発同時に飛び出し硝煙の幕を晴らす。

そして眼下から噴き上がる閃光と弾丸の雨をかいぐぐり、敵の影を捉える

ドオオオンッ

重たい衝撃音と共に、同じような大きさの機体の胸元を貫いては、僅かに浮いた上体が下半身から千切れた。

空中をクルクルと回転して夜天に向かつて弧を描く上体。

ソレと共にビルの上から降り注ぐように、対装甲ガトリングランチャーの雨がビルの間にいた七機の弾幕を押し返す。

大きく上下するハ連バレル。

ガトリングガンを担いで弾幕を張り続け、残つた一機は後ずさる敵機を捉えて正確に胸元を撃ち抜く。

暗闇を裂く断続的な閃光の中、敵の数が五機、四機と減つていく

『アトリアー！そろそろ引くぞ！』

『後十秒！』

『増援を引っ張つて隊長の下に帰る気が！？』

遠くから噴き上がる新たな光の雨。

刹那、ガトリングを背負つていた一機の頭部を掠める新たな弾幕に、四機は暗闇の中アイサイトを細めた。

そこには新たに五機、六メートル超の巨人が暗闇の中、無数のビルの合間に縫い煙を引いてやつってきた。

日本連邦政府所属アーマードエグザス・エルザ。

大型ロボットとして八年前、アトモス社との共同開発により旧日本政府により作られた第一期エグザスを戦闘用に改良、人が乗れるようになされた機械。

分類は大型パワードスーツで操縦者の動きに忠実に追随する事で柔軟な動きと分厚い装甲による防御力を可能とし、小型核反応エンジンによる動力により重たいものが持てる代物だ。

エルザはそのエグザスの強化型であり、この日本を統治する連邦政府が所有する最新鋭現行機。

そんな最新鋭機が、目の前まで来ている

『渋いな……逃げるに逃げれん』

『狙い撃つ……！』

『敵の方が多い時はどうすると教えられた……！』

『……遮蔽物を利用する』

『あまり戦線は下げられんが

撒くぞ』

脚部固定用アンカーが外れ、装備した武装の重さに僅かに前のめりに浮く巨体。

夜闇の中、噴き上がる弾幕を背に、四機の巨人はソレゾれ足元のビルを離れ、再び細く入り組んだビルの合間へと飛び降りた。

バカリツと鱗を走らせ割れるアスファルト。

巨体は僅かに地面に沈めば、脚部装甲から補助ブースターを迫り出し、足部裏面からキャタピラが迫り出した。

土煙を上げ、地面に沿つて走行を始める四機。

その後ろから直ぐさま、アサルトライフルの強化弾が雨のように降り注ぎ、ジグザグに走る四機の装甲を掠める。

『グゥウウ……！』

『エトナ！ 弹薬バックパックを切り離せ！』

『これだけで何人敵が殺せると思つてるのよー！ うち貧乏なのよー！』

『お前が死んでどうなるものかよ！』

『うつさい走れ！』

ドオンッ

逃走をしながら、周囲の狭いビルの壁に装甲を擦られ、ガトリングを持った一機が大勢を崩す。

膝を僅かに折り、脚部が地面を擦り走行スピードが落ち、巨体が地面に手をつく。

そして回転して滑りながら周囲の壁にぶつかり、黒い巨人が尻もちをつきながら、動きを止める。

損傷した頭部のアイサイトを動かしながら、閃光を上げ弾丸を巻きながら近づいてくるエルザが見える。

グッとガトリングの砲台を持ち上げては敵を狙う。トリガーを引き絞る

『撃ち方やめ』

聞こえてくる低い声。

ヒュオオオオッ

闇を切る鋭い音。

瞬間、尻もちをついた黒い巨人の頭上、夜の空をよぎり、巨大な影が後方から飛び出してきた。

噴き上がる背部と脚部の補助推進スラスター。

スポットライトに照らされる黒い装甲。

滑らかな躯体は、柔軟な動きを空中に見せながらビルの合間から飛び上がり、眼下に五機のエルザを捉える。

腕の装甲から迫り出す長いナイフ。

スラスターを切り自由落下するままに、左腕内蔵ブレードが一機のエルザへと向けられる。

真っ赤にぎらつく一つのアイサイトが見下ろすままに暗闇にぎら

つく

ビルの間から立ち上る土煙。

路地内をくまなく広がる土煙の中、エルザの胸部装甲に縦に走り、火花を散らしながら機体が仰け反る。

そして暗闇と砂塵に視界が遮られ、関節が空回りながら、後ずさ

る

『引いてもらおうか』

ヒュンッ

夜風を切る鋭い音。

砂塵を払い、周囲の建物の壁に真一文字に斬痕を浮かべ、暗闇からヌウと姿を現す、長い銀髪。

追随するように噴き上がる衝撃波に晴れる土煙。

衝撃波に吹き飛ぶビルを横目に、前のめりに身体を屈め、斬痕に沿つて崩れ落ちるエルザの前に黒い装甲の巨人が立っていた。

真っ赤な目が、黒い血飛沫を上げながら崩れる敵機の下半身の向こうに、四機の気配を捉える。

カシャリと小さな音を立てて走行の中に内蔵ブレードが収まる

『エトナ。少し下がれ ガングレド、戦線を構築するぞ』

ドスンッとアスファルトにめり込む脚部。

ソレと共に脚部の滑らかな黒い装甲が内側から開いていき、中から迫り出す巨大な杭が地面に突き刺さった。

キィイイインッ

微振動を上げて甲高い音を震わせるハツのステーキ。

四機のエルザが眼前で携行武器を構え、黒き巨人はグツと前のめりに身体を屈める。

紅い眼光を闇に浮かべる

『広域パルスバスター始動』

半径一キロの高周波攻撃。

『行くぞ、ガングレード』

立ち上る膨大な土煙。

甲高い空気の悲鳴と共に旧居住区画一帯を覆う程に、地面が激しく割れ、砂塵が地面奥深くから噴き上がった。

音を立てて崩れ落ちる一体の無数の建物。

地面がクレーター状に窪んでいき、七機のエルザがよろめきながら、崩れた地面の中へと引きずられていく。

メグロ一体を覆うスポットライトを遮る程に夜空へと粉塵が立ち上る

『撃て！』

粉塵を晴らす程の激しい銃撃。

混乱する七機のエルザを捉え、暗闇を裂く閃光と共に、激しい弾幕が津波のごとく押し寄せてきた。

対装甲ライフル弾の群れが一直線に走り、夜の闇をよぎり、遙か後方から放物線描いて溜弾が土煙に吸い込まれる。

爆風がさらなる粉塵を作り、後ずさる七機のエルザの四肢が降り注ぐ弾丸にバラバラになっていく。

ドスンッ

降り注ぐ溜弾が一機の胸部コツクピットに直撃。

より激しい爆炎が浅いクレーター状の更地に噴き上がる中、紅い瞳をした黒き巨人は火柱に戦線を後退する。

肩には友軍機。ガトリングを引きずり、ようよう歩く仲間を紅い瞳に捉える。

『エトナ……無茶をする』

『隊長……すいません』

『銃は人を殺すためにあるんじゃない』

『銃は、相手の動きを封じるために使う生きているにせよ、死んでいるにせよ、相手に撃つことに意味がある……』

『危なくなったら直ぐに武器を捨てる。……よく生きた、エトナ』

『隊長……』

『ガングレド、エトナ機を回収、そっちに戻る』

やがて浅いクレーーター状の戦場を離れ、一機のパワードスースは再びビルとビルの合間の暗闇に戻る。

そこには先ほどの静寂はなく、いくつもの人影が動きまわっていた。

ビルの隙間、或いは廃ビルの屋上に立ちライフル、ヘビィマシンガンを取りまわす同型機が約二十機。

仲間が膨大な弾幕を作つていく中、その後方には巨大なトラックが何台も止まり、暗闇に動きまわっていた。

それは黒い巨人を收める程に大きなコンテナを牽引していて、紅い瞳の巨人はコンテナへと友軍機を引っ張つしていく。

『コウ隊長。更に増援が十機』

『作戦は変わらん、戦線を上げる　流れ弾に当たるなよガングレド。皆にも伝えろ』

『了解』

ガシャンと重たい音立てて肩装甲に壁の固定用ハンガー。

巨大なコンテナに収納され、黒い巨人はその場で蹲るままに、力なく項垂れ、紅い瞳の巨人は同じく片膝をつき項垂れる。

シュウウウウ……

装甲隙間から噴き上がる圧縮空気の解放により、舞い上がる長い銀色の髪。

そして首元の装甲が内側から開き、首の後ろから顔を出す人影が一つ。

「エトナ、大丈夫か」

「コンテナ内のライトに照らされる銀色の体毛。

鋭く細める紅い双眸。

鼻腔は獣の如く突き出し、牙を大きな口の端に覗かせながら、そこには狼の頭を持った男が巨人の肩に立っていた。

口元には通信用マイク。

天井を指す尖った耳がヒクヒクと動き、熱っぽいため息が白んで口の端から零れる。

銀色の尻尾は黒いスースから飛び出し風に舞い、巨躯が飛び降りるままに、目の前の友軍機へと足を運ぶ。

長い足の爪が歩きながらコジコジと床を叩き、コウと呼ばれた狼男は同じく首の折れた巨人の下へと歩いていく。

「エトナ、返事をしろ」

「待つて……ください。ちょっと、ハツチが歪んで……」
バキリッ

首元の装甲が剥がれ落ち、飛び出す人影が一つ。

そこには同じく顔が少し茶色い体毛に覆われ、尖った耳が黒髪から飛び出す『人間』がパワードスースから飛び降りてきていた。

ドロドロになつた白い肌。

キヨトンとなる同じ紅い瞳。

『獣人』と呼ばれる人間は、互いに見渡し、ニイと笑みを浮かべるままに、グニャリと指で互いをつついた。

「よく生きた……」

「えへへっ 隊長超格好いいですよ」

「ありがとう、アリシアの報告だと、送電施設がこの向こうにあると聞いたが」

「はい、隊長の行つてた通り 奴ら、ここから都庁まで電気を送つてているようです」

「敵の数はどうだ?」

「一杯」

「数えてくれ……」

「えっと　丘ちよいのエルザが配備されましたね。自走砲もいくつか配備されていました。

ただ送電施設自体に防衛機能はないように思えます」

そう言つてパイロットスーツの胸元から小型のPDAを取り出しつつ、年端もない少女はそう告げる。

銀の狼男は表情は強張つたまま小さく頷くと、肩越しに彼女、エトナのPDAを覗く。

「隊長、携帯の覗きこみはマナー違反です」

「固い事言うなよ　施設自体にシールドエフェクトは？」

「アリシアがスナイパーでつづいたけどなにもありませんでしたよ？」

「……。ぞろぞろ来るわけだ」

ペタンとげんなり気味に垂れる尖った耳。

肩を落とし苦い表情を浮かべる狼男横目に、少女、エトナは氣まずそうに笑みを滲ませながら首をすぼめた。

「どのみち皆相手するわけだしいいかなって……」

「お前が死んだら俺は悲しい……今後は危険の無い方法で探るようにな」

「　　はいっ

「少し休んでろ　　ガングレッド」

照れくさそうに身体をよじるエトナを横目に、狼男は耳元に取り付けた通信用バイザーに手を掛けた。

そして尖った耳の向こうに、弾丸の発破音に混じつて男の声が聞こえる。

『隊長。増援が更に十機　　更にファーレード外から二機に十機。上空から攻撃ヘリが見えます』

『頃合いだな　　フィールドを迂回して送電施設を破壊する。そちのチームには俺が入ろう』

『了解。我々は引き続き攻撃を続けます』

「戦線だけは崩すなよ。お前達だけが頼りだ」「期待に応えて見せます、通信終了』

ブツリと音が途切れる。

狼男は強張った表情のまま小さく頷くと、やがてバイザーの周波数を変え、今度は別の人間に通信を掛けた。

「ゴールドチーム ミハイル、ベス、ピーター、ハルキ。聞いているか」

『はいはいっ。聞いてます隊長つ』

『時間ですか?』

『やっぱ撃ちっぱなしは楽しいけど少しダれるぜ……』

口々に話す仲間の言葉に、苦い表情を浮かべながら、狼男はため息を漏らしつつ、彼らに命令を届ける。

「よし揃ってるな、ゴールドチームは今から部隊を離れフィールドを迂回して送電施設を破壊してもらひつ」

『了解。すぐ切り上げます』

「いっちは俺も入る 」

と、通信にノイズが入り、聞こえてくるのは甲高い少女の、嬉しそうな緊迫したような興奮した声だった。

『ユウツ、ダメだよつ』

「 ミアか……」

ペターンと頭に張り付く尖った両耳。

少しうるさぎりしたような表情を通信機越しに見せながら、ため息を噛みしめ、銀の狼はマイクに息を吐きかけた。

「で、どうした……」

『同じように迂回してこっちに近づいている連中がいる。こっちのソナーに今一瞬だけ映ったよ』

「 ガングレッドッ」

通信の周波数を合わせて、先ほどの男に話しかける

『攻撃を続けていますが、フィールド内で他に敵の姿は見えません。サーモも使っていませんが』

「ありがとう。前進しろ。各機散開して敵の迎撃にあたれ。少しでも前線を上にあげていけ。ただし」

『無茶はするな 了解ツ』

発砲音交じりの通信が途切れる。

「……地下の鉄道か」

『ステルスエフェクトを使用しているね。もたもたしているところが挟撃に合づよ』

「ああ……」

狼男は表情は強張らせたまま、踵を返すと眼前にそびえる五メートル強の黒い鎧の巨人を見上げた。

東京獣人反乱軍所属機体、オルフェト。

エグザスを作り上げたアトモス・ホークライン社が独自に作り上げた強化骨格の規格であった。

エグザスとは違い、小型核反応エンジンは使用せず、特殊なエネルギーを使用した機体で、出力は低めなもの、その動きはより柔軟により人間らしい動きを可能にした、まさにスースであった。

獣人の特質、その敏感な知覚にリンクさせ、索敵範囲を上昇させる能力があり、更に獣人の強靭な肉体を機体に反映させるために、搭乗者の能力によつて機体の出力、及び装甲強度が大きく向上する機体だつた。

エルザと違い、出力、性能と共に搭乗者の如何によつてすべて決まる、そんな特殊な機体が配備されていた。その中心にはその特殊なエンジンが関係していた。

銀の狼男、ユウ・ハヤテが乗る機体は、その機体弾力性を更に特化させた機体であり、機体の能力よりもパイロットの身体能力が優先される機体だつた。ただその装備はほぼすべて内蔵であり、内蔵機関砲、対装甲用ブレード、広範囲ステルス機能と特殊音波発生装置以外は装備されていない。

高機動を追求するために装備を内蔵した機体 そんなスラッシュした躯体の巨人を前にユウは銀色の体毛を逆立てる。

興奮に僅かに鼻息を荒くしながら、スゥと田を細め巨人の装甲に手を触れる

「行こうか、相棒」

『「コウ、どうするの?』

「……ミア。ソナーで確認できた場所は?」

『「ここから北東に一キロ先』

「ゴルドチームに連絡しておいてくれ……アルファチーム。アリシア、ミナト、ユン エトナは無しで」

後ろで愕然とした表情を浮かべる小さな女の子を横田に、狼男は通信バイザーを手に当て地面を蹴りあげた。

『「隊長?うちのエトナがまたなんかやらかしました?』

「嫁を戦場に出すお前によりましたよミナト……別動隊がこっちに来ている、迎え撃つぞ」

『「人出が少ないんですよ……うちらは』

「自分の手で守るように努力しても罰はあたらんよ ポイントをこっちで指定する、一分後に来い」

『「了解ツ」』

『「あ、隊長。私の評価は」』

「アリシア、後で説教だな」

『「すんましぇん……」』

通信が途切れ、銀の狼男はパワードスーツ、オルフェトの肩に飛び乗ると首の後ろに飛び移った。

そして、開いた首の装甲の中、ハッチの奥へ大きな体を滑り込ませる

暗闇に目の前に映る分厚い機械の棺桶。

立つたままの操縦。身体がすっぽりとはまるような感覚でコックピットに身体が収納される。

目元に自動でヘッドマウントディスプレイが取り付けられ、僅かに伸ばした手足が周囲の機械にすっぽりとはまる。

それは機体追隨の為の操作デバイス、狭い空間の中に手足が壁に

収められる。

そして項垂れるままに、狼男はディスプレイの向こうに映る、ムスッとした獣人の少女を見下ろし笑みを浮かべる。

ガシャリ……

身体をよじるままに、黒き巨人、オルフェト・オルタカスタムを立ち上がらせる。

『エトナは休んでおけ。俺が代わりに入る』

「ず、ずるい！」

『女は生きた方がいい』

「な、なんですかそれえ！？』

『俺の单なるわがまだ ミア、出るぞ』

紅い残光を引きながら踵を返すままに、音もなく地面を蹴りあげる巨躯。

ヒュオオオツ

突風を引きずりながら、高速で飛び出す黒い巨躯はまるで風の如く銀髪の後立を靡かせ再びメグロの廃墟へと姿を現した。

飛び出すままに振り返れば、そこには広がる浅いクレーターハー状の更地。

その中には崩れたビルの瓦礫を盾にして撃ち続ける味方オルフェトの姿、その奥で後ずさる敵機エルザの姿が見える。

前線は少しづつ上がっている。

その向こう、スポットライトに照らされ巨大な施設が見えた。

丸いドーム状の建物、周りには低い塀があり、その周りには巨大なパイプがまるでイ力の足のように八方に伸びていた。

日本連邦政府所有の特殊電力送電施設。

ユウ達が壊すべき建物が、浅いクレーターフィールドの遙か向こうに見える

(……ガングレド、頼むぞ)

戦い続ける仲間を横目に、風を切り翻す長い銀髪。

ドスンッ……ドスンッ

ビルの屋上に飛び上がるままに、ゆっくりと沈む廃ビル。

閃光を背に飛び上がる黒い巨人は、いくつものビルの屋上を伝い、宵闇の中を潜るように前かがみに駆けていく。

夜風を切りながら紅い目を暗闇に光らせ、弧を描いてビルから飛び降りる

『ミア、このあたりか』

ズウウウンッ

土煙を上げ、地面に降り立つ黒きオルフェト。

長い後ろ髪を靡かせながら、しなる膝を動かし立ち上がると、狼男は首を動かし周囲を見渡した。

『ここだよ、ランデブーポイントもここに設定したよ

『ありがとう』

地響きが收まり、静まり返る夜の街。

廃虚の街を流れていく風。

土煙が晴れ、周囲のビルの窓から顔を覗かせた異人の骸がモニターに映る。

グシャリ……

地面に転がる無数の死体を踏みしめ、ゆっくりとコウのオルフェトはビルの壁に腕を這わせ路地を歩く。だが敵の姿は見えなかつた。

崩れかけたビルが斜めに折り重なりながら、眼前の視界を遮るのみ。

カラーン……

傾いたビルの窓から剥がれたガラス片が装甲を撫でる。地面を押し込む巨人の足音が静かにビルの間を反響し、冷たい風が黒い装甲を撫であげていく。

グルルルウ……

緊張に喉を鳴らす

『……そこか』

ヒクリと尖る耳。

遠くから聞こえる、キャタピラが地面を擦る音。
鼻筋を掠めるは、金属の擦れる独特の匂い。

来る

『隊長、今つも』

『アリシア、コントがれ！ミナト行くぞー。』

『了解！』

『出力調整 パルスバスター』

後方のビルから飛び込んでくる中距離装備のオルフェットを背に、
紅き瞳のオルフェットは地面に大きく足を踏み込んだ。

ザクリッ

脚部の装甲が展開し、四本のステークが微振動を上げてアスファルトに突き刺さる。

『始動』

足元から噴き上がる土煙。

ソレと共に、地面が大きく崩れ落ち、紅き瞳のオルフェットは地崩れに吸い込まれるように土煙の中へと潜った。

ソレと共に後ろからついてきていたアサルトライフル装備のオルフェットが土煙の中へと飛び込み、遅れて極長のバレルを備えた対装甲ライフルを担ぎ一機のオルフェットが続いていく。

そこは更に深い暗闇。

入り組んだ道はまるで蛇の如く、縦横無尽にメグロの地下を走り、立体状に入り組んだ暗闇は正に迷路だった

東京地下メトロエリア。

地下一キロに及ぶまでに広がった地下鉄道のうねりの表層へ紅き瞳のオルフェットは降り立つ。

暗闇に迸る激しい閃光。

刹那、天井から降り注ぐ土煙を貫き、いくつも弾丸が小さな雨をとなつて、地下鉄道を走つた。

クワツと見開く紅い瞳。

身じろぎひとつで弾丸をよけるままに、四機のオルフェットは背後

から飛んでくる硝煙の匂いに身体を屈める。

そして、細長く入り組む鉄道の向こうへ、暗闇の中で銃撃を行うエルザを捉える。

数は五機。

圧倒できる

『突つ込む コン、アリシア。頼むぞ』

『了解、エンゲージ』

左腕から迫り出す鋭いブレード。

弾丸に目を細めながら、紅き瞳のオルフェトは脚部の補助スラスターに火を灯し、ゆっくりと身体を屈める。

飛び出さんと、黒い装甲を震わせる

『ミナート、俺のケツを持って、行くぞッ』

『張りきつて行きましょうか隊長！』

闇に走る紅い残光。

装甲の隙間から噴き上がる光の粒子。

屈む姿はまるで狩りをする夜の獣の如く
は光を放ちながら地面を蹴り飛び出した。

何百メートルとある距離は一秒の壁を越え、縮まる。

後ずさる暇すらなく、五機のエルザの目の前に、紅き瞳の巨人が、
大きくブレードで虚空を薙ぎ払う姿が見える。

一機の機体の表面に一文字に斬った痕が浮かび、火花が宵闇に断続的に光を放つ。

『遅い……！』

後ずさる二機を追いかけ、紅い瞳のオルフェトの背中から飛んで
来る弾丸。

片膝を折り、銃座を立てて放つ一発の徹甲弾は頭部を丸ごと粉々
にして、衝撃に一機のエルザを吹き飛ばした。

暗闇の中バウンドする一機のパワードースツ。

闇に尾を引く紅い瞳。

その一機の胸部に喰らいつくように、飛び出した紅き瞳のオルフ

エトは、突き出した内蔵ブレードを突き出した。

ガガガガッ

全重量を乗せ、火花を上げ装甲を抉る鋭い刃。

ビクンと僅かに喰らつた軀体が痙攣すると共に、音無く内蔵ブレードを引き抜けば、黒と赤の混じつた飛沫が中から噴き上がる。黒ずんだ装甲が僅かに闇に光り、紅き瞳は血飛沫を浴び倒れたもう一体を捉える。

スウと双眸を細め、巨躯を傾ける

風を切る鋭い剣閃。

振り薙いだ刃は僅かに真空を生み、無音の衝撃波が周囲の景色を歪め、頭部の無いエルザに一本の筋が浮かぶ。

それは闇にくつきりと浮かぶ斬痕。

死線に沿うように胸部が縦に分かれていき、火花を散らし一につに分かれた断面が露わになる。

背を向け立つ紅い瞳の巨人の背後で、大きく爆発を起こす

『残り……』

爆発を背に、立ちあがる巨躯。

爆風に銀色の後ろ髪を靡かせながら、紅い瞳のオルフェトはスウと闇に眼を細め身体を屈める。

ダラリ左腕を垂らすままに火花を立て地面を擦るブレード。。

最後の一機が後ずさるままに、ライフル弾を飛ばそうと携行小銃をにじり寄るオルフェトに掲げる。

ズズズズ

闇に迸る断続的な閃光。

胸元を抉る三つの大きな弾痕。

巨大な空薬莢が足元に落ち、三点バーストに掲げたライフルの銃口から白煙が噴き上がる。

ゆっくりと小銃を構えたまま倒れるエルザを横目に、ミナトのオルフェトは肩にアサルトライフルを担ぐ。

そして、アイサイトの向こうに、身体を屈める黒き獣の鋭い眼光

を見下ろす

『 良い腕だ』

『 一匹残してくださいよ…………』

『 遅いお前が悪い』

『 ひどい隊長。これが俺らのトップとか…………』

『 いやか?』

スウと細める紅い双眸。

左腕に内蔵ブレードが装甲に収納され、屈めていた身体がゆっくりと起き上がり、紅い瞳のオルフェトは三機の友軍機を見つめる。

全機の生存を確認する

『 うんにゃ。最高ですよ』

『 ありがとう。……ミア、奴らのルートはどこからだ?』

シコウウウウウ……

装甲の隙間、或いは関節から零れる光の粒子。

長い銀髪の後立を翻し、紅い瞳の残光を引き、オルフェトは入り組んだ周囲を見渡し、線路を踏みしめる。

『 ん。解析完了。そっちルートから来ているよ。地図をこっちで出すから』

『 いや。こっちから送電施設には入らん。ゴルドチームがやつてくれるだろ?』、こっちは挾撃が入らないように見張る。

他に挾撃の入りそうなところは?』

『 いくつかありそうだけど、今のところどこも反応はないね』

『 ポイントを提示してくれ。マンツーマンでオルフェトを向かわせる』

『 本気でメグロを落とすの?』

『 不利な戦いは今に始まつたことじゃない』

地下鉄エリアから撤退を始める三機のオルフェト。

地面を蹴りあげ、紅い瞳のオルフェトは地面を蹴りあげ、地上から入ってきた天井の穴へと戻ろうとする。

長い後ろ立てを引き、その場を去ろうとする

「フワリ……

銀色の後ろ髪が、舞い上がり、肩装甲を撫でる。

『！』

反射的に迫り出す左腕内蔵ブレード。立ち止まつた紅い瞳のオルフェトはそのまま後ろを振り返るまゝに、グツと身体を屈め暗闇に向き合つた。

『隊長？』

『風が来た……』

『どういう……』

『地下鉄に乗つたことぐらい、お前にもあるだろうコン』そして入り組んだ線路の向こうへ、蛇の如く大地の食い破る迷路の奥を覗く。

生温かい風に田を細める

『来るぞ！』

暗闇を再び破る激しい閃光。

ヒュオッ

風を切り、巨大な槍のような弾丸が、アリシアのオルフェトの腕部を持つていた対装甲ライフルごと根こそぎ持つていった。

『キヤアアツ！』

吹き飛び地面にバウンドして転がるアリシアのオルフェト。

ウンのオルフェトは後ずさるままに、闇の向こうから攻撃していく敵の気配に後ずさりつつ、狙撃銃を構えた。

だが矢次に降り注ぐ弾丸の中、照準はブレ、弾丸はあらぬ方向へと飛んでいく。

それでも、立ち上がるアリシア機をミナト機と共に庇いつつ、銃口を迷路の暗闇に向けトリガーを引き絞る。

『た、隊長……！』

『アリシア、どうだ！』

『くう……腕……痛い、かも……』

『引くぞ！ステルスエフェクト起動する！』

噴き上がる光の粒。

右腕の内蔵機関砲を放ちながら、紅き瞳にオルフェトの黒い装甲が一斉に花びらを開くように開いた。

そして開いた装甲の隙間から光の粒が噴き上がり、闇をつつすらと照らすままに四機の機影を光の中に溶かしていく。そして光の膜は膨れ上がるまに、四機の姿を完全に消し去り、やがて収縮する。

スウと小さくなり、やがて粒子が消えてなくなる頃には、オルフェトの姿は闇の中に沈んで消えた。

それでも止まない、闇を照らすマズルフラッシュ。

銃撃は止まず、暗闇の中、四機のオルフェトがいた場所へと十機のエルザは弾幕を浴びせかける。

敵を殺す様に確実に、銃撃を浴びせかけていく

『……………ユウ……………てめえ……………』

暗闇の中、呻くような声が闇に響いた。

『殺してやる…………絶対にだ』

それは怨みに満ちた『人』の声だった。

「大丈夫か、アリシア……」

線路の奥へと退避しながら、紅き瞳のオルフェトから降り、銀色の狼は片腕のなくなつた友軍機へと歩み寄つた。

周囲の一機も同じく線路の隅に座り込み、壁にもたれかかつたアリシアのオルフェトへと歩み寄る。

そしてヨロヨロと首元から這い出す人影を捉え、銀の狼男は地面を蹴り飛び上がる。

「隊長……すいません」

「よかつた……」

ホツと零れるため息。

そこには肩装甲に寄りかかるままに、あり得ない方向に曲がつた右腕を垂らす獣人の少女がいた。

だがそれ以外に身体的外傷は胸元の折れたアバラ骨ぐらいでユウは満足げにうなずく。

「生きているだけでいい……コン、ミナト、大丈夫だッ」

「よかつたあ……アリシア、ボケツとすんなよ頼むから！」

片腕の無いオルフェトの足元、黒い狼男のコンから飛び出す涙の罵倒に、アリシアはうつすらと笑みを零した。

と、スツと折れた腕に這う太い指。

痛みに体毛の滲んだ顔をしかめながら、目線を上げれば、そこには険しい表情を浮かべる銀の狼男の姿。

突き出した口腔を僅かに開き息を吸い、紅い瞳を細めて指を折れた部分に這わせる。

目を閉じて、囁く

「エトリア アストライア……」

手の平から噴き上がる光の粒。

刹那、囁く銀の狼男の手の平の中に円形の模様が浮かんでは空中に刻まれ、光の粒が零れた。

光の粒は、円形の模様から少女の腕を癒す様に纏つっていく。
そして光の膜に腕全体が包まれるままに、ポカーンと惚ける少女の腕の形が真っ直ぐになっていく。

ゆつくりと紅い瞳を開ける

「……少しは楽になつたか？」

「は、はい……今のは」

「仲間には内緒だ」　コソ、ミナト、アリシアを前線まで送れ」
手を閉じるままに、消えていく円形の模様。
ソレと共に光の粒もその姿を消し、コウは肩装甲の上に立ち上がるまに、線路に向ひつゝと振り向いた。

フワリ……

噴きこんでくる生温かい風。

ガシャン……ガシャン……。

ヒクリと耳を尖らせながら、遠くから聞こえてくる重たい足音。
にじり寄る敵意に逆立つ首の体毛。

徐々にだが、敵の気配が近づいてくるのが突き出た鼻をつき、鼻筋に皺を浮かべながらユウは険しく目を細めた。

「……敵が来る。時間がない」

「隊長は？」

「増援を連れて前線には戻れん。ここで食い止める」

「はあ！？」

惚けた声を上げるミナト、コソは同じくぽかんと耳を垂らし口を開いたまま絶句していて、ユウは小さく肩をすぼめた。

「まったく ならお前達が食い止めるか？」

「いや……でも……」

言い淀む二人。

蹲る彼女の身体を両腕に抱え上げると、黒い装甲を蹴りあげ銀の狼は一人の下へと降り立つ。

そして、一人にぐつたりとなる獣人の少女を渡すと、銀の尻尾を翻し獸は再び片腕のないオルフェトへと向かつ。

スッと手の平を黒い装甲に添え、ゆっくりと皿を閉じる

「……エトアス フアナトオルカ……」

「隊長？」

「……。俺一人でもどうにかなる、お前達は帰つたらゴルドチームの支援に回れ」

そう言いながら、ゆっくりと半壊したオルフェトから手を離すと、ユウは惚ける一人にそう告げた。

それは舞い散る菫のよ。

音もなく弾ける粒子の花びら。

刹那、装甲の隙間から無数の光が舞い上がりては、周囲の暗闇を照らし、ゆっくりと銀の狼に降り注いだ。

グッと掲げて広げる手の平。

吸い込まれるように光の粒が、銀の狼の手の平へと集まっていく。

それはまるで渦を描くように

「マジでやる気だこの人……」

「無茶はお前らより下を行つていいつもりだ。早く行け」

「……」

「ああ。俺のオルフェトを使え。お前達のオルフェトじゃ、アリシアの搬送はできんだろうし」

「しかも生身で戦うと言つ……ガングレドさん失禁しますよ
友達が待つてゐるからな……」

「はあ？」

「なんでもない……」

小さくため息をつくままにユウは手の平を下ろす。

噴き上がる光の粒。

そこには小石程の大きさの白い結晶が獸の手の中に漂い浮かんで

いて、狼は静かに手の平を閉じ、胸ポケットに収めた。

そして踵を返すままに、惚けるコンとミナトを促し、アリシアを

紅い瞳のオルフェトを搬送させる。

「ほら行け。ここは俺が食い止める」

「十分経つて帰つて来なかつたら……援軍にきますから」

「心配性だな……」

「アンタのせいでしょうがッ！」

怒号が古い地下鉄に逕り、ミナトはムツと顔を引きつらせながら

アリシアをユウのオルフェトへと乗せた。

そしてユンとミナトもオルフェトに乗ると、やがて三機の巨人が

銀色の狼を見下ろす。

少し心配そうに立つ三機の友軍を見上げ、銀の狼はペタンと耳を垂らし困った笑みを滲ませた。

「大丈夫、早めに帰るさ。銃も弾薬込みで結構持つてる」

『 帰つたらガングレド副長にチクリますから』

「後で怒られるさ。……行つてくれ」

『 あんたは俺達の希望なんだ。……死ぬなよ隊長っ』

「ここから百メートル行つたら地上に上がれ。敵はすべて本隊が対応しているが一応索敵は怠るなよ」

『 了解、御武運を』

迫り出す脚部のキヤタピラ。

土煙を上げ、騒音と共に一機のオルフェトはアリシアのオルフェトを肩に担ぎながら線路を走りだした。

噴きこんでくる風とは反対方向に、闇の奥へと沈んでいく

別に、一緒に戦つてもよかつた。

ペタンと零れる尖った耳。

スウと闇の中、紅い瞳を細め困った笑みを滲ませるままに、銀の狼男は腰に手を当て踵を返した。

そして暗闇の中、僅かに俯きながら地面を蹴り歩き出す。

巨大な迷路の中、反響する自分の足音を聞きながら、静かに息を

吐き出し花をヒクつかせる。

獣の顔を強張らせ、闇の中にゆっくりと目を閉じる。

ただ、これは俺の我がままだ。……最初から最後まで、全

部。

ザワリ……

風の向こうに感じる敵意に逆立つ体毛。

鼻筋に自然と皺がより、牙を覗かせ獣人は体を僅かに奮わせ、腰から一丁の拳銃を引き抜いた。

大口径の自動式拳銃。

五発カートリッジの大型弾を装填し、獅子鼻のマズルブレーキを覗かせる巨大なバレルを持つ大型拳銃だつた。

グッと握りしめれば、手に吸いつく感触。

それだけで安心感が胸を走り、狼はうつすらと口元に笑みを浮かべながら、獣顔を上げる。

暗闇の奥、入り組んだ蛇の如き道を伝い、やつてくる十機の気配に尖った耳を震わせる。

向けられる激しい敵意に、脚を止めて一丁の銃口を向ける。

鋭く、ナイフのように鋭く目を細め、狼は闇に紅く残光を引く

「……一週間ぶり、だな」

『……生きてたか……化け物が』

立ち尽くす銀色の獣人を前に、従軍を止める十機のエルザ。

ソレと共に十の銃口が狼男を捉え、その内の一本、白い装甲のパワードスージがゆっくりと彼の下に歩み寄った。

吐き気がするほどにドロドロとした敵意。

剥きだす憎悪。

七年前から何も変わらず

狼は二イと目を細め困ったような笑みを滲ませては、一丁の拳銃を構えたまま目の前の巨大な白い巨人に肩をすくめた。

そして、口を僅かに開いて、闇に囁く

「……よお、タクト」

『 グウ…… グウ・アトラ…… 』

「 やううか…… 」

『 殺してやる…… 』

それ以上の会話はなく、ただ獣は紅い瞳を細める。

ガシャリッ

殺意と怨恨を露わに、白いエルザは持っていた巨大な突撃小銃を両腕にサッと構えてトリガーを引き絞る。

ソレと同時に銀の狼は、拳銃のトリガーを絞り、マズルフラッシュ

ユが闇を裂く。

ドオオオオンッ

光に遅れて、激しい銃撃音が闇の中に響き渡った。

五話目（前書き）

英数字か漢数字に統一しきつて？イヤ（＊、＊、＊）うん、これ投稿して七日後削除してから直す事にする

2056年、一月十三日、午後六時七分。

僕は彼女と彼女の兄との三人で家路についていた。
名前は、綾川美沙。

僕の一歳下で高校一年生で、僕の好きな人だつた。色白で綺麗な黒髪は肩まであって、スラッとしていて出も少し背は低くて僕を見上げるくらいで。

笑顔がとても綺麗な、僕の大好きな人だつた。
明るい性格で皆に好かれていて、所属するテニス部でも優秀で顧問の先生が彼女を褒めていたのを覚えている。
非の打ちどころの無い、本当に素敵な人だつた。
ずつと一緒にいたかつた。

「どうしたの？ 夕君？」

「また何か考え方をしてたんだろ。ぼおつとしてるからな夕は」
「 拓斗は考えなしなんだよ、僕は色々考えてるの」「
彼女の隣に立っているのは、彼女の兄の、綾川拓斗。
僕の数少ない友達で、多分、僕の恋敵になるだろう人だつた。
スポーツも万能で、少し勉強はできないけど、それでも頭は回るし、彼女と同じくらい明るく、皆に好かれていた。
二人とも、僕にとつてあこがれの人だつた。
特に拓斗は、僕にとつてある種嫉妬を覚えさせるくらいに、優秀だつた。

「ぬかしある」

「……にひひつ、勉強だつて僕の方が上だしね
「 お前、俺が本気出したらちびるで」

「僕、スポーツなら君の本気見たことあるけど、勉強で本気を見たことないんだけど」

「あるぜ？」

「夏休みの宿題は僕が半分手伝つたよ？」

「あるよ、多分」

「ネタ潰し成功」

「くああああ。むかつくつ、お前ホントムカツクわつにひひつ」

地団駄を踏みながら歩く拓斗に、僕は肩を震わせて少し小気味よく笑う。

多分、彼はそれほど悔しくないのだろう。彼も自分が頭がいいのはなんとなくわかっているだろうから。

だけどそんな素振りをしてくれるだけで、僕の自尊心は満たされた。

その事も、彼はわかつているだろ？

悔しいような、嬉しいような　　僕は複雑な笑みを浮かべ、隣で歩く彼女を見下ろした。

クスクスと彼女は端正な顔を綻ばせ、嬉しそうに笑っていた。

「ふふふつ……お兄ちゃんも夕君も楽しそう。私も混ぜてよつ」

それだけで、胸が破裂しそうな程高鳴つて。

声が出なくて

「ふうんだつ。勉強なんぞできなくてもな、スポーツで俺は宇宙に出るんだよつ。宇宙バスケに出るんだよつ」

「お兄ちゃんそればっかり。勉強もできないと、外国人の人と喋れないよ？」

「美沙もそんな事言つ、お兄ちゃん悲しい……」

「だったら夕君みたいに勉強する？」

「肉体言語があるつ。外人なんざイエスとノーが使えれば後は体でぶつかればええ事よつ」

「だから毎日傷だらけなんだ……」

「あ、ち、違うの　　ああ、そんな目で見ないでお兄ちゃん気持ちよくなるうう」

「……夕君いこつ」

そう言つて悶える拓斗を横目に、彼女はギュッと僕の腕に腕をからめて、惚ける僕を引っ張る。

彼女の体温が伝わり、少し荒い息遣いが聞こえる。
少しまスツとしていて、それでいて少し微笑んでいるような小さな脣が見える。

惚ける僕を横目に見上げ、少し照れくさそうに笑う彼女がいる。
その笑顔がとても可愛くて、僕は顔を耳まで真っ赤にする

「……」

「……ねえ夕君」

小声で華奢な身体を寄せながら、彼女は肩にコシリと頬を擦りつける。

それだけで、僕はびしょ濡れもなく口がまたま動かなくななり、手足がびりびりと痺れる。

どうしようもなく、彼女の事で一杯になる。

息が上がり、寒いのに体の芯から真っ赤になつていいく

「み、美沙ちゃん……」

「えへへへつ……恋人同士みたいだね」

「……」

正直ここから先は、あまり自分が何を言つたのか、彼女が何を言つていたのか思い出せなかつた。

ただ、彼女が微笑んでいたのを覚えていた。

それだけが、胸の奥深くまで刻まれていた。

とても綺麗な笑顔だつた。

「ねえ……夕君。明日、誰からチヨンもらう事とかある?」

「え……えと、お母さんから貰つとか……犬のチロに上げるんだけど僕は……えと」

「ふふつ。男の子なのに?」

「う、うん毎年お父さんがあげる振りしりつて……「うん……」

「 私から貰つても嬉しい？」

「 も、もちろん……うんつ、嬉しい……嬉しいよつ」

「 ぎ、義理だからね」

「 う、うんつ……」

「 お兄ちゃんと一緒にだし 勘違いしけや やだよつ 「 う、うん……でも、嬉しい」

「 明日、ちゃんと作るからねつ」

嬉しそうに、彼女は微笑んだ。

夕闇の中、少し頬を染め、黄昏時の空の下、僕の腕に華奢な身体を寄せながら彼女は、僕にそう告げた。

僕はというと、全身真っ赤にして、頭から湯気が出そつなくらい息を上げていた。

正直なところ言つと、血管が切れて死にそつなくらい、心臓がバクバクといつていた。

そんな音を彼女に聞かれたくなくて、僕は胸元を僅かに抑えた。それでも、心臓の音は止まらなかつた。

「こらあああ！そんな異性交遊お兄ちゃんは認めんぞおおおおー！」

飛び込んできて、僕らの愛大入つてくるのは拓斗。

ムスッとこちらを睨む彼の横顔の向こう、突然の兄の行動に惚ける彼女の顔が見えた。

そして、僕の方を見た。

優しく微笑んでいた。

ホツとするような少し寂しいような 街を見下ろし、坂道を上がつていく。

いつも一緒の、長い坂道。

隣同士の家を目指し、共に歩いていく。

そして明日も、同じように、登校時間、三人で隣同士の家を出て、この坂道を降りて同じ高校へと行くだろう。

ずっと一緒に

「おい、何話してたんだタ？」

「な、なんでも……」

「……美沙あああ、お兄ちゃんに黙つてタと付き合つ氣かあ！？」

「バカ兄貴ッ！」

鉄拳が右頬にめり込み、拓斗が吹き飛ぶ。

変わらぬ日常の風景。

ずっと續けばいいと思つた。

だけど、それも程なく終わるだらう。

拓斗はスポーツ推薦で他の大学へと行くだらうし、美沙ちゃんは頑張つていゝ大学に入るこだらう。

僕はといふと、親の頼みもあり、高校を出たら働くつもりだ。

今年は高校一年の一月。

もう進路を決めないといけない。

別々の道を歩いていかないといけない。

だから、伝えたかつた

「……美沙ちゃん」

「何タ君つ？」

彼女は僕の呼び掛けに微笑んでくれた。

それだけよかつた。

明日、彼女に告白しよう。

ちゃんとしたチョコを作つて 本当は女の子が男の子に上げ

る日なんだけど 彼女に渡そつ。

振られたつていい、このまま何もないまま終わらせたくなかつた。

決別するために、或いは次につなげるために

僕、タ・アトラは明日告白する事に決めた。

明日、一月十四日。バレンタインデー。

あの日に、俺は彼女に愛を告げることを決めた。

人類の割が死滅した、あの地獄の日に、俺は彼女と共に生きようと決めた。

五話目（後書き）

一人称と三人称のコラボオオオオオ

六話目（前書き）

この辺りからちょっと文章があやしくなつます（下手くそ的な意味で。まあ一いや一いや見てやってくださいな

『…………ここらへんだな』

遠くに見えるは、スポットライトに照らされた巨大なドーム状の白い施設。

あちこちに聳え立つ煙突からは、煙ではなくうつすらと白い光の粒子が噴き上がり、警報が暗闇の中に絶え間なく響く場所。そこから遠く、三キロ離れたビルの屋上。

四機の黒装甲の巨人、オルフェトが四つの廃ビルの屋上に立ち、足もとのコンクリートに固定用のアンカーを打ちこんでいた。

肩には、巨大な筒が一本。

両腕にはグリップとトリガーが付いたフレームが握られていて、三機のオルフェトは肩に装備した一本のバレルを外し、残りの一機は周囲を警戒する。

そして、巨大なバレルを連結し、出来上がったのは、約全長十メートル超のパワードースツを優に超える巨大砲台。

それら三つの砲塔が、白いドーム状の施設に向けられ、バレルの底部から三本脚の脚立が迫り出す。

そして隣のビルの屋上に脚立が突き刺さり、三機のオルフェトがグリップとトリガーを抱えたままその場に膝をつく。

そして膝の装甲が展開し固定用のアンカーが迫り出す中、アイ사이트の向こうに巨大な施設を捉える。

『エンジン直結』

『了解。…………本隊は?』

『信じるよ。皆うまくやる。これで戦いに一歩前に進める。隊長を

信じるんだ』

『うん』

胸元の装甲が開き、剥き出しになる連結部
アンカーが計四基地面に刺さる中、砲台のストック部分と胸元の
コンポーネントが連結し、砲塔の先端に光が灯る。

『エネルギーを装填 約五秒後に一斉射を行つ』

『了解。ピーター、敵は?』

『ソナーに反応なし 行こうつ』

『カウントダウン開始』

シユウウウウウツ

装甲の隙間から光の粒子が噴き上がり、ソレと共に砲塔の先から
零れる光が膨れ上がっていく。

そして今にも破裂せんばかりに、光の奔流がバレルの内側で暴れる。

『三、二、一』

回転し始める十メートル超のバレル。

ドーム状の施設を捉えながらガタガタとバレルが上下に揺れ、排
莢口から光の粒子が止まることなく噴きだす。

バレルの回転がさらに早くなり、加速に先端から光の塊が顔を出
す。

グッとトリガーに指を添え、アイサイトに真っ白なドームを捉え
る

『ミハイル!』

『ゴルドチーム、敵施設を攻撃する!』

龍の如く飛び出す奔流。

夜に沈んだ街を真っ直ぐに抉る光の刃。

三つの光の柱は一つにまとまり、ビルの廃墟を一瞬で灰に融かし、
三キロ先の一直線にドームを貫いた。

追随するようにソニックブームが立ち上り、土煙と共に周囲のビ
ルを吹き飛ばしドームの装甲をめくり上げる。

そして光の奔流はその射線を太くしながら、内側まで紅く融かしていく。

『破壊を……確認つ』

『よつしやああああああ！』

ドームの装甲を破り、内側から噴きだす紅い爆炎。

光の斜線が細くなつていく中、ぽつかりと割り貫かれた施設の前後の壁から大きな爆発が立て続けに起きた。

崩れしていくドーム状の施設。

立ち上るいくつもの火柱に混じり、光の粒子が噴き上がって灰に混じつて薄暗い闇の向こうへと昇つていく。

ドオオオオンッ

爆音は遅れて、四機のオルフェトの下に届き、ビルの合間に反響する。

そしてひと際大きな爆発が起きて、ドーム状の施設が内側からはじけ飛んで、小さなキノコ雲が登つた。

そして崩れる建物と巨大な爆発に衝撃波が土煙を巻き上げながら、津波の如く噴き上がり、メグロの廃墟を飲み込み始める。

『退避するぞ！』

『ヤツホオオオオッ。成功成功ッ！』

コンポーネントから外れる巨大な砲塔。

立ち上がるままに固定用アンカーが収納され、三機のオルフェトは廃ビルから降り立ち土煙の津波に背中を向けた。

そしてビルの合間、本隊に向かて、ビルがいくつも倒壊して入り組んだ路地を走行していく。

大きな衝撃波の壁が迫り、次々と倒れていく廃ビルの群れ。

いくつもビルを押し倒し、砂塵を巻き上げながら、爆風が四機のオルフェトを撒きこまんと迫る。

ガガガッ

瓦礫が装甲を叩き、アイサイトに砂塵に呑まれた灰色の景色が映り始める。

『ピーター！』

『シールドエフェクト展開ツ、空間位相転移するツ』

四機のオルフェトが走行しながら集まる中、光の粒子が四機から噴き上がって砂塵に包まれた四つの機体を包む。

ガタガタと瓦礫を弾く分厚い光の膜。

やがて砂塵の津波が去つていくまで、光の膜の中で耐えながら四機は本体まで走つていく。

やがて晴れる砂塵の向こう、弱々しいマズルフラッシュが闇を裂くクレーター状の更地が見えてくる。

そしてその奥に、黒いオルフェトが集まる友軍機の姿がアイサイトに移る。

『ゴルドチーム、報告を』

通信に響くのは、ライフルの重たい発砲音と共に一人の落ち付いた男の声だった。

ガングレド・ハイエク。

獣人反乱軍の副官であり、総大将であるユウ・アトラの右腕としてのポジションを持つ優秀な獣人だった。

ホツと通信機にため息を零しながら、四人はそのガングレドに告げる。

『ゴルドチーム、作戦完遂しました……』

『ねえねえ見たガングレドさんつ、僕らやつたよツ！』

『イエエエエイツ、最高ツ！』

本体に混ざる四機の黒いオルフェト。

その言葉に、通信機越しのガングレドの声に、同じくホツとしたような声色が混ざる

『よくやつた　全機に通達。これから撤退行動に移る、各員弾幕を張りつつ交代、ポイントSに集まれ』

土煙の中に弾けるマズルフラッシュ。

送電施設を失い、街全体を照らすスポットライトが次々と途切れ、

深い宵闇が廃墟の街に広がり始めた。

弾幕を張りながら、計四十機の黒きオルフェトが撤退を開始する。ソレと同じくして、日本連邦軍のエルザもまた、破壊された送電施設の方向へと下がつていき、広大な更地に響く銃撃音が小さくなつていく。

『……ユウ……貴方も早く』

そして、宵闇の中、ビルの間を潜り、黒いオルフェトの群れが下がつていき、再び廃墟のメグロに静寂が広がる。

聞こえてくるのは、砂塵が風に巻かれて傾いたビルの窓を撫でる音。

そして、割れたアスファルトの下、地下から響く、断続的な発砲音とキヤタピラの走行音。

そして、絡み合う一体の獣のうめき声。
地下の巨大な迷路の中、戦う一人がいた

「……よしつ」

手作りじや、さすがに引かれるかなと思つて買つたのは、少し高い店に寄つて手に入れたチヨコレート。

鞄の中に入れて、少し早めに僕は学校へと家を飛び出した。

「行つてきますつお父さん、お母さんつ」

「はあい行つてらつしゃいつ」

「ちゃんと勉強してくるんだぞ」

父と母は笑顔で僕を見送つた。

いつもと変わらない、日常の風景だった。

僕は玄関を飛び出し息を切らし、まだ太陽の昇りかけた朝の七時
にあの坂道を走つていく。

ぎこちない顔は、二人に見せられなかつた。

キリッとした顔を、彼女に見せたかつた。

ふと、坂道を降りて行きながら街を見下ろせば、朝焼けが海の方
から昇つてきて、街を紅く染めていった。

灰色に染まつていた家の屋根は、光を浴びて様々に色を帯びる。
ゆつくりと朝焼けへと流れしていく白い雲は、頬を染める。

広がる海は太陽の光に赤い絨毯を引き、空は茜色に染まっていく。
木々は海の風にざわざわと揺れ、遠くで犬の鳴き声が聞こえて、
朝がやつてくるのを告げる。

一月十四日。

朝がやつてくる。

注ぎ込まれる日差しに、胸の中の期待が膨らむ。

僕は冷たい空気を吸い込み、昇る朝日を全身に浴びながら、少し

だけ顔を強張らせる。

(……彼女に告白しよう)

好きだつて。

手を繋いで、一緒に同じ空を見ていたいって。僕は昇る太陽を横目に、また坂道を下りていく。

彼女より先に、下駄箱に手紙を入れよう。

それから 彼女に会つて、それから そう考えながら、顔がみるみる真っ赤になつて、息ができないくらいに胸がドクドク言つて苦しかつた。でも、いやな苦しさじやなかつた

十億人。

残つた『人』はそれだけだと思つた。

だけど十年もたてば状況はさらに変化

悪化していった。

突然の人々の変異に対応するために、残つた人々はどうしたかといふと、未来へと時間を早めることに決めたのだ。

その為に各地に存在する緊急用シェルターに入り、冷凍睡眠に入り、状況が収まるのを待つた。

もちろん、入れない人も多くいたが、それでも世界各地に存在するシェルターは約八億人を収容して、未来へと旅立つた。

旅立つ、はずだった。

考えてみれば、できるわけがなかつた。

この変異は、あらゆる人に平等にして起きるものだつた。それが冷凍状態であるうと、何であろうと変わらない。

そしてシェルターも、元は核戦争用で、こんな状況を想定して作

られたものではなかつた。

それ以上に、人は多すぎた。

そんな不確定要素が多く孕んだ未来への旅がどうなつたかは、言うまでもなかつた。

原因は様々ある。

冷凍睡眠に入った『人』の中に『異人』化を起こし、残つた人間すべてが殺された。

或いはシェルターが破られ、異人、或いはシェルターに入り損ねた人間達に壊滅させられた。

或いは、そもそもシェルターが機能せず、入つた人間すべてが凍死した。

およそ、八億人が入つたシェルターは、全て　　洩れなく全て、壊滅した。

残つたのは一億人の『人』と『獣人』だけだつた。

ただ、その一億人の『人間』も戦いの中で、徐々にだが減る傾向にあつた。

アメリカと中国と呼ばれた国はなくなつていた。たがいに降り注いだ核が命を灰に変えていつたからだ。

日本人は、もう一万人を切つていた　　殆どの人気が併合先のアメリカで核の灰を受けたからだ。

残つたのは、数千人の『獣人』と数千人の『人間』だけだつた。この十年。

世界は更に『人』を間引いていつた。

異人化は大凡収まつたものの、もう社会を再構築できる程に、世界は体力を残してはいなかつた。

文明はおよそ死滅した。

残つたのは、荒廃した世界と、その中で辛うじて生きて、戦争を続ける『人間』の悪意だけだつた。

『人』はこの世界に存在していなかつた。

人はただ、戦い続ける。

例え世界が消滅しようとも、相手を殺そうと、戦

命を削り
い続ける。

甲板に収納されていく二十機の黒きオルフェト。

収納ハンガー・エリアには壁に六メートル強のパワードースツが固定されたまま、整備員に修理されていた。

皆、身体の一部、全部に体毛や耳など器官の生えた獣人だつた。

皆、顔を見ればわかるとおり、年端もいかない子どもばかりだつた。

皆、次の戦いに備えて、必死な様相で溶接器具と耐熱マスクを顔にあてがいながら、修理を続けていた。

そこは戦艦『エルドラド』

獣人反乱軍が所有する一隻の機動戦艦の一隻で、比較的小型であるものの、戦闘用設備は充実した核エンジンの艦だつた。

大型巡洋ミサイルを三門装備し、実弾砲門は前方と左舷右舷にそれぞれ一門ずつ配備され、CIWSは十基、至る所に装備された。またパワードースツは計四十機程配備できた。

船全体は通常の流線形の形とは違ひ比較的丸みを帯びた大型艦で、通常上記装備は全て装甲の中に格納されている。

また『エルドラド』は海に潜る事も出来、格納されている装備には対艦魚雷発射砲門を前後に一門ずつあり、水圧軽減の為に広域シールドエフェクトも発動することができた。

そんな『エルドラド』は今、薄暗い東京湾の入り口から離れ海に潜ろうとしていた。

「……まったく、ユウ殿は無謀が過ぎる」

「……。そのセリフは何回も聞いた」

「何回も聞いてなぜ同じことをするのですか！？」

「バカだからな、俺は……」

ペタンと垂れる尖つた耳。

ハンガーエリア上部、吹き抜けを走る通路を歩きながら、銀の狼、コウは首筋を摩りながら苦々しく顔を歪めた。

後ろには同じく黒い体毛の狼男、ギャングレドがブツブツ呟きながら歩いてきている。

さながら家庭教師に怒られているようで、コウは気まずそうに爪で鼻筋を搔き、ジトリと横目にギャングレドを覗きこむ。

「だが……助かったらう？」

「…………そのセリフ、皆に言えますか？」

「…………すまんよ」

ギロリと恨めしげに蒼い瞳をこちらに向ける副官に、コウは怖々と首をすくめるままにトボトボと通路を歩いていく。

「隊長おおおー！」

と、通路の向こう側から走ってくる人影が四つ。

田を見開けば、そこにはまだ年端の行かない獣人の子供達、ゴルドチームのミハイル、ピーター、エリザベス、ハルキだった。

皆十代もいかない少年少女のような瞳で、銀の狼の腰にしがみつくままに田を輝かせ彼を見上げた。

「ねえねえ隊長、僕らやったよつ」

「ドオオオンツってやつたんだぜ、あそこ」

「えへへつ、僕らのおかげだよねつこの作戦」

「ねえ……僕も頑張ったよ……攻撃はしないけど」

皆嬉しそうに我先にと話しかけていて、コウは少し困ったような笑みを滲ませつつ、四人の頭をそつと撫でた。

「よくやつた……報告はちゃんと後で聞くが……なによりお前達が生き残つて、俺は嬉しい」

「隊長……」

「本当に……お前達が俺の作戦の最大の功労者だよ」

『ウンツー』

ペタンと撫でやすそうに少し垂れた四人の耳が途端に尖り、皆通り立ちながら嬉しそうにはしゃぎ始める。

皆、子供のようだつた

「えへへっ、嬉しいな……お父さんに褒められてるみたい」

「隊長は皆のお父さんだよ。強いんだよ」

「うんっ、強い。絶対に連邦軍をやつつけるんだから」

「み、皆……隊長の邪魔だよお……」

「あ……じゃあ僕達行きますねっ」

「ばいばいっ隊長！僕らオルフェトの調整行かないと」

そう言つて走り去つていく子供たちを、ユウは複雑な表情を浮かべ手を振る以外に何もできなかつた。

ただ、手を振る自分自身に嫌悪感を覚えながら

「……」

「ユウ殿。彼らは自分の意思で志願しました」

「そんな状況にしたのは、或いは俺かもしだんな……」

「……戦いに死はつきものです」

「余つたパイロット枠に彼らをあてがつたのも、パイロット枠に空席を作つたのも俺だ」

「……」

「現在の戦況、戦力、その他報告を聞かせてくれ。……ミアも呼んで今後の状況を考えたい」

「はいっ」

「…………ガングレド」

銀の尻尾を靡かせ、ユウはクツと顎を引いて前を向いて、顔を強張らせ強く床を蹴り歩き始める。

紅い瞳を細め、息を吐き出す

「ありがとう……一緒にいてくれて」

「……。隊長は皆の希望です」

「なら、早く終わらせないとな……」

「　はいっ」

前を歩く大きな背中を見つめながら、黒い狼のガングレードは力強く頷いた。

やがて通路は扉をくぐりぬけ、吹き抜けを過ぎて壁が左右に広がり、その通路の隅に少し大きな扉があつた。

扉の脇に設置された遺伝子リーダーに自身の手をかざしては、開く扉。

中は殺風景なものだつた。

大きな机と本棚とベッドのみが設置された部屋。壁に大型のモニターが設置され、薄暗いライトが部屋を照らしていた。

総大将である、ユウ・アトラの部屋だつた。

「あ、遅かったねユウッ」

「すまんな、時間が掛かつた」

入り口付近のボタンを押せば、ライトが付き、部屋の隅ベッドの縁に座りながら、小さな人影が見えた。

着こんだ白衣は床につき、ほつそりとした脚をプラプラと投げ出し、佇むのは小さな少女。

肌は真っ白で獸耳はなく、長い栗色の髪に蒼い瞳を浮かべ、そこには『人間』がいた。

十代前半の子供。

「ツコリと微笑めば、年相応の表情が見え、少女は床に足を下ろすまさに部屋に入るユウに歩み寄る。

そして笑みを滲ませ、メガネ越しに苦々しく顔をしかめる狼男の目を覗きこむ。

笑みが深まる

「……あんまり見るな」

「やだ」

「……ミア。戦況はどうだ?」

小さなため息と共に、ガングレードと共に部屋に入ると、ユウは机

の上に腰を落とし腕を組んだ。

少女は表情一つ変えず、彼のベッドの上に座り、壁にもたれるガングレードとコウを見比べつつ話し始める。

「まあメグロの施設を破壊したことで、都庁のシールドエフェクトは50%システムダウンしたね。

後はシブヤの方にある地下軍事施設だね」

「そうか……ミア、メグロ戦での報告を聞きたい」

「戦死者は五名。エリス、ユウキ、タイレン、ジョージ、ピエール」すらすらとそう言つて、ミアと呼ばれた少女は白衣の裏から数枚の紙の束を取り出し、彼に手渡した。

それは戦死報告書。

一人ひとり、どのような形で生き、どのような形でこの反乱軍に入り、どのような形で死んでいったかが克明に書かれていた。

皆若く、エリスは女の子で、最年少十五歳だった。

どの言葉も最後は『メグロ送電施設制圧戦にて戦死』と書かれていた。

皆、死んでしまった。

「ティッシュあるよ?」

「…………最後に取つておくれよ」

「仕方ないよ。メグロ戦のために陽動小隊を五つも用意して東京の各地に送つたんだから、戦力の年齢がどうしても低くなるんだから。パイロット自体、というより獣人自体が減っているんだから」

「陽動部隊はどうだ?」

「皆全員帰還したよ。怪我してる連中が多いけど、今は皆医務室にいるよ」

「後で俺も行こう。…………弔いにもな

「僕も付き合いつよ

「ありがとう……」

短く言葉を切り、コウは小さくミアに頭を下げると、視線を黒い狼のガングレードに向けた。

「……。現存兵器の状況　　といつよりどれだけ弾薬を使ってどちらくらいオルフェトを壊した?」

「本隊で中々に摩耗しました、とはいって、半壊機は五機の身であり、後は簡易補修を行えばすぐにでも出せます」

そう言つてガングレドは手に持つていた紙の束を同じくコウに差し出した。

そつちはさらに細かな文章がずらすらと並んでいて　　コウは苦々しい表情と共に、ベッドに座る少女に手招きをした。

キヨトンとなる蒼い瞳。

スツと立ちあがるままにミアはトトトツと小走りに駆けより、彼の差しだす報告書を手に取つた。

そして、恨めしげな、少し困ったような表情を彼に見せ唇を尖らせる

「何?またぼくに読ませるの?」

「俺バカだからな……」

「もう……オルフェトは五機半壊

さつきの五人の分だね。

残りはそれほど壊れていないよ。

使用した火器は……うん、弾薬が相当減つてるね。火器自体は超長距離圧縮重工ネルギー波動砲が破壊されているね

「後で俺が補充しておこう。重粒子砲の方はアトモス社に頼む

「お願い　　後は……ソレほど、かな?」

「何よりだ……」

トトトツ駆けてくる小さな足音。

疲労の滲む深いため息と共にコウは腕を組んで、手を差し出すとニアから受け取つた報告書を机の上に置いた。

そしてガングレドとニアを見比べるままに表情を少し強張らせる。

「さて……今後の予定だが

「隊長、そろそろシブヤの地下軍事施設を責める方が良いかと」

「……前回と合わせて、まだヨコハマの送電施設を破壊しきっていない。これで都庁に入れるか?」

「部隊を二つに分ければ或いは　　」

「　　わかつた。俺が二でガングレドがハだ」

「隊長……真剣に考えています?」

「な、なんで疑う?……」

ムツとする黒い狼のガングレドに、コウは焦りに目を細めでは、たどたどしく首を傾げた。

だがガングレドは深いため息と共にガクリと頃垂れるとあきれた様子で首を振った。

「……私が全部隊の七割を牽引して送電施設を破壊します」

「ん、わかつた。同時期がいいな。俺は部隊三割を率いてシブヤに攻める事にしよう」

「こいつらの守備隊はどうするのコウ?」

「と、不思議そうに首をかしげていたミアに、コウは顔を上げると、小さく肩をすぼめた。

「……十五歳以下の子供達を守備隊に回す。その上での三・七分割だ」

「結構縮小するよ、大丈夫?」

「ぞろぞろやつてきて成功したのは今回だけだ。出来る限り早く終わらせ早く帰る」

「君は大丈夫だらうけど、ガングレドは平氣?」

ムツと顔をしかめでは黒い狼は目を細め、不思議そうに首を傾げる少女に、低い声で呻く。

「　　これでも元軍人だ。小娘に心配される謂われはない」

「傲慢は人を殺すよ」

「肝に銘じている、だからこそ、七割の部隊を隊長より任せていただくのだ」

「少くない?」

「ごり押しさするつもりはない　　私は隊長ではないのだから」

「だよね」

困ったようにペタンと垂れる尖った耳。

クスクスと笑う少女、そしてムスッとする黒い狼男の視線に、ユウは肩身も狭そうに首をすぼめた。

「……今後の作戦はこれでいいな……詳しい事は旗艦に戻つて考えよつ

「了解です」

「じゃあ解散。俺は少し医務室に足を運ぶ」

そう言つて机の上から離れるユウを、ガングレドは小さく首を振つて制止する。

「いえ。隊長は少しお休みください」

「疲れているように見えるか?」

「目が淀んでいます」

「……」

「いやな事があつたのでしょうか。少し心を鎮めて次に備えてください。大将がそれでは式に關わります」

「……子どもたちに気取られたか?」

表情が少し強張り、自身の紅い瞳を手で覆つユウの姿に、ガングレドは小さく首を振つた。

「いえ……ですが、貴方の疲労は組織全体の疲労に繋がります。どうかお休みを」

「……代わりに行つてくれ」

「御意」

「すまん……」

「私はこれで失礼します」

にこにこと笑い小さく手を振る少女を横目に、ガングレドは強張つた表情のまま優に頭を下げ部屋を後にする。自動で閉まる扉。

一人きりになり、ミアは項垂れる銀の狼男の横顔を覗きこんでは、無邪気に首を傾げた。

「ユウ……聞いてあげよつか?」

「いや、いい」

「そっ。なら後でお酒持つてくるね。ユウの好きな甘いシャンパン」「ああ……すまない、ニア」

「ううん。後で新型機の話もしたいからね。何かあつたらぼくの部屋に連絡ちょうだい」

無言のままユウは小さなため息と共に頷く。

ニアはそれでも表情一つ変えず笑顔のまま、頷いて見せると白衣を翻し踵を返して小走りに部屋を出て行いつと部屋の扉の前に立つた。

「……ねえツ」

自動で開く扉。

廊下へと足を一步踏み出しながら、少女は白衣を翻し俯くユウへと向き合つと仄かに微笑んだ。

「一年前、君に聞いたよね」

「」

「今度、答えを聞かせてほしいな そつ思つただけツ」

「……いつかな」

「うんつ」

ニアは部屋を出ていき、再び自動扉が閉まる。

零れる小さなため息。

ユウは首の後ろについたスーツのボタンに指を添えると、ベッドへと足を向けた。

身体を覆つっていたスーツの上半身が縦に二つに割れ、覗かせるのは全身を覆い尽くす銀色の体毛。

薄いパイロットスーツを脱ぎ捨てるままに、ユウはベッドに身体を横たえては天井を見上げた。

「……タクト」

瞼に映るのは、怒り狂つた老け顔の青年の顔。

躊躇なくトリガーを撃つ仕草。

年齢以上に時間を重ね、心の苦しみに悶えながら、銃を向けるかつての友人の顔が眼に映つた。

彼の言葉が、耳に残つた

殺してやる……！

彼の憎悪が、胸にこびり付いた。

美沙は……美沙は死んだんだぞ！

自身の悔恨が、ただ胸の奥でぐるぐると渦巻いた。

お前が殺したんだあああ！

「……ああ」

のつぺりとした薄暗い天井を見上げ、一人そろそろと、ユウは体を横たえベッドの上に背中を丸めた。

少しでも長く眠ろう。彼は、強く目を閉じ、意識を闇の奥へ向ける。

それでも、闇の中に、彼はユウの前に立っていた。
ユウを睨み、銃を向けていた

(……美沙……僕は……)

銃弾が飛んでくる。

頭に弾痕が浮かび、闇の深みへと身体と意識が吸い込まれていく。
どこまでも落ちていく

正しい事をしていると、到底思えるはずもなかつた。
ただ、こうすることで、少しでも俺達が未来に近づけると思つて
がむしゃらになつていただけだつた。
平和な、誰も争う事の無い未来へと。

夢物語だ。

そんなもの、追いかけるだけ無駄なのに、俺は、追いかけた。
そんな俺の為に、今回で五人、前回で十人の仲間を失つた。

皆、俺の為に死んだ。

俺は、彼らの為に何かしてやれたろうか。

俺は……………

なんで……死んでしまつたんだ。

僕は

夢を見た。

「隊長！ここですっ！」

ヨコハマ電力送電施設内。

沿岸に出来たメグロと同じく巨大なドーム状の施設で、山に囲まれたそこは正に自然の要塞だった。

当時は、メグロと違い強力な空間位相転移による防壁が張られて

いて、正直圧縮エネルギーによる重粒子砲でも貫くことはできなかつた。

だからどうすればいいかと考えた時、俺は数人の仲間と共に潜入することにした。

それは、おそらく正しいのだろう。

だけど、警備網は多く、中心部に爆弾を設置するために、多くの

対人兵器、ロボットと戦い、俺達は疲弊した。

辺りつ頃には、仲間の装備はボロボロになっていた。

「……皆、大丈夫か？」

「ああっ、まだまだいけるわ！」

「少し弾薬が心もとないけど……なんとかなります」

「弾薬が少ない奴はこっちに来い。俺が補充する」

クセリアス・アナトリウス。

十年前、俺がこの姿になつて、使えるようになつた『魔法』の一つで、これを使えば持てる弾薬が自然に回復した。

ただ、これを使っても壊れた武器や装備を直せるものではなかつた。

何より、仲間の心的な疲労は目に見えていた。

ここから地獄の復路をめぐるには、恐らく誰かが脱落することは容易に想像できた。

「……よし。爆弾を設置するぞ！」

その可能性を、俺は無視した。

「これでいい。……ガングレード、ガングレード！」

通信機に叫べど通信は届かない。

恐らく電磁障壁が張つてあり、これでは遠隔操作により爆発は起こせないだろう。

俺は仲間を見比べる。

既、少し困ったような笑みを浮かべていた。

「……やりますか、隊長」

制限時間を受けようにも、長ければ、敵に見つかり、短ければ仲

間はおそらく巻き込まれるだろう。

かといってエルクシュ・アルト・ラナフェル 防壁魔法を展開して、爆発に耐えられる自信もなかつた。

そして、こうして考へてゐる間にも敵の気配は徐々に近づいてきてゐるのが、耳と鼻を伝つて感じた。

ざわざわと全身の体毛が逆立つ程に、俺は恐怖した。
もしかしたら、仲間を失うかもしれない事に

「……五分だ」

「了解です」

「行きましょう」

別途時限式の小型爆弾をポシェットから取り出し、俺は設置した爆弾に連動させると仲間と共にその場を後にして、
後は事務的だつた。

送電施設最奥部に三か所、タイマー式爆弾を設置し、時間を動かし、俺達はその場を後にした。

そして、直ぐさま敵の姿が目の前に現れた。

「どけえええええ！」

切り込み隊長はいつも俺だつた。

そして敵は、無数の触手と大きな羽を背中から生やした、八つ脚の二つの首、七つの目を持つ人影だつた。

『異人』だつた。

連邦政府の人員はこちらと同じく相当減つてゐるらしく、警備兵に捕らえた『異人』を使い警護させていた。

どこもそうだった 殆どのエルザ搭乗者が『人』ではなかつた。

それほどまでに、『人類』は疲弊していた

「 鈍い！」

サイレンけたましい通路の壁こと切り裂くナイフの斬痕が『異人』の身体に浮かぶ。

刹那、飛び散る血飛沫。

顔に降りかかり、真っ赤に染まつていくスースと銀の体毛。やがて真つ二つに敵が崩れるままに、ナイフを投げ飛ばしては、ナイフは光る粒子の尾を引いて飛び出した。

アクスフラ・アトラシア。

強化したナイフは飛翔しながら空間ごと割り貫くように、掠めるだけで敵の腕や頭部を一瞬で血煙に変えた。

そして通路奥に突き刺さるナイフ。

紅い血飛沫が辺りにまきちらされ、警告灯に紅く染まる通路に黒く壁に滲んでいく。

かつての『人』がまた一人、死んでいく

「……行ぐぞ！」

迷いは許されなかつた。

時間はなく俺は後ろに続く仲間を引き連れ、狭い通路を走り、事前に作成した脱出ルートそのままに走った。

マズルフラッシュに続いて弾丸が背後から掠め、敵を抉つっていく。背中を押されているような気がして、俺はナイフを口に咥え、身体を屈めながら拳銃を二丁敵に突き出す。

薬莢が宙に舞い、身体を屈めて走る俺の肩を叩いて地面に転がる。敵を殺していくば、それだけ仲間が助かる。

だけどソレは『人』の数をさらに減らす事だった。

俺は、これでいいのか、俺は

「あ、隊長！」

「……ああ」

考えを払い、ルート通りに進みながら。通路の向こうに、スポットライトの光が零れる夜の宵闇が見えてくる。出口が近い。

時間も近い。

予断は許されず、俺は仲間を引き連れ、地面を蹴りあげヨコハマのドーム状の送電施設から飛び出した。

そしてうつすらと施設の周りを覆う光の膜を見上げる

10

軽く絶望した。

そこには出口の周りを塞ぐように、白い装甲のエルサが、辺りを囲んでいたのだ。

手には巨大なライフルを担ぎ、虚ろな蒼いアイサイトがじっとこちらを見下ろすままに、トリガーに手を添えている。

一
た
隊
長

宙を舞う、巨大な空薬莢。

エルグジン
アルト・エガーリー!

虚空に手を掲げるままに、光の円形の模様が手の平から広かり、大きな半透明の盾が目の前で弾丸を弾き飛ばす。

それでも止まぬ幽絶的なアリバシニシと力量の砕煙立て続きに飛んでくる弾丸の雨に、身体が後ろに持つていかれ、

背後に送電施設がそびえる

擲げた光の盾の向こうには、廢墟の街が広かり、その中に逃る人々がいた。ズルフラッシュ、未だにガングレードの陽動部隊が戦っていた。

時間がなーい。

焦りが身体を無理やりに動かす。

彼らを助けたい。

び歩き出す事にした。

光の扇に向こう。巨大な弾丸は身体を押し込まれながらも爪を食い込ませ、地面を蹴りあげる。

卷之三

『תְּהִלָּה יְהוָה יְהוָה יְהוָה יְהוָה יְהוָה יְהוָה』.

聞こえてくるのは、懐かしい声だった。

怒りが滲みしゃがれた、潰れたようなソレでもわかる。

およそ、十年ぶりの声だつた。

あの日、生き別れた友達の声だつた。

あの地獄の日に、姿を消した　いや、彼の下から俺が逃げて、隠れていたはずなのに。

彼は追ってきた。

白いエルザに乗つて、俺の前に立つていた。
大型の対物狙撃銃を担ぎ、肩にガンランチャーとミサイルポットを装備して、青ざめる俺に向け、立つていた。

「……タクト……」

『殺してやるうううううううう…』

気が緩んでしまった。

ミサイルの爆発と大口径のガンランチャーのマズルフラッシュは、掲げた光の盾を一瞬で剥がしかけた。

それ以上に、重たい衝撃に身体が軋み、膝をついてしまう。

ぎりぎりと手の平を掲げた右腕の骨が悲鳴を上げる。

光の粒が飛び散り、薄っぺらい光の膜の向こうに、爆風が噴き上がり、弾丸が爆炎の中で突き刺さる。

ダメだ。

このままでは俺の力でも防ぎきれない。

仲間が殺される

「お前ら！ 一旦建物に隠れろ！」

引くに引けない状況の中、俺は巨大な爆弾の中に隠れと、無茶な指示を後ろの同胞の出した。

囮われている状況で、それでもこの弾幕から身体を隠れさせるには十分だ。

彼らを助けないと。

彼らを

「隊長を助ける！ 頂撃でえええ！」

振り返れば、そこにはライフルを掲げ、トリガーを引く仲間がいた。

皆、真剣な表情で弾幕の向こうにいる、パワードスーツに銃撃を始め、或いは手榴弾を投げつけていた。

こちらの弾丸は光の膜を通り抜け、敵にあたり、小さな爆発に一機のエルザの足が破壊されその場に崩れ落ちる。それでも敵の弾幕は止まず、仲間は崩れ落ちる俺の肩を支え、銃を撃つ。

弾幕を作り、道を作ろうとする

「隊長！ 隊長だけでも逃げてください！」

「ダメだ……ダメだ！」

「……僕らは死ぬんじゃありません。次につなげるために、皆が幸せになるために戦うんです！」

「隊長、言つてくれましたよね。俺らを幸せにしたいって、皆で平和な場所に行くんだつて」

「……こんな姿になつた僕らにほほ笑んでくれたのは、隊長です」

「一緒に生きようと言つてくれたのは隊長です」

「俺らを気遣い、こんな世界に居場所をくれたのは隊長です」

「僕らは 隊長の信じる未来を信じます……」

皆、微笑んでいた。

「……隊長一人なら、ここから逃げられます」

「 生きて、皆を未来に導いてください」

「ユウ隊長ならそれができる 行つてください」

光の壁にひびが入る。

もう耐えられない。

逃げてくれ、逃げてくれ ビうして、俺なんかのために、俺の為に笑ってくれるんだ。

俺は

「 隊長、生きて 」

光の壁が破られ、吹き飛ばされる俺の身体。

仲間は、流れ込んでくる爆炎の中に消えた。

霞む視界の中、皆、最後まで笑っていた

『ユウウウウウウウ』

拓斗の地獄から噴き上がるような声が、爆炎の中にいつまでも響き、直ぐさま弾丸が俺の方へと飛んできた。

俺は、地面に節々を打ち付け痛む身体を引きずり、走った。

仲間を見捨て、ここから逃げようとした。

程なくして、送電施設から大きな爆発が起きた。施設の周囲を覆うバリアフィールドが消失し、爆風と共に俺の身体は空高く吹き飛ばされた。

最後まで、タクトのうめき声が聞こえていた。

仲間の言葉が、頭の中にグルグルと渦巻いていた。

この日、第一次襲撃作戦は、失敗した。

結果から言うなら、ヨコハマ送電施設は、未だ最低限の機能を残したままだった。

送電機能を切り、都庁を制圧しなければ、この作戦は成功しないのに、俺は第一手からして失敗した。

最低だ。

最低な大将だった。

仲間を見捨て、作戦は失敗し、何もできずに、俺は気がつけば、送電施設の周辺都市の廃墟に身体を投げ出していた。

およそ七百メートル、夜空高く飛ばされ、そして地面に体をぶつけたようだ。

それでも、身体の節々が痛んでいるだけで済んだ。

俺だけが、生きていた。

「……ハヤト……アニス……ミーシャ……オードリー……」

宵闇をかき消すように、赤々と炎が送電施設から立ち上り、深い夜天を真っ赤に染め上げていく。

黒い灰が空へと昇り、海風に消えていく。

俺は

生きてください、隊長。

頭の中に、彼らの声が聞こえた。

彼らは記憶の中で、ただ優しく微笑んでいた。

俺は、ただこえなく涙を流し、昇る炎の明りに目を細め、立ちつくしていることしかできなかつた。

その日、俺の仲間が十人死んだ。

皆、大切な仲間だつた。

こんなくそつたれな世界に生まれた、誰一人手放す事の出来ない

仲間だつた。

「……起きた？」

気がつけば、涙があふれていた。

目を開けば、そこには薄暗い天井と少し広い部屋が、滲んでぼやけた視界に映つた。

ベッドのそばに誰かいる。

霞んだ眼を擦れば、そこにはメガネを掛けた栗色の髪の少女が微笑んでいた。

手には大きなボトルが一つ。

そしてグラスが二つ。

「一緒に呑もう？」

表情を崩さず、少女、ミアは静かにそう告げると、ベッドの縁に座りながらコウに囁いた。

ヒクリと尖る耳。

ムクリと巨躯を動かし起き上がりがあれば、微かに関節が軋みを上げ、特に肩に痛みが走りコウは顔をしかめ肩を押さえる。

自身の身体を見下ろせば、まだ着替えていないようで銀色の体毛を帯びた上半身とスーツを着た下半身が見えた。

床に投げ捨てたはずのスーツの半身はすでになく、コウは寝ぼけた目で隣に座るミアを見下ろす。

「……すまない」

「えへへつ。泣いてる」

「……ああ」

涙が伝った痕が、体毛の濡れた痕となつて突き出た鼻筋の根元を

伝い、銀の狼は静かに目尻を拭つた。

スクツと立ちあがる華奢な体。

両腕にシャンパンのセツトを持ちながら机の上に、ニアは楽しそうにシャンパンのコルクに手を添える。

ポンッ……

何もせずとも、自然と零れるコルク。

泡が口の端から零れ、少女はグラスに白いシャンパンを注ぐと口に差し出した。

「はい」

「……何か、用があつたのか?」

「ううん」

優しく首を振る少女。

ユウは小さなため息と共にグラスを受け取ると、僅かに開いた口腔へと白い液体を流し込んだ。

裂けた口の間から僅かにシャンパンが溢れ、銀の体毛が濡れた。

「……甘い」

「おこしこでしょ」

「……今どくだ?」

「もう少しで旗艦『アストライア』だよ」

シャンパンを注ぐ音、泡の爆ぜる小気味いい音が部屋に響く。

自身のグラスに白く澄んだ液体を注ぎ、ニアはこちらに振り返ると、再びベッドの縁に腰を下ろした。

そして紅い瞳をメガネの奥に覗かせながら、ユウの真紅の瞳を見つめる。

眠たそうに細めた狼の目に、優しく微笑む

「……少し眠れた?」

「ああ……」

「いやな夢だつた?」

「……。ああ……」

「よかつた」

それだけ囁くとソックと少女はユウの大きな毛むくじゅらの手に自身の手を重ねてコツリと肩に頬を寄せた。

そして足をパタパタと前後に動かし、天井を見上げる。

そんな嬉しそうな少女の横顔を、ユウはグラス片手にほんやりと見下ろす。

「どうしたんだ？ 今日はとても近いな」

「ううん ただ、昨日の君は、とても寂しそうだったから

「……」

「夜明けが近いね」

「昨日、友達に会った」

「よかつたね」

「ああ……敵だったが、それでも元気そうだった……」

「うん」

「あいつは何人も仲間を傷つけた。何人も仲間を殺してきた」

「うん」

「……だけど、それでも生きている事が心のどこかで嬉しく感じていた。同時にひどく憎く感じていた」

「うん……」

「俺は、どうしたらしいんだろうな」

「 前に聞いたよね。君はなぜ戦うのかって」

少女は優しく微笑みながら、そう尋ねた。

ユウはハツとなつて紅い瞳を見開き、ぐりぐりと顔を擦りつける

少女のあどけない笑顔に表情を曇らせた

「なぜなの？」

「……。わからない」

「うん」

「未だに はつきりとわからない。相手を殺したいのか、戦い

を終わらせたいのか……」

「うん。またいつか答えてくれたらいいよ

「すまない……」

「ううん。君の自由にしたらいい。ぼくは君に従うよ」

変わらず少女は微笑んでいた。

「あ、そうだ。新型機なんだけどね、もう少しで出来上がるってアトモスから連絡があつたんだ。

一週間後には『アストライア』に搬送できるんじゃないのかな?」

「俺の、か?」

「君の専用機だよ。魔法を使う異端の『獣人』の君のみが操れる『レム、生きた機械』君と同じ命を持つもの、魂の器」

「……ソウルオープ、だつたか?」

「覚えてるよね、多分ユウも」

「……あのビルの地下にあるでかい石か」

「そして、この世界を作った元凶」

「……」

「動力として組み込んでる物としては、今のオルフュトの五倍ぐらいかな?それでも君の考える作戦には支障はまつたくないけどね」

「よかつた……」

「都庁襲撃作戦には間に合ひんじゃないかな?納期を一ヶ月も送らせてるのが正直あたまにくるけど」

ムスッと口を尖らせながらチビチビと口にシャンパンを付ける少女に、ユウは困ったようにうつすらと笑みを滲ませた。

そして宥めるように、彼女の栗色の髪を撫で、笑い声を含ませる。「ふふっ、迷惑を掛ける……」

「ほあんとつ。ぼくらにも計画つてものもあるんだからせつせと仕事してほしいよねノロマ会社は。」

それでいて武器はまた別段階で作つてる段階つて絶対バカにしているんだけど。

君の要望通り、内蔵兵器中心でよかつたよ。これで丸腰同然の納品とかそれこそアトモス社襲撃せざるを得なかつたよお

「ああ……」

「はあ……都庁襲撃　君の要望通りに進めるよ?」

「ああ。『アストライア』もソレ用に調整を進めておいてくれ」「うん。君はぼくが絶対に殺させないよ。もちろんみんなも、ぼくが設計した兵器が皆を助けるよ」

「ありがとう、ミア」「

ユウはそう言って少女の手を強く握りしめた。

紅い瞳を細め、強く彼女の鉄目を食い込ませる。

少女はハツとなつて目を見開くと、慌てて顔を伏せては、ちびちび飲んでいたシャンパンのグラスを唇で食んだ。

「あんまりそういう目で見ないでほしいな」

「……？」

「いいよ。君はそういう人間なんだから……」

「す、すまんな……」

「いいだッ。慰めに来て損したつ」

そう言って、シャンパンのグラスをユウに押し付けると、ミアは白衣をバタバタとさせて部屋の入口へ飛び出した。

ユウは戸惑いながら、彼女の背中に手を伸ばそうとする

「お、おい……」

「もう……ペース狂うなあ……」

「……？」

「帰るつ。『アストライア』に戻つたら次の作戦考えるよー。」

「お、おう……」

少女はそそくさと部屋を後にして出でていく。

そして閉まる前に、扉の前に立っていた人影にギョッとして立ち止まり、ミアは更に速度を上げて通路を歩いて行つた。

人影はムスッとした表情もそのままに、首をかしげつつ部屋へと入る。

「……ミアは何かあつたのでしょうか?」

「俺を慰めに来てくれた、と……」

黒い狼のガングレードは、表情は変えず合点がいったように目を見開いては、小さく頷いて見せた。

「……」「ンビですな……」

「まあ……」れでも十年来の付き合いだからな

「腐れ縁は、私よりも上ですかな」

「……そうだな」

「恋人、とはまだ呼べないようですがな」

胸を走る僅かな痛み。

「……。茶化すなよ」

零れる熱っぽいため息。

ユウは俯くままに、グッと胸元の体毛を搔きむしると、表情を強張らせるままに立ちあがりガングレードに向かひ立った。

「何かあつたか？」

「オルフェト及び各種兵器の改修状況を知らせにきました。後医務室に行きましたが隊長に来てくれとアリシアにじこねられました」
やれやれとあきれた表情を滲ませるガングレードに、ユウはキヨトンと目を見開いては、程なくして可笑しそうに肩を震わせた。

「あははっ……わかった。すぐに行くよ」

「後、戦死したメンバーの葬儀についてですが」

「『アストライア』についたら執り行つ。それまでじこで準備だけはしておこう」

「はい」

「……。階で見送つてやらなことな」

「申し訳ありません、細々とした報告のみで」

深く頭を下げるガングレード。

ユウは小さく首を振ると、壁の隅に埋め込まれたクローゼットに手を伸ばし、服の袖に腕を通した。

「いいや。お前の声が聞けただけでも、俺は嬉しい

「隊長……」

「『ハマ戦……まだ早いが、お前に仲間の命を預けるぞ』

「全力で戦い、全員で帰る 貴方が告げた言葉のままで」

「ああ……」

ズボンに銀の尻尾を通し、コウは踵を返すと、ガングレードと共に自身の部屋から通路へと一步を踏み出した。

通路は明るく、ゴンッと水が装甲を叩く音が静かに響く。まだ水の中なのだろうコウは尖った耳を震わせ、海流のさめ氣に耳を閉じながら心地よそうに口の端を歪めた。

もう少ししたら『家』に帰れる。

そんな機体を僅かに胸に膨らませ、コウは医務室へと通路を歩いた。

「あ、ユウ隊長ッ。みんなみんなっ隊長着てくれたよ」

「ひい声を小さくしろ。寝ている奴もいる」

「……えへへつ。嬉しい、来てくれたんですね」

「お前がごねるからな」

「美沙の事……忘れたのかよ……！」

忘れたわけじゃなかつた。

あの日の事を、忘れられるわけがなかつた。今でも、夢の中に

前達が現れて、胸を強く締め付ける。

「お、隊長じゃないですか。なんですか？俺ら中年の裸体でも見に来ました？」

「目が腐るからそれだけはやめろ」

「結構傷つきますねそれ……」

「お前らが女だつたらなあ……」

「あははっ、奥手のくせにして何をおつしめるのひら」

「！？」

「聞いてますよ、またミニアヒヤン夜這いに会つたの、何一つ手を

つけなかつたんでしょう

「……ただ腐れ縁だよ」

「にひひひ。やっぱ俺らの裸体が狙いなんでしょう知つてますよ」

「やめて……」

ただ、それでも今を生きないといけない。

俺は『獣人』で、タクト、お前は『人間』だ。戦つなと言われたら、おそらく無理な関係だろう。

人と獣人の溝はそれほどまで深まつた。

それ以上に、人類は減りすぎた。

「ちょっとお、隊長は私のお嬢さんになる予定ですかからねッ！」

「あ、無理無理。コウ君は今絶賛予約枠いつぱいでアリシアちゃんみたいな小さい胸じやどう考へても」

「ていうかあんまり釣り合つようにも」

「うつさい筋肉ダルマども！今度口利いたらぶち殺すぞ！」

「……すんましぇん……」

「敵より怖いっす……」

俺は別に『獣人』の未来を救いたいわけじゃない。

ただ、俺の周りにいる、仲間を平和な未来へと一緒に歩いていくたい、そう考へていてるだけだ。

美沙は、そんな俺を許すのだろうか。

俺は

「隊長、泣いてます？」

「お前らが生きててくれて、嬉しいんだよ」

「……えへへつ、今度も生き残りますよ」

「ああ……俺が死なせない」

「私も、絶対に隊長を、皆を死なせやしませんからつ」

「あ、俺も」

「俺もだ、隊長にずっと付いていくぜつ」

「ありがとう皆 すまんな、しんみりさせてしまつて」

「おしつ。じゃあ俺がなんかやりますよ。隊長見ててくださいねつ」

「ああッ」

静かな医務室が騒がしくなつていき、やがて医療班の人間に怒られるまでの少しの間俺達は笑い声を交わし続けた。

これは最期じゃない。

未来を繋げるために、明日も笑つていられるように、ずつと生きていこう。

その為に 戦おう。

今日は、相当僕はそわそわしていた。

「タ……なんか今日顔を紅くないか？」

「う、うんにゃ……」

机に顔を突っ伏しながら、クラスメイトに話しかけられて慌てて僕は顔を伏せた。

自分でもわかってる。

すごい緊張してるって。

手の先からつま先までびりびりってなんだか痺れて、胸はバクンバクン跳ねあがって頭は朝から真っ白になつて、目は潤みっぱなしだった。

今朝、下駄箱に手紙を置いてから、身体がおかしくなりそうだった。

まだ一時間目なのに放課後まで耐えられるだらうか

「うう……やばいかも」

「何がだよ……」

「拓斗……いる?」

「うん? いつもの場所じゃないのか?」

そう言えばそうだつた。

いつも三人で、僕らは校舎の中庭のベンチに座つて、一緒にご飯を食べるのが日課だつた。

多分、拓斗は先に行つたんだろう。

美沙ちゃんと一緒に、僕を待つているんだろうか

「……はあ

美沙ちゃんの笑顔が頭に浮かぶ。

それだけでまた頭の中真っ白になっていく。

振られるかもしれないのに、僕はバカだ、本当にバカで単純で何も考えなしの無謀の塊で。

それで

「あ……」

ドオオーンッて心臓が跳ねあがった。

たつた一声なのに、僕の身体は机に突つ伏しながら、火のようになくなつて石のように固くなつた。

「えと……お兄ちゃんどこに行つたか知つてます?」

「ああ、拓斗。えとお前ら三人と一緒にじゃないのか?」

「うん、そうなんですけど」

息ができない。

心臓が跳ねて跳ねる。

「部活じゃね? まあ探せばすぐ見つかるさね」

「う、うん……ありがとう」

彼女が傍にいる。

すぐ傍にいる

「あの……夕君」

「

背中を軽く摩る感覺。

突つ伏しながら、もう息ができなくて、彼女が何を言つているのか半分も頭の中に入つて来なかつた。

ただ、聞き取れた言葉もあつた。

「屋上……放課後で待つてるね……」

頭の血管が切れそつた。

彼女の少し荒い息遣いが聞こえる。

踵を返しながら、スカートが揺れる机の角に擦れる音が聞こえる。

少し恥ずかしそうに彼女の足音が聞こえる。
彼女の姿が瞼の中でも奥にハツキリと映る。

今すぐ会いたい。

あつて伝えたい。

ああ、なんでぼくは『放課後に会いましょう』なんて文章を最後に手紙に書いたんだろうか。

会いたい、伝えたい

「くううううううー！」

「お前なんか今日怖いわ……何をそんな力どるんや？」

ガンガンと机の脚を蹴り、興奮を抑えながら、僕はただただ時間を過ぎるのを待った。

そして時間はゆっくつと、だけど確実に過ぎていった。

五時限目。

六時限目と時間は流れていき、気がつけば掃除をしながら見上げた時計は午後三時半を指していた。

指定した時間は四時半。

はやく終わらせないと。

僕は疾風の如き速さで掃除を終わらせ、机を並べ直し、躊躇そうになりながら教室を飛び出した。

「あ、おい夕」

「ち、ちよつと行つてくる、ごめんっ」

「……いや、頑張れって言いたかっただけなんだが」

思えば、あの時、チョコレートを渡し換ねていた。

俺にとつて、心残りの一つだった。

屋上についた時、夕焼けが眩しかった。

空は恐ろしいくらいに茜色に染まり、遠く、海の向こうへと夕日が沈んでいくところだった。

もうすぐ四時。

待つた時間は体感的に長く、その場で何度も足踏みをしながら、俺はあの日、あの屋上で待ち続けた。

「……え？」

世界が終るその日。

その瞬間、茜色の空を抉り海とは反対方向の、都会の街、東京の方向から紅い光が真っ直ぐに空へと昇つた。

紅い光の柱は徐々に中太りしていき、やがて大きな球体が空と地を繋いだ柱の真ん中にできた。

そして、破裂する紅い球体。

血しぶきは、真紅に空全体を染めていき、うつすらと波紋のようなものが東京を中心に世界へと広がった。

校舎の頭上を一瞬でよぎり、次の瞬間、茜色の空が紅く染まつた。血のように紅い空が、血のように紅い空気がこの地球全体に広がつていった。

「ゴーン、ゴーン……」

四時のチャイムが鳴る。

世界崩壊の始まりを告げる大鐘が街に響く。
程なくして、断末魔にも似た悲鳴が校舎の中に響き渡り、校庭の中にいた人影が次々とその形を失つていく。
そして別の姿へと形を変えていく。

学校に『異人』が現れた、今日はその最初の日だった。

『アストライアに着艦しました。各員降りる準備をして搭乗口に集合してください』

太平洋の真ん中。

蒼い海に揺られながら、滑らかな装甲を纏い、巨大な船が漂い浮かんでいた。

丸みを帯びた流線型の艦。

継ぎ目を一切見せない程に純白の装甲は滑らかに海の水をはじき、光の粒子が装甲表面から噴き上がる。

窓は一つもなく、細長い卵を彷彿とさせる船は背部に宇宙航行向けの大型スラスター・バー・ニアを三基装備し、先端に航空機などを発進させる滑走路のように長いデッキが取り付けられていた。

海に浸かった底部は中型の艦、エルドラドを収容する程に大きな搬入口が設けられ、その姿は宇宙船のように大きかった。

搬入エリアから排出される海水。

やがて海水の中から灰色の大きな船が、床と天井から迫り出すハンガーによつて固定され乗降デッキが床から迫り出してくる。

そして分厚いハッチが開き、出てくるのは何十人と言つた獣人。

彼らを迎えるのは、海水の排出された搬入口エリアに集まつていくその何倍もの獣人の人影だった。

その数は数百人。

皆、顔や体の一部が異人しているものの、その目は幼く、或いは見えぬほどに衰えていて、皆年端もいかない子供や老人だった。或いは手や足が一部欠損していた不自由な人たちだった。

ここは旗艦『アストライア』

収容人数一千五百人。

世界の獣人のうち多くが集まる、反乱軍にとっての白き箱舟だつた。

「皆……嬉しそうだな」

『ええ』

部屋のモニター越しに搬入エリアを見つめながら、そこには抱き合つ獣人達が見え、或いは喜び合つ人達がいた。

皆嬉しそうに声を上げ、反響が広大なエリアに響いていて、ユウは自分のことのように口元を綻ばせると、通信マイクを口元に添える。

「皆降りたか？」

『後は居残りの整備班のみです』

「迷惑を掛けた……少し挨拶に行つてから降りることにするよ」

『はい』

ダックフルバッグを肩に担ぎ、ユウは部屋を後ににしてオルフェトの収納ハンガーへと足を運んだ。

「皆ツ」

収納ハンガーニリアに響く張り上げた声

そこには『エルドラド』の搬入口へと運ばれるオルフェトがあり、その傍に整備員の姿が見えた。

皆歩み寄るユウに手を振つている様子が見え、ユウは彼らの仕事場から少し離れた所から叫ぶ。

「ありがとうツ、皆！今後また戦いは続くかもしれない、皆が培つた技術と経験をその時の為に。頼りにしている、皆！」

『ハイツ』

「先に船を降りる、皆も仕事を終わらせ次第船を降りてくれ。船の修理は居残り班にやらせる！」

以上だ、手を止めさせて済まない！」

『了解です隊長!』

大きく手を振る人影が、上部の吹き抜けの通路から見下ろせ、ユウは同じように大きく手を振ると、踵を返した。

少し後ろ髪を引かれるような思いを胸に抱きながら、ユウはそのまま搭乗ハッチへと足を運ぶ。

「少し疲れているだろうか……」

『緊張しているんですよ、隊長に声を掛けられて』

「俺はアイドルではないのだがな……」

『鏡をご所望ですか?』

「なんでだ……」

「遅いッ」

通路に響く怒号に、ペタンと垂れる耳

搭乗ハッチに足を運べば、そこにはメガネの奥に恨めしげな視線を覗かせるミアが立っていて、ユウは気まずそうに首をすぼめた。

「ん……何かあつたのか?」

「もうつ、皆待ってるよつ」

ヒクリと尖る片耳。

そう言つて駆けてくる少女の下に歩み寄ると、ユウは突き出した鼻筋を指で搔きながら不思議そうに首を傾げた。

「何が?」

「こつち!」

毛深い手を引っ張られるままに、ユウはハッチを飛び出し、差し込むライトの明りに目を細める。

轟く歓声。

思わず尖った耳を閉じてしまつ程の声の群れ。

皆、こちらを見上げ、自分のことのように嬉しそうに叫んでいた。惚けるユウの名前を、或いは涙を流しながら叫んでいた。

「皆……」

「君を待っていたんだよ。ほら、あこせつしない」とつ

「……」

戸惑いにキュッと丸まる尻尾。

ユウはキヨトンと目を丸くしながらも、ミアに連れられるままに乗降エスカレーターを降りていく。

そして駆けよる人達の群れに向き合いながら、彼らと手を繋いでいく。

「ユウ様ツ、よくお帰りになられましたつ」

「本当に御無事で何よりです……」

「聞けば十何機の敵エルザを破壊したとか、本当にユウ様の御武運は天に轟くものかと……」

「僕諜報部のお兄ちゃんに聞いたつ。先生凄かつたんだつて」

「紅い目のオルフェト格好いいよつ。僕も大きくなつたらあれに乗るの、先生みたいにあれに乗つて一杯戦うのツ！」

「あ、私もつ紅い目のオルフェト乗るつ」

「私も先生みたいに戦いたいツ！」

そう言つてユウの手を強く握る老婆、或いは子供たちが人の群れの中に見えた。

皆、ユウの下に足を運びながら、それでも体の弱い人達を気遣つている様子が見え、ユウは膝を折り、彼らの目線で優しくほほ笑んだ。

「ありがとう、皆……ただ、俺のまねをすると、ガングレドが目を吊り上げて怒つてくるから覚悟しておけよ。

ガングレドは怖いからな……」

『ハイツ、先生ツ！』

「つたく……」

ユウは小さく肩をすぼめるまに、彼らに両腕を引っ張られながら立ちあがると辺りを見渡した。

ヒクリと動く鼻先。

漂うのは、少し哀しげな匂い。

視線を動かせば、そこには一人輪の外で、一人の獣人に付き添わ
れながら佇む老婆の姿が見えた。

「……が口口口口トしていて、田も開かないよつで、杖をつきながら優しくじぢらを見上げていた。

「……皆、じつちへ」

銀の狼は紅い瞳をスウと細めるままに、子供達、老婆を引き連れるままに、輪の外にいた老婆の下へと歩み寄った。

「お婆さん……」

「おや……いい声だねえ……心が洗われるよつだよ……」

「でしょり。……帰つてきましたよ」

「お帰り……よお生きて帰つてきたねえ……」

そして毛深い手を摩れば、弱つた耳を尖らせ微笑む老婆。体毛に覆われた顔の肉は僅かに垂れ、心音は弱々しく、それでも杖について一生懸命生きている。

ゆつくりと開く手の平。

手の平の体毛から噴き上がる光の粒。

舞い上がる光はまるで生きる童雪の如く
の田下に指先を添えては息を吸い込んだ。

田を閉じ闇の中に輝く光を覗く

「エトリア アストライア……」

ゆつくりと開く紅い瞳。

手の平に浮かんだ円形の模様が小さくなつて閉じた手の中に吸い込まれ、ユウは老婆の顔を覗きこむ。

ゆつくりと開いていく瞼。

そこには光を映す老婆の綺麗な黒い瞳があり、銀色の狼をハツキリと捉えていた。

「……お婆さん」

「おお……見える……」

「……よかつた」

「……あ、あんたが、ワシに光をくれたのかい……？」

「……」

自身の口元に添える人差し指。

「コウはゆっくりと立ちあがるままに、戸惑つ老婆に優しく微笑むと無言のまま頭を下げその場を後にした。

そして遠くで手招きするガングレドに呼ばれるままに歩いていく。

「今行く

「……ありがとう、本当に……本当に」

「俺こそ、ありがとう……」

やがて咽び泣きながら深々と頭を下げる老婆を横目に、コウは後ろについてくる獣人に振り返って叫んだ。

「出迎えてくれて本当にありがとうございます。俺はこれからまだ残った仕事を片付けたい。皆は他の人達に対しても祝つてあげてくれ。

もちろん、これから搬出されるオルフェトを見てくれば構わない。

但し、子供達は消灯までに帰ること、でないと担当教師にきつい

罰が飛んでくるからな

『はい！』

広大な搬入エリアに響く大きな返事。

あまりの大きさに尖った耳を垂らしつつ、コウはこそばゆそうに首をすぼめ、踵を返し再び歩き出した。

そしてエリアの隅、ガングレドとミアと共に人用のエレベーターに乗り、上層へと上がっていく。

「……ふう」

「お疲れ様です」

そう言つていつの間にかダッフルバッグを担いでいるガングレドから、荷物を受け取るとコウは照れくさそうに笑つた。

「……お前か？こんな真似をしたのは」

「いえ。貴方の武勇を伝えたのは、貴方自身ですよ

「……俺は何もしていないさ。仲間を何人殺したのや」

「しかし、そのおかげで作戦は進む 貴方の信じる未来が近づいてくる

「礎にしたつもりはない。……皆、大切な仲間だった」

そう言つて静かに視線を落とす銀の狼に、ガングレドはハツとなるまに僅かに視線を外した。

「 口が過ぎました、申し訳ありません」

「いい、お前の言つ通りでもある。……葬儀はいつやるんだ?」

「十時間後に」

「わかった、それまでに戻る。……弾薬庫に行こう、弾薬の補充をしておかないとな、ミア」

止まるエレベーター。

入り口が開き、長い尻尾を靡かせると、銀の狼はガングレドに小さく手を振り、少女と共に匡体を降りて行った。

そしてその大きな背中が通路の奥へと消えていく。

ペタリと垂れる長く尖った耳。

クシャリと手持無沙汰に頭を搔くと、黒き狼のガングレドはもどかしげに顔をしかめ項垂れた。

零れるため息は重く、肩をすぼめ愚痴が零れる。

「まったく……優しいお方だ……。」

その優しさが、彼の望む未来を殺すかもしれない。
或いは

「……タクト……あの男が」

胸をよぎる深いざわめき。

それは、憎悪のような感情。

或いは粘りつく嫉妬にも似た

「……くそつ」

身体をめぐるドロドロとした何かに、目を細め、ガングレドは顔を上げると、固めた拳ポケットにねじりこんだ。

そして匡体の壁に後頭部を軽く打ちつけては天井を見上げる。

「守るつ……何があつてもの方を」

あの日、ヨコハマで守り切れなかつた汚名を返すためにも。
悔恨を胸に收め、ガングレドはエレベーターで上方へと昇つてい

アストライア内。

上層の躁艦ブリッジに戻るコウを、十五人のクル メンバーが一
斉に揃つて立ち上がり一斉に頭を下げた。

『お帰りなさい、隊長』

「……崇められるのは嫌いだ。皆、持ち場に戻つてくれ」
コウは小さく手を上げると、ブリッジクルーは再びシートについて目の前の危機に向き合つ。
一人を除いて

「お帰りなさい、コウ殿」

そう言つて被つていた軍帽を脱いでは短く突き出た耳が頭から露
わになり、熊のように大柄な獣人は深く頭を下げた。
その体格は視界を遮る程に大きく、見上げるばかりにコウは微笑
みを滲ませ、スッと毛深い手を差し出した。

「ジーク。ありがとう艦を守つてくれて」

「艦長として為すべきをしているまでです。お気になさらず」

そう言つて差し出された手に強く握手を交わすと、ジーグと呼ば
れた大柄の獣人は軍帽を頭に被つた。

そして柔らかな笑みを浮かべる銀の狼の顔を覗き込み、その老け
た顔に皺を浮かべる。

「ガングレドはどうですか？ワシの好とはいえ少し扱いづらいで
しょう」

「まさか。ミア共々よく俺を支えてくれるよ」

と、隣に立つて嫌そうに顔をしかめつゝコウの後ろに隠れるメガ
ネの少女に、ジーグがキヨトンと目を丸くした。

「……そのちつこいのが？」

ジーブはそう言つてミアの傍に立つ銀の狼の不思議そうに細めた目で見下ろし、少女と交互に見比べる。

そして、ニイと大きな牙を覗かせると、顔を上げて軍帽を深く被る。

「まあ、深くは申しませんよ」

「んん……そうか?」

「くくっ……して。ブリッジにお越しになられるとは」

「艦の様子を聞きたくてな。……後オメガチームを見かけたかなと思つて」

「もうすぐ来ますよ。あなたがこちらにお越しになると連絡を入れましたんでね」

と背後で開くブリッジの入り口。

走ってきたのは、同じく獣人でパイロットスーツを着込んだまま、振り返るユウを見上げては目を輝かせた。

「あ……ユウ隊長ッ！」

「フォルテ、アリア……！」

腕を伸ばし飛び込んでくるブロンドの体毛の獣人一人に、ユウは仄かな笑みを滲ませつつ抱きつかれるままに後ずさった。

「あはははっ、やつたあつ、ようやく隊長に会えましたっ」

「アリア……本当に久しぶりだ。一年ぶりじゃないかな」

「だつて僕らがこっちに戻ってきたときには、隊長出撃してる時が殆どなんだから、会う機会全然なくて」

「フォルテ痛い……」「ら……」

そう言つてグリグリと身体を擦りつける獣人の兄妹を引き剥がすと、ユウは戸惑いがちに一人を見下ろした。

どちらもユウと同じく狼頭の獣人で、潤んだ目はまだ幼く銀の狼を見上げながら、尻尾を左右に振つていた。

束になつた資料を持つ手はどっちも小さく、ユウはグイッと両手を差し出す一人から資料を受け取つた。

「はいっ隊長」

「オメガチーム、フォルテ、アリア、ヨウイチ、ヤンファ、ただいま帰りましたッ」

「て言つてもエルドラドの着艦の五時間前に私たちジークさんに拾つてもらつたんだけどね」

「俺の方が遅刻か……方なしだな」

「えへへっ、私たちの勝ちい」

そう言つておかしそうに笑う一人に、苦笑いを滲ませつつ、ユウは一人の頭を労うようにそつと撫でた。

「オメガチーム、よくやつてくれた。何より生きて帰つてくれて……」

「だつて隊長いつも言つてるもの、生きて帰つてきてつ」

「頑張つたよ僕ら。隊長の言いつけも守つたもの」

「本当に、よくやつてくれた」

『えへへつ……』

そう言つて照れくさそうに笑う一人に、ジークは苦い表情はそのままに腕を組んでは肩をすぼめた。

「ほらお前達、ちゃんと報告しなさい」

「あ、はいっジークおじさん　えつと、僕ら今回はオーストラ

リア大陸に南下して生存者を捜してきました」

「数は人間一百人、獣人が百人いました」

「残つて戦うと言つ人もいましたので、大体七十名の非戦闘員の獣人を集め、アストライアに乗せました」

そう告げる二人の言葉を、報告書の内容と共に確認すると、ユウは少し強張つた顔を上げ小さく頷いた。

「ありがとう。よく集めてくれた。他の人員回収チームは既に戻っている。お前達も休んでくれ。詳細は後で見せてもらうよ、フォルテ、アリア」

『ハイ！』

「私見だが、残つた人達はどうしたんだ？」

踵を返し、ブリッジを出ていく一人を人きとめるユウの言葉に、

ブロンドの体毛の二人は難しそうに眉をひそめた。

そして互いに互いの顔を見比べ首を傾げて、歯切れの悪そうに口元をいた。

「えと……よく、わからないけど」

「戦力は互角だつたと思います。獣人のパワーは強くて人間四人分ぐらいにはなると思うから。

だから、多分戦つてどっちも死んだと思います……」

「……それを、彼らは望んだのか？」

「う、うん……」

「そうか……ありがとうつ、フォルテ、アリア」

思案に少し眉をひそめるままに俯いていた顔を上げると、ユウは再びぎこちなく、不安げに首をすぼめる一人に微笑んだ。

その笑顔に一人の表情もすぐに明るくなり、二人は力一杯頷くと踵を返してブリッジを飛び出していった。

そしてブリッジの入り口が閉まり、零れる深いため息。

両手に持っていた資料を隣に立つていたミアに渡すと、ユウは踵を返すままに、渋い表情のジークを見上げた。

ジークは少し呆れた様子で肩をすくめるままに、銀の狼を見下ろす。

「まったく、二人とも 見苦しい所を見せてしまいましたな……」

…

「艦の管理だけでなく、艦の子供達の後方支援もしてくれている。お前にこれ以上望むべくもない。

ありがとうジーク……」

「隊長は優しいお方だ。だがあまり優しく、クルーが委縮してしまふ。少しハメを外してもらわればいかがかと?」

そう言つて細め目を開いてはジークは隣に立つ栗毛の少女を睨みつける。

少女は報告書を覗きこみながらその視線にハツとなつて直ぐさまにユウの後ろに隠れジークを見上げた。

「な、なにを……」

「……つちのガングレドは信用なりませんか?」

「ぼ、ぼくだってコウの役に立つてるよ!」

「女は家を守つていればいい。……特にこんな世界が困窮してる時はな」

「僕はコウのお嫁さんじゃないの?」

「……ほお!」

「……な、なんだよその田ば」

ジイと見下ろすその細い田じ、ニアはムスッと頬を膨らませながら不満げに唇を尖らせる。

と、ソックと栗色の髪を梳く毛むくじゅらの手。

長い尻尾が僅かに左右に揺れ、コウは宥めるように少女の頭を撫でると、ジークを見上げては困ったように笑みを滲ませた。

「ガングレドは信頼している　だからこそ、彼とは離れている。あいつには俺と同じ場所に立つてほしいんだ」

「……隊長のよつこ、組織は支えられませんよ、あのバカはそれほど強くない」

「できると　信頼しているから、アイツは傍にはいない。……戦いもそろそろ局面を迎える。

三年越しの決意を実らせないといけないんだ」

「……」

「そのためにもニアにも傍にいてほしい。何かあつた時彼女の力が必ず必要になる。

そしてジーク、お前にも、そしてこの艦にも遠からず大きく動いてもらう事になるだろ?」

「そうですか……」

「その為に、今回少し顔を出したくてな　　後あなたの決意を聞きたかつた」

じつと見つめる紅い瞳。

ジークは多少驚いたような表情をするものの、ややあってブリッ

ジに配置されたメンバーをへと振り返った。

そしてその大きな背中をユウに向かってたま、彼は腰の後ろに手をつぐ。

いつもと同じ、彼が艦長であるときに取るポーズと同じ後ろ姿だつた。

「……あなたがやろうとしている事、私は大凡想像ができます」

「俺に迎合したくないのなら、最後の作戦前に『エルドラド』を切り離し部隊を分けるつもりだ」

「……一つ聞きたい」

「ああ」

「……ユウ……あなたの未来は人類全てを幸せにしますか？」

「少なくとも、相手を制圧し、或いは自らが服従する、そんな結末を選ぶつもりはない」

「和平ですか」

「……例え、契りを結び一時的な平和を得ても、再び争いの火種は起きるだろ？」「

「新たな道……その道を、あなたは照らすと言つ……」

「ジーク。……俺は皆を導きたい。その為に都庁へと向かわなければならぬ。そして道を啓く。我々が戦う事必要の無い、場所へと「おもしろい……」

「イと綻ぶ口元。

グッと後ろに組んだ両手を力を込めきつゝ絡ませながら、その大きな背中を反らしジークは少し顎を上げて天井を見上げた。

「共に行きましょう。あなたの信じる未来を、ガングレード同様に、信じましょう」

「ジーク……ありがとうございます」

「ただし、私の命令は少々荒っぽくなりますがな」

「……艦の守備隊の方をお前に任せたい。できるか？」

「細かい事は後で。……しかし、貴方の頼みとあれば、このジーク、命を賭けて、隊を守りましょう」

「ありがとう……それが聞きたかった」

「相変わらず心配性だ」

「皆の命、お前に預ける」

「元より」

翻す長い尻尾。

地面を蹴り、悠然と歩きだす銀の狼の背中は大きく、ジークは背中を向けながら彼の気配を強く感じていた。

暗闇の中、草原を歩く強い足音。

闇はどこまでも続き、夜風に銀の体毛を靡かせ、星空を見上げ、地平線を見つめ立ちつくす。

ゆっくりと赤く滲み始める地平線。

風に揺れる草の穂がその色を緑に染めていき、昇る茜色の大波を厚い雲が受けて白く色を変え、夜に沈んだ銀の体毛が光を放つ。

スウと細める紅く煌めく瞳。

覗かせる牙は鋭く雄々しく、銀の狼が夜明けを見上げて、身体を反らし吠える。

力強く、夜明けへの道を知らせる

「……共に行きましょう」

そう呟く声がフロアに響き、ジークはゆっくりと目を開くと、小さなため息と共に視線を落とした。

そこにはじつとこちらを見つめる無数の視線。

クルーの驚いたような眼に、ジークは苦い表情を浮かべては、たじろぐままに顔をしかめた。

「……なんだ」

「涙でます艦長……」

「うわあ……鬼が泣いてる……怖いわあ……」

気がつけば、涙が突き出た鼻筋の根元を伝つていて、ジークはハツとなるままに目元を何度もぬぐつた。

しかし濡れた体毛は中々乾かず、ジークは顔を押さえながらクスクスと笑うクルーに叫んだ。

「お前、うーひやんと艦の制御せんかい！ シゲ！ お前また索敵報告忘れてるで、提示とつぐに過ぎてているではないか！」

「な、何で急に怒るんですか！？」

「いつも以上にキビキビ行くぞ、隊長に艦を任せられている以上死ぬ気でここを守るのだからな！」

『は、はい！』

戸惑いながら力強い返事がブリッジの中に響き渡った。

「ではブリーフィングに入る。隊長こちらへ」

いつもこれは慣れなかつた。

「あー……では、これからシブヤ地下軍事施設破壊、及び第一次ヨハマ送電施設破壊作戦の説明に映る」

ただこれはまず自分の言葉で伝えないといけない、彼らが聞いただすであろう問いかけに自分で答えないといけない。

死ぬかもしない戦場に送り出す彼らに、誰が責任者であるか、誰が送りだしたのかを知らしめないといけない。

彼らは死ぬ予定なんてなかつた。

こんな世界でなければ、こんな異変が起きなければ、戦いに赴く事なんてなかつたのかもしない。

そんな彼らを、俺は弾丸の近い場所へと送り出す。

「今作戦は、時間差による所謂二面作戦を敢行する。その為にほぼこちらの半分の戦力を攻撃に回す事になる。

攻撃には今より40時間後に太平洋沖二十キロ地点よりアストラリアからエルドラド発進、その後一時間後の2012時にヨコハマ送電施設を海側から襲撃。

続いて、シブヤ地下軍事施設においては、一時間後の2109時に東京湾に着岸。その後台場より地下道を伝つて地下施設を襲撃する。

ルートはGルートを使用したい。侵入ルートが地下道からのみと限られている事とかなりの長い距離を行軍することを想定して、正直なところ後方支援は用意できない。こちらは短期決戦で落とす

喋りながら、息がつまりそうだった。

真剣に俺の話を聞いてくれる出撃メンバーは皆、少し表情を曇らせていて、それでも必死な様相で俺の言葉を頭とメモにたたきこむ。中にはまだ子供もいる。もちろん守備隊に回すつもりだが、人員が少なければ或いはガングレド隊に回す予定である。

彼らの死ぬ未来が、暗室の中、光るモニターを背に喋りながら、瞼の裏で明滅する。

死なせない。

絶対に皆で、ここを切りぬける。

「……隊長？」

「……必ず、お前達を生きてここに戻してやる。絶対だ」

「……」

「説明を続ける シブヤ制圧部隊には俺が、ヨコハマ破壊部隊にはガングレド・ハイエクが部隊長として入る。

残りはアストライア守備隊としてジークマイヤー・ヴィトゲンシユタインが艦長兼任で入り、エルドラド守備隊としてミア・ミルドレシア作戦参謀官が入る。

それぞれ皆には役割があてがわれている。手元の資料に記載されているが、今一度点呼していこうと思う

俺は俺の部隊の仲間を、ガングレドはガングレドの部隊の仲間を呼んでいく。

皆、表情は不安であるもの、牽引する人間が付けばそれだけで僅かにだが明るくなるのがわかる。

俺も不安だ。

精々二十代後半の人間が、人の死を断ることができるものだろうか。仲間の命を預かることができるだろうか。

(……迷うな)

迷えば人を殺す。

あの日爆風の中に死んでいった仲間達、多くの同胞の血を無駄にしないために、戦いを終わらせないと云えない。

和平ではなく服従ではなく征服ではなく

我々のあるべき地

へ。

行こう。

彼らを導くために、再び力を貸してくれ。
紅き瞳のオルフート『ゼノアトリア』よ……。

エルドラード出港四時間前。

「……艦長」

戦艦エルドラードの一室。

ヒクリと痙攣する尖った耳。

扉を叩く音と共に聞こえてくる低く重たい声に、出港準備を進めていたユウは鼻先ヲヒクつかせ振り返つた。

そこには扉の向こうに感じるいつもの匂い。

ガングレードが扉の前に立つてゐる　ユウは首を傾げながらも、

扉を開き眼前に立つ彼に微笑みかけた。

「ガングレド。どうしたんだ？まだ出港準備は早いぞ」

「隊長こそ　こんなに早くどうされたのかと思いまして」

「少し田が覚めてな。見送りには参加するよ、心配するな」

「ん……申し訳ありません」

気まずそうに首をすぼめる黒い狼に、ユウは可笑しそうに肩を震わせると、彼の肩を叩き手招きをした。

「気にするな。入つてくれ」

「了解しました」

「畏まるなよ、大したことじやない、友人として少し話でもしたい
と思ってな」

「

と入りかけた脚が止まる。

怪訝に思い振り返れば、そこにはカチコチに身体の固まつた黒い狼のガングレドがいて、ユウは眉をひそめて彼の顔を覗きこんだ。

「ん、どうした？」

「い、いえ……光榮です」

「おかしなガングレドだ。とにかく入れよ」

「は、はい……」

心なしか息が荒く、緊張氣味に目が血走つていて、ユウはベッドの縁に座りながら複雑な笑みを浮かべた。

ガングレドはといふと、壁にもたれかかつて緊張氣味に腕を組んで頃垂れるだけで、ユウは躊躇いがちに彼に手招きをする。

キュツと丸くなる黒い尻尾。

戸惑いがちに、彼は無言のまま、銀の狼の隣に座ると、九十度に曲がった膝の上に拳を置いて固まつてしまつ。

「……」

「……俺といるのは辛いか？」

ペタンと垂れる尖つた耳。

ユウはそんな緊張氣味のガングレドの横顔を覗き込んでは、申し訳なさそうに笑みを滲ませた。

と、ガングレドはその強張つた顔をハツとさせるままに覗きこむ彼に何度も首を振る。

「とととととんでもありませんッ」

「なんだ、それならよかつた」

「た、ただ……私なんぞぶつきらぼうな人間を友人扱いなど……今まで厳しい対応をしてきたもので……」

私は、その嫌われていると

「ふふっジーク共々、もう五年だぞ？」

「……？」

不思議そうに首を傾げるガングレドに、ユウはベッドから足を投げ出したままシーツに体を横たえた。

そして腕を頭の後ろに添え天井をみあげながら、懐かしむように

紅く澄んだ瞳を細める。

「そうだな……ずっとお前と一緒に五年間戦い続けた」

「隊長……」

「お前は俺の傍にいたんだ。好意を持たんわけがないつ。お前は俺の友達だ」

「……光栄です、私は……本当に」

「俺もだよ。ありがとう」

口の端に零れる優しい笑み。

そう囁きながら、コウは頃垂れて身体を強張らせるガングレドを横目に、ゆっくりと目を閉じる。

息を吸い込み、眠るように胸を上卜させながら隣でひしゃらを見下ろす黒い狼に囁く。

「なあ……ガングレド……」

「はい……」

「一緒にいてくれて、ありがとつ……お前のおかげでここまで来れた」

「貴方は、ここで終わりません」

スウと青い瞳を細め、ガングレドはそう言つて、コウと同じようにベッドに上体を横たえると天井を見上げた。

そして目を閉じる銀の狼の横顔を見つめながら、静かに囁く。

「我々と共に、未来にいくのです。争いの無い場所へ、一緒に」

「……お前はついてきてくれるか?」

「無論です」

「何から今まで……申し訳ない」

「終わりみたいなことを言わないでください……私はあなたが守ります」

「ありがとう……」

「私だけではない、ジークもクルーもアストライアにいる全ての獣人が貴方を慕い、貴方を守るでしょう。」

貴方は、我々の誇りです……」

「ミアが入つていなによつだが?」

方を震わせ笑う銀の狼に、ガングレドはムツと田を細め口を尖らせてると、不満げに鼻息を漏らす。

「アレは少し軽薄すぎる。人間であるし、何より子供だ。隊長にはそぐわないと、私は思います」

「あれでも立派な兵器開発及び作戦部長だぞ?」

「隊長にお似合いの女性は多くいますつ」

「手厳しい　まるで父親と話しているよつだ……」

「　も、申し訳ありません……」

「いいや。聞いていてお前の言葉は心地いい……包まれているようで心が休まる」

「隊長……」

「これが終わつても、またお前の声が聞きたい。……ずっと俺の傍で俺を支えてくれ。時々俺を叱つてくれたら嬉しい。

友として、副官として、何より仲間として」

肩を僅かに震わせ嬉しそうに笑う銀の狼に、ガングレドはもぞもぞと僅かに身体をよじる力強く頷いた。

「　何としても　必ず」

「頼んだぞ。かつて俺に預けたお前の命、今は返すが必ず俺の下に戻してもらつぞ」

「はい……！」

「　しんみりさせたな。こんな俺ですまない」

「いえ……私は……そんな隊長が好きですから……」

声が部屋に響く。

銀の狼は紅く澄んだ瞳を僅かに開くままに、その肩を大きく震わせ静かに笑い声を響かせた。

「くくくつ……そうか、俺もだガングレド」

「　」

「んん……話してたら眠気がやつてきた。見送りまでもう少しだけ

寝るよ……

「は、はい……」

そう言って、程なくして狼の口元から寝息が聞こえてくる。

ガングレドは体を起こすと、あどけない彼の寝顔を覗きこんでは、複雑な表情を毛むくじらの顔に滲ませた。

「…………隊長」

そして、そつと彼の頬に指を這わせては、サラリと銀の体毛が爪を撫でる。

暖かい。

伝わる人肌の体温。

そして僅かに尖った耳に聞こえる、穏やかな心音。
ガングレドはゆっくりと眠るユウから手を離すまさに、胸に手を当て彼の言葉を胸に刻みつけた。

(ユウ……私は必ず)

優しい寝息を立てる銀の狼、大切な友人を見下ろし、黒き狼はその表情を硬く強張らせた。

眠りながら、彼は僅かに微笑んでいた。

それだけで、体温が高くなつた気がした

「ぎやあああああ！」

校舎から響き渡る悲鳴。

居てもたつてもいられず飛び出せば、僕の教室の中には、異形の化け物が暴れ回っていた。

背中から迫り出す腕と思しき触手が四つ。

脚は何本も生えて、頭は縦に割れて中からまた首が一つ伸びてぶらぶらと垂れていた。胸元には剣が突き刺さった跡のようにぽっかりと穴が空いている。

体は何倍にも歪に膨れていって　そこには化け物が教室の中で机や椅子を潰し碎きながら身体をよじっていた。

僅かに身体にこびり付いた制服の一部が、こいつを『元人間』だと辛うじてわからせた。

「……な、なんで……」

「ぎああああ！」

触手が背中から突き出す生徒の身体。

ぶらりと串刺しになつた四人のクラスメイトの身体が紅く滲んだ夕焼けの教室に漂い、程なくして血飛沫が天井を斑点状に紅く染める。

腹が裂けて、大きな口が胴体に露わになり、人の姿がゆっくりと飲み込まれていく。

ブチリツ

四肢を食いちぎるままに身体を飲み込むと、断面から筋肉の垂れた手足が床に転がる。

ビクンと手が痙攣して、僕の足を掴む。

それは、間違いなく、さつきまで生きていた人間の手だった。

血溜まりが僕の足元に広がる

「はあ……はあ……」

息が上がっていく。

汗が止まらない。

心臓が跳ねあがる程に、心が震える。
でも、それは恐怖ではない。

緊張でもない。

何か、胸の奥から怖いという気持ちすらも飲み込んで、大きな感情のうねりが内側から昇ってくる。

それは 鄭愁。

お前は俺と同じだ。

そう呟くように、入り口に立ちつくしたまま、息を上げる僕を、化け物が三つの頭をこちらに向ける。

ヌチャリ……

床に張り付く肉を引きずり、化け物がこちらに歩み寄つてくる。こちらを見つめる。

違う……。

違う

「……逃げる、皆！」

脚が震える。

僕は教室の入り口に立ちつくしたまま、こちらに釘づけになる化け物を横目に炭に隠れるクラスメイトに叫んだ。

皆は怯えながらも、おずおずと別の入り口から教室を出ていく。
そして教室には僕と化け物だけになる

「……！」

スウと伸びてくる鋭い触手。
パンと破裂するガラス。

風を切った刃は辛うじて身体をよじる僕の身体を掠めて、廊下の

窓に突き刺さり、空へと投げ出された。

血が制服に滲み、痛みに傷口を押さえながら、僕はようやく動き出す身体を引きずり踵を返す。

そして廊下へと再び飛び出て、逃げたクラスメイトを追いかける

ぎゃああああ！

方々から聞こえる生徒の悲鳴。

これは逃げた四人だけのものだけじゃない。

どういう原理かは分からない 校舎に残った生徒の中に、あの化け物が混じり始めている。

(……くそつ)

生きている皆を集めて逃げないと。

幸い、後ろを振り返ってはあの化け物の動きはとても遅く、触手もここまで届かない。

あの個体全てがあの特性なら、皆逃げられる。

僕は腕を引きずりながら、顔を強張らせ息を切らせつつ、悲鳴の聞こえる方向を脚を進めた。

そして一学年下の教室に向かう。

だがそこには既に異様な化け物だけが十体ひしめくように残り、床は人の頭と血まみれの床が残るだけだった。

その肉片すらも、血溜まりすらも、化け物は首を伸ばしてすりあげる。

無数の紅い目が、廊下に立つ僕をこちらを見つめる。

紅い目が、僕を見つめる

ドクン……！

「グッ……」

心臓が跳ねあがる。

奴らの視線が突き刺さるたび、全身に一瞬悦楽の様なものが走り、背中に悪寒が絶え間なく走り、汗がブワッと噴き上がった。怖いんじゃない、嫌悪でもない、憎悪でもない。

僕は、彼らを求めている

「……くそつ！」

ジリツと身体を前のめりに近づいてくる、不揃いの化け物。

ざわざわとさざめく身体の奥の何かに顔をしかめながら、僕は踵を返すままに生存者を捜して校舎を走った。

心なしか、耳が良くなり、遠くから聞こえてくる人の足音。

悲鳴と泣き声と共に走るいくつもの気配をたどり、僕は廊下を走りながら学校の体育館へと走り込む。

そして扉を開け、力一杯閉めると共に中を覗く

「……え？」

阿鼻叫喚だつた。

そこには避難場所の学校の体育館のはずだった。

床に広がる紅い血の海。

食い破られて床に突つ伏す人影を踏みつけ、或いは引きちぎりながら、そこには無数の化け物がひしめき合っていた。

触手で壁に寄り添う生徒の群れを突き刺し、大きなあぎとで逃げ惑う人の首の肉を食いちぎり、引き裂いた腹から内臓を取り出す。血のする音と悲鳴がいくつもこの広大な空間に響き渡る。それでも血溜まりは絶えず広がっていく。

人が絶え間なく死んでいく

「……」

「た、助けて……」

「！大丈夫か！？」

足元を見下ろせば、そこには足首を食いちぎられたものの身体を床に這わせ近づく生徒が見え、僕は駆けよろうとした。そして手を伸ばし、彼女の手を取ろうとした。

背筋が凍つた。

「助けて……助けて……私……皆と同じになる……私が死んじやう

皮膚が剥け、全身から顔を出す肉腫。

その姿はまるで水を流し込まれて膨れ上がる風船。

刹那、突き出す茨の様な黒い触手が体中に浮き上がる黒い瘤を破つて突き出し、這い寄る少女の身体を捉えた。

少女の首の皮膚が裂け、？げ そして七つの目を持つた別の首が三つ姿を荒らす。

背中からは触手と共に虫の羽が生え、腕が千切れると共に八つの前足が地面に突き刺さり僕の前に聳え立つた。

そこには触手を虚空に漂わせ、巨大な蠅のような化け物が佇んでいた。

二十近い目をこぢらに向け、涙を流していた

寂しい。

そう訴えかけているようで、僕は後ずさりながら飛び込んでくる触手の刃から身体をよじり後ずさつた。

そのまま背中を向け走り出そうとしながら、不意に化け物の奥、血だまりの中転がる人の腕が見えた。

その腕からも触手が伸び、別の生き物のソレへと変貌しつつあった。

後でわかつたことだった。

その『変異』はまったく人の意思、そして機能に関わらず全ての物質に働きかけるものだった。

ミアから聞いたことだが、それは変異ではなく『適応』であると

「くそつ、くそつ……！」

僕は何もできず、ただグラウンドに飛び出し、生存者がいないかと、脚を動かし目を動した。

耳から遠のいていく悲鳴。

校舎を見上げれば既に『人』の影はなく、歪に変異した化け物が無数に闊歩していた。

流れた血は少なく、校庭には逃げ惑っていた人の『なれの果て』が、わらわらと列をなして正門を出て町へと出て行っていた。

あの、紅い光の柱が夕焼け空を貫く、大きなビル、都庁ビルへと

「…………美沙ちゃん…………拓斗」

立ち尽くしながら、不意に彼らの事が頭をよぎる。
もしかしたら、彼らは既に変異してしまったのかもしれない。
それでも僕は、淡い期待を抱きつつ這い寄つてくる化け物の縦列
を横切り校舎の中へと再び戻つた。

静まり返る夕焼けの校舎。

もはや人がいる様子はなく、廊下を走りながら、見えるのはこちらを窓から覗く無数の化け物。

もはや、人の影すらどこにもない
「ぐう…………！」

床に広がる血だまりに足を取られ膝をつくままに、身体が紅く冷たい床に滑りながら横たわる。

痛い。

苦しい。

膝が僅かに悲鳴を上げ、目に入つた鮮血が視界を滲ませる。

心臓がドクドクと異様なくらいに高鳴り、耳が周囲の気配を捉え、
血と肉片の匂いを鼻先が掠める。

べちゃべちゃと肉を食う音が耳に入る。

ズルズルと何かが歩く音が遠くからでも届き、頭の中に響く。

悲鳴が残響となつて廊下に走り、鼓膜をつんざく。

鼻が利かなくなるくらいに血の匂いが辺りに広がり、床に突つ伏しながら意識がもうううとしてくる。

どうしようもなく、人が死んでいく。
化け物に変わっていく

(くそつ…………くそつ！)

負けたくない…………！

ポタリポタリ……

身体が滴り落ちる鮮血。

血が全身に染み、身体を重くなり、それでも血だまりに広がる肉片を握りしめ、僕は立ち上がるままに身体を引きずり歩く。

田は既に霞んで見えず、やけに利く耳と鼻を頼りに人の気配を探る。

田を閉じながら闇の中に彼女の気配を探す

(美沙ちゃん……美沙ちゃん……!)

カツリ……

靴が床を叩く音。

東の方、二百メートル先から僅かにだけど聞こえる。
行こう。

僕は田を僅かに開くままに、血の匂い広がる廊下から離れ、校舎を離れ学校の裏山へと足を運んだ。

そこは木々がうつそうとしていて、フェンスが籠を囲んで生徒が入ることができない場所だった。

できないはずだった

(あつた……)

そこは、こつそりと拓斗と見つけていた
人気の無い校舎裏、フェンスが眼前を覆う中、足元には金網がペ
ンチで破られた場所があった。

前に、拓斗と一緒に通った穴があつた。

そこには、上靴が一つあつた。

彼女の匂いがした、そして拓斗の匂いもした。

二人は裏山にいる。

「はあ……はあ……」

体は重たく、痺れるように頭は動かず、脚は楔で縛られているかの如く。

それでも、僕は彼女に会いたい。
あつて安全を確かめないと

「…………美沙ちゃん」

木々をかき分け、山の斜面を登り、薄暗い闇へと身体を鎮め、僕

は彼女の匂いを追いかける。

シユツと頬を掠める木々の枝葉。

切り傷がいくつも浮かび、血痕を土に浮かべ暗闇の奥、その奥へと僕は手を伸ばす。

やがて木々の合間の向こう、紅い夕焼け色が滲んでくる。ソレと共に彼女匂いが近づいてくる。

(美沙ちゃん…… 美沙ちゃん!)

僕は手を伸ばす

「美沙……！」

夕焼けに地面に映る黒く滲んだ影。

フフリ……

さざめく風の中、夕焼け色に染まつた木々の枝葉が揺れ、ソレと共に宙に浮いた彼女の足が揺れる。

ギシリ、ギシリと縄が太い枝に絡まつて彼女の首を引っ張り上げる。

ぐつたりと垂れたほつそりとした首。

俯く小さな顔。

露わになつた白い肌は、僕のように枝葉に撫でられ切り傷がいくつも浮かび、股の間から少しうと血が垂れていた。

ハラリ……

長い黒髪が風に揺れて、夕焼け空に舞い上がる。

見上げるばかりに紅く、その空の下で、彼女は裸のまま首をつっていた。

胸にナイフが刺さつていた。

死んでいた

「…………」

ガサガサガサツ

遠くから聞こえてくる、走る人の足音。

見開く、血走った黒い目。

振り返れば、闇の奥から人影が僕めがけて、僕にナイフを突き出

し飛び込んできていた。

その顔は獸のようだった。

卷之三

「アフター」

「お前があああ！」

組み敷かれるままに、首に指が食い込んでいく。

一三二

霞んだ視界に、血走った獣目が見える。

泣いている

「お前が……お前がいけないんだ、お前が美沙を殺したんだ！お前が美沙に告白しようとしなかつたら俺だつて……俺だつてあんなこ

目の前が白くなっていく

意譜か遠のいていく

「三人一緒にいいじゃないか！なんで俺を置いていくんだよ！なんで俺を一人にするんだよ！俺がそんなに邪魔か俺がそんなに必要な
いかお前達の為に俺がどれだけ頑張ったか知らないくせにお前達は
俺をのけものにする。ずっと三人で一緒にいたのになんで……なん
でだよおおお！」

お前がいけないんだ、お前が俺を一人にするからあああー俺を
人にしないでくれえええ！

お前しか、お前しかいないんだよ！美沙は死んで、お前が殺してお前しか残ってないんだよ、俺を一人にしないでくれ俺と一緒にいてくれよ、タ、タううううう！」
もう 眠りが近くなつていぐ。

瞼が重い。

暗闇が目の前に広がっていく

夕君

彼女は、微笑んでいた。

「 美沙 」

目が開き、気がつけば立ち上がり、僕は彼から離れていた。
記憶が断続的に続いている。

最後に彼を見た時、その右腕は宙を舞つて、血飛沫すら上げず腕の断面を抱え逃げる彼の後姿だけだった。

僕は裏山に立ち尽くしていた。

首を吊った彼女の亡骸を背に、長い影を見下ろしていた。
その耳は頭から伸びてとても長く、その鼻は犬のように突き出で、
長い尻尾が尻から出て身体は銀色の体毛に覆われた。

あの日。

俺の身体は、獣に変わった。

海に広がる深い暗闇

甲板に響く重たい足音。

ヨコハマ湾。

遠くを山に囲まれた沿海上、エルドラードは発進^{デッキ}に上に数機のオルフェトを乗せ崩れた港へと接岸していた。

装備は皆重装備で、七十ミリ貫通徹甲弾装填電動回転式ガトリングキヤノン、一百ミリ溜弾装填大型ガンランチャー、マルチプルミサイルランチャーなど、対エルザの装備が並んでいた。

そしてその中に巨大な筒とジョネレーターと思しき機械を装備した機体が三機、そして偵察用レドームを背部に装備した一機が集まつてエルドラードから降りる。

その四機を横目に一機のオルフェトは暗闇に沈んだ巨大な施設を指差す。

『ゴルドチーム、見えるな

』
『はい、ガングレドさん……』

四機はガングレドが駆るオルフェトに指差されるままに裸眼モニターをそちらに向ける。

海を背にそびえるそこは山に囲まれたドーム状の白い建物。周りは崩れかけた廃ビルに囲われ建物自体も未だに煙を上げた。

獣の目には、暗闇でもよく見える程に、ボロボロの施設が見えた。しかし、未だに稼働しているのか、施設周辺、及び廃ビルの中に敵機の気配がうろついていた。

『……多いな』

『だけどシールドエフェクトはないようです』

『ああ……隊長の予測通りだ』

五キロ先からでも聞こえるキャタピラ音を尖つた耳に響かせながら、ガングレドはコックピット内で壁に埋まつた手を動かした。

ガシャリ……

肩に担いだ高速回転式ガトリングレーザー一門を軽く回転させ、ガングレドのオルフェットは地面を蹴りあげた。

『ガングレド』

ヒクリと尖る耳。

動き出したオルフェットを止め、ガングレドはマウントしたディスプレイに映る銀の狼に目を見開いた。

『……隊長』

『いけそつか？』

『はい』

『皆一緒に帰るが』

『はいっ……！』

『幸運を祈る。……エルドラードを発進させる。一時間後に会おうガングレド、皆』

『隊長も気をつけて』

モニターが途切れ、零れる小さなため息。

ソレと共に遠くでザブリと何かが海に沈んでいく音が聞こえてくる。

仲間が海に潜つたのを聞いて、ガングレドは再び表情を強張らせると、オルフェットを動かし闇の中静かに機体を沈ませた。

『全機ステルスエフェクト起動する。ゴルドチーム、アルファチームは山上へ行け。撃撃を行つ』

『了解』

潜ませた声が響くと共に、ぞろぞろと沿岸部に続いていたオルフェットの姿がスウと宵闇に溶けて行つた。

ガシャリ……

アスファルトの沈む音が僅かに響き、辺りに散らばる『異人』の

群れが六メートル強の巨人の足に潰れる。

グシャリと肉の飛び散る音が僅かに風に乗り、さざ波が生々しい音を攫つて行く。

やがて沿岸部の港から、崩れた廃ビル、そして音沙汰の無いいくつもの家が立ち並ぶゴーストタウンへと近づいていく。

ソレと共に、暗闇に墮ちた街中を巡回する白いエルザの姿が家と家の間から顔を出すのが、モニターに捉えられる。

やがて黒きオルフェトもその体を廃虚の連なりの中へと潜つていく。

『退路を確保せよ』

『現在山側エリートを形成中。『ゴールド、アルファの支援部隊がルート構築を行っています』

『一分やる』

『了解』

暗闇に身体を溶かしながら、黒きオルフェトがグッと身体を前かがみに屈めでは、両腕に持つた長物が地面を擦る。

約十五機のパワードスージーが僅かに散開して民家の前に身体を鎮める。

闇の中に蒼い瞳を僅かに輝かせる

バチリツ

不意に闇の中弾けて走る紫電。

座るままに装備が道のわきを走る電線にあたつたのか、光が一瞬灯つて黒い装甲に纏う透明な膜が揺らいだ。

そして一瞬だけ暗闇の中に、黒きオルフェトの姿が露わになる

ガシヤン……

近づいてくる重たい足音。

二機のエルザが千切れた電線のあたりを囲つよう近づいてくるのが見える。

「イと黒い狼の口元に笑みがこぼれる

『もついいか?』

『ゴルドチームから連絡、隊路確保しました。いつでも行けます』

『行くぞ!ステルスエフェクト解除、各員送電施設を狙え!』

立ち上がる十五機の黒きオルフェト。

ガングレードのオルフェトがグッと地面に足を踏み込むままに、開いた脚部装甲から突き出た杭が地面に刺さった。

そして周囲の空気が熱を持ち、廃墟の街の景色が一瞬たわんで波紋が広がる。

『パルススター起動ツ』

夜空に向かつて噴き上がる土煙。

辺り一帯の地面が僅かに沈むと共に噴き上がる衝撃波が一瞬で辺りの民家や建物を薙ぎ払い呑みこんだ。

足元を払う重たい衝撃に吹き飛ばされる一機のエルザ。

粉塵ごと喰らいながら衝撃波はまるで茶色い津波の如く街の景色を一瞬で腹落とし、巨大な浅いクレーターが立ち込める土煙の中に出来上がる。

グッと十五機のオルフェトが銃口を持ち上げるまさに粉塵の向こうに白いドームを捉えてトリガーを引く。

『ゴルドチーム、チャージでき次第撃て!』

噴き上がる弾丸の雨。

立ち込める土煙に無数の穴が空いて一瞬で払われ、暗闇に断続的な閃光を走らせ、弾丸が光の尾を引いた。

そして爆炎と爆風が瓦礫と共に巨大な窪んだドーム状の施設から立ち上がる。

ガラガラと分厚く白い壁が崩れ落ちるままに、何層にも重ねられた施設内部が粉塵の中に露わになる。

装甲が剥がれた部分へと砲弾と弾丸が尾を引いて闇を引き裂いて撃ちこまれていく。

その度に送電施設から小さな爆発が起きて瓦礫が崩れる音が闇の中に響く

コウ「うううううううう

声の中に混じる激しい憎悪。

ザワザワ……！

逆立つ黒い体毛。

僅かに遠く、空氣に乗つて聞こえてくる低い声にガングレドは大型八連バレルを下ろし、足元に投げ捨てた。

『副長！？』

『俺がやるつー！』

外れる背部バックパック。

肩部ガトリングレーザーを回頭させ、黒きオルフェトは声のした方向へと向き直る。

そして近づいてくる数機のエルザの気配に、機体を前かがみにして、足部から迫り出したキャタピラで地面を走る。

そして送電施設の方向、近付いてくる紅い装甲のエルザに蒼い瞳を細める

『コウ「うううううう！殺してやるうううう！』

装甲は全体的に厚く何重にも施され、およそエルザの通常の二割増しの大きさの機体だった。

肩と足には大型ミサイルポットが装備を装備し、腕部には大型の実体シールドと片手で持てる大型ピストルが見える。

大凡、近接特化型の紅き瞳のオルフェト『ゼノアトラ』対策の機体に見える。

『……貴様が隊長を……！』

右腕部の装甲が展開し、迫り出す内蔵ブレード。

ドオーンッ

勢いを殺さず地面が割れる程に深く踏み込むままに、力一杯に振り下ろす右腕。

ジジジッと火花と悲鳴を上げる分厚いシールドは、後ずさぬままにブレードを受け止りながら表面に、深い傷が刻まれる。

『貴様の妄想に私の隊長を付き合せるなどおー！』

『ぐああああああー！』

ドオオンッ

そして重たい衝撃と共に、勢いよくシールドにめり込む脚部。右腕を振り下ろすままに機体をよじり、回し蹴りを撃ちこむと、紅いエルザは大きく仰け反りながらピストルのトリガーを引き絞つた。

『殺してやるッハハハハハハー！』

ドスンッ

キャタピラで地面を回転するようによけながら、五連レーザーバレルを大きく穿つ大型対装甲弾。

右ガトリングレーザーが動かなくなり、それでも左のガトリングから閃光が機体を後退させながら真っ直ぐにエルザの肩部のミサイルサイロを撃ち抜いた。

真っ赤に赤熱する武装がやがて爆発手前まで膨れ上がる。

紅いエルザは四つん這いになりながら、右肩部ミサイルを解除すると爆発する武装から這い出した。

そして立ち上がると機体を動かしながら、こちらを睨む紅く滲んだアイサイト。

こちらを恨めしげに視線を送つては、今にも爆発しそうな憎悪がこちらに垂れ流れている。

止めなければいけない。

出なければ、計画に支障が出る。

なにより

『隊長の目覚めが悪くなる　死んでもうつ

闇を引き裂く閃光。

損傷した左肩部ガトリングを外すまさに、もう一門のガトリングのレーザーラインが後続のエルザを撃ち抜いた。

そしてキャタピラによる蛇行で敵の弾丸を避けるまさに、ガングレドは残った紅いエルザへと飛び出した。

『……貴様は隊長にとつて悪となるー！』

『あの男は　　あの男は美沙を殺したあ！』

『貴様はそれ以上に多くのものを隊長から奪つて行った！』

『お前は俺からユウを奪つたあ　ああああああああ！』

『手放した分際でほざくかあ！』

火花を散らすブレードとシールド。

せめぎ合いをする中、巨大な白いドーム状の施設を穿つように光の奔流が山の側から闇を引き裂いて噴出した。

立ち上る土煙。

高エネルギーレーザー砲が走った跡が、紅く溶けると共に衝撃波が後から続いて山の木々を薙ぎ払い、家屋を吹き飛ばしていく。そして真っ直ぐに施設の分厚い壁を撃ち抜こうと光の柱が伸びる

『副長！　こいつメグロと違つてクソ固い！』

融解を始める分厚い壁の前に、噴き上がる光の粒。

光の柱は山の側から飛び出すままに、ドーム状の施設の壁を融かし抉りながら進みながら、やがてその射線が細くなつていく。

やがて施設内部まで光が届きながら、その奔流は細まってき闇の中に焼き消える

『いつの間に壁を厚くして　　まだ撃てるか！』

『一応！』

『いい子だ……！』

機体を掠める誘導ミサイル。

すぐ背後で闇を抉る紅い爆発を背に、ガトリングで紅いエルザに狙いをつけながら、ガンフレードは機体を前に動かす。

そしてシールドを構える巨大なエルザにブレードを振り下ろす

『全機、ゴルドチームが撃つた部分をねらえ！打ち崩すぞ！』

『副長はっ！？』

『こいつをぶち殺す……！』

金属を撫で、風を切る鋭い音。

スウと紅い右肩関節に浮かぶ斬痕。

すくいあげる間に振り上げた内蔵ブレードを收める間に、キヤタピラで後ずさりでは、そこにはエルザから滑り落ちる右腕の断面があつた。

バチリツと火花を散らしながら垂れる断線。

右腕の断面を隠しつつ大型のシールドを構え、紅いエルザがこち
らへとバニアを噴かせ突っ込んでくる。

『貴様が……貴様があああ！』

「我々の隊長を……貴様のような小汚い人間に渡すものかっ！」

『お前らがユウを取つたあ！俺の友達を取つた、獣人が俺の大切な

『身のを奪つた』

和がちの隊長か！お前の手ではない！

逐々一九九九

卷之三

闇の中、薙一残光が尾を引いて走る黒一三人。

速度を止め、夜風を切り、内蔵したブードーを駆動する世界に黒

いオルフェトが紅いエルザへと飛び込む。

夜風を切り大きなブレードを振り下ろす

シブヤ地下軍事施設。

東京メトロに広がる長い地下道の中に作られた巨大な軍事施設。中は兵器開発及び、異人の研究をするための施設だった。そこは捕獲した異人を解剖し研究し、或いはパイロットとして運用するための施設であり、同時に日本連邦軍が運営する軍事工場施設でもあり現在も連邦軍の量産パワードースツ、エルザが自動で生産され、それらは機械によって解剖され研究された異人が乗せられていた。

ほぼすべてが自動化で動く空間。この場所は数人の残してほぼ無人に等しく、ただ機械の塊に肉の塊を詰め込む作業だけが淡々と行われていた。

響き渡るサイレン。

広大なドーム状のジオフロント内の天井が真っ赤に染まり、即座に方々に建てられた工場から煙が噴き上がった。

そして程なく上がる爆炎。

工場の壁を貫き噴き上がる紅い炎は衝撃波と共に壁を噴き飛ばし、舞い散る瓦礫を横切り黒い装甲が炎の中に紅く染まった。

噴き上がる大型溜弾。

バックファイアを後方に吹きだし、腰だめで打ち出した無反動砲弾が一直線に工場の壁を破り、屋根から爆発を噴き上がらせる。

次弾を大筒に装填しながら、回転を始める肩部ガトリング。

対装甲弾が毎秒二百発で六連バレルから飛び出しても、足もとに広がる異人の群れを血煙に変えていき、射線はそのまま周囲の建物をハチの巣に変え土煙が大きく天井へと舞い上がる。

『いっけええええ！』

『うつさいバカあ！はしゃぐな！』

ガシャンッ地面に突き刺さる脚部固定用アンカー。

大型多連装長距離榴弾砲を両腕に構え、放物線を描いて火の玉が遠くに広がる工場、或いは研究施設にめり込んだ。

地面に走る地響き。

黒き巨人の頭ほどある空薬莢が宙を舞つまに、遠くから大きな炎が衝撃波と共に噴きあがり空中に波紋が走った。

ザザツとアンカーが地面を深くこすり、更に腕を動かすままに砲塔が少し上を向く。

そして炎の向こう、ひと際大きな施設を捉え、計七機のオルフェトがシブヤ中央研究施設へと弾丸の雨を浴びせかける。ゴゴゴゴッ

爆炎と土煙を上げゆつくりと巨大な白いビルが崩れ落ちていく

『やつたあ！』

『来る！』

『あ……大きい気配が昇つてくる！』

ドオオオンッ

地響きと共に倒れたビルの中から噴き上がる衝撃波。

立ち上るキノコ雲のような粉塵が一瞬で晴れ、やがて紅いサイレンランプが途切れ、深い暗闇がジオフロントに立ちこめる。

そして、暗闇の中立ち上がる上体。

約四十メートル、見上げるばかりにおよそオルフェトの七倍近い巨体を覗かせ巨大なロボットが顔を出した。

全身に取り付けられた機關砲、誘導口ケットシステム、レーザー砲台。

広げた両腕すらオルフェトより大きく、まるで人型戦艦といった様相　　深い闇の中、大きな首をもたげ大型ビルほどの大きさのロボットがこちらを見下ろす。

クワッと白い目が暗闇の中光り、獣人を睨みつける

『化け物がああああああ！』

『すごい憎悪……全身の毛が逆立っちゃうよ……』

『お前らさえいなかつたらああああ！』

ドオオオンッ

一歩歩くたびに地響きと土煙が上がり、グッと前のめりに腕を伸ばすままに後ずさるオルフェトを捉えようとする。

迎撃の弾丸を浴びせつつ、キャタピラで後方に退避しながら、それ以上の速度で巨大な戦艦のようなロボットがにじり寄る。爆炎と粉塵にまみれながら、大きな頭が口を開き牙をむいてオルフェトへと拳を振り上げる。

『ここは人間が住む世界だあああ！死ねええええ！』
『隊長！』

天井から噴き上がる土煙。

『パルススター起動』

光一つ差さない闇の中、紅く尾を引く残光。

天井が破れ、瓦礫と粉塵が降り注ぐ中、土煙の尾を引いて一直線に飛び込んでくる黒い影。

音無く風を切る冷たく黒い鎧。

風を切る冷たい音が頭上から響き、四つん這いになっていた巨大ロボットは首を回して不意に上空を見上げる。

モニターに映るのは、尾を引く紅い瞳。

刹那、闇に閃く一文字の光。

右腕から伸ばした刃が闇に閃き、振り下ろした刃は火花一つ上げず、巨人の装甲を撫でおろす。

ただ風が悲鳴が、闇の中に響く

『遅れた、すまない……』

ドスンッ

鈍い音と共に地面に吸いつく足先。

内蔵ブレードが装甲に収納され、紅き瞳のオルフェトは長い銀髪

の後ろ立てを静かに靡かせ友軍機へと振り返った。

ズルリ……

巨人の身体に浮かぶ一文字の斬痕。

ブレードが引き裂いた痕をなぞるよつに、ゆっくりと滑らかな断面を巨人の首が滑り落ちていき、土煙が背後から立ち上る。

『隊長っ、後ろ！』

『……まだやるか』

翻す長い銀の後ろ髪。

スツと後ろを振り返れば、そこには首を失い、それでもハ機のオルフェトに四つん這いでやつてくる大型のロボットが見えた。

『人を殺す事で仲間の未来が築ける　　その為ならこの命、安いものだ』

『殺して……殺してやる……お前らがいなかつたらー。』

『その過去はすでにはない。……だがその未来は或いは存在するかもしれない。だから俺は仲間と共に闘う』

スウと闇に細める鋭く紅い瞳。

風を切り、勢いよく内蔵ブレードを剥き出しにすると、紅き瞳のオルフェトは静かに首なしの巨人に向き合つた。

グッと前かがみになる黒い後ろ姿。

地響きと噴き上がる土煙に長い銀髪を靡かせながら、ゆっくりと下ろした右腕にブレードが地面を叩く、

メキリと地面に鋭い爪がめり込みグッと軀体が傾く

『未来を拓こう　　グラマト・ゼノアトラ、……』

スウと闇に溶ける黒い装甲。

紅き残光すら引かず風の音すら鳴らさず、無音の闇へと紅き瞳のオルフェトが飛び込んでいく。

ただ彼が立っていた場所に、走り出したであらう爪の痕と土煙が残る。

文字通り闇に消える

『うわあ……』

『すうじい……隊長の本氣?』

『……その五分の一ぐらいかな?』

闇に走る無数の閃。

闇を文字通り風の如き速さで走る何か。

風が通つた痕には、まるで巨大な金網の如く、一瞬でブレードが割り貫いた痕がいくつも浮かび、ソレは全身に広がっていく。音もなく、ただ斬撃だけが静かに火花一つ上げず広がり、崩れ落ちるロボットの身体に滑らかな断面が露わになる。

そして崩れる四肢すらも霧と煙に変え、闇が無音の中へと飲み込む。

そして無数に広がる斬痕は、そのまま「シクピット」と胴体を微塵に切り裂いていく。

『がああああああ！化け物が、人殺しがああああ！お前らさえええええ！』

キィイインッ

闇の中に響く激しい風切音。

フワリと僅かに宙を漂う光の粒子。

地面を擦り滑るようにランディングしながら、振り下ろした右腕のブレードが地面を大きく抉る。

闇の中に再び、背中を向け片膝と片腕をつきながら紅き瞳のオルフェトが姿を現す。

文字通りバラバラになつて宙を漂う無数の巨体の残骸を背に、ゆっくりと屈めていた機体を起こし、立ち上がる。

背中を向け、僅かにうつむいたまま、紅い瞳を足元に向け細める

『……また一步、終わることができる、これで』

開いた腕の装甲に収まる大型の内蔵ブレード。

フワリと土煙に漂う長い銀髪の後立。

紅い瞳を細め後ろを振り返れば、崩れ落ちて地面にぶつかる巨人の残骸。そしてソレと共に大きな爆発が噴き上がりドーム状の施設

を紅く照らした。

爆風は地面を擦りアスファルトを巻き上げ、周囲の工場を一瞬で押しつぶしながら服上がっていく。

スッと腕を伸ばし、紅き瞳のオルフェトは手の平を開くままに光の粒子を手の中に浮かべる。

眼前に迫る紅い炎の渦に向き合つ

『エルクシユ アルト・ラナフェル』

手の平から零れる光の粒子はやがて分厚い光のドームとなつて、周囲のオルフェトを包み込み、爆風を跳ね返していく。

そして光の壁の向こう透き通つて見える爆炎の川を見上げながら、近付いてくる友軍機に紅き瞳のオルフェトは振り返る。

『隊長っ、やつたよお！』

『そうだな 残存している田標物の確認を』

『全工場破壊しましたっ大丈夫ですっ』

『まあ残つていてもいいが。……後でまた壊しに来るだけだがな』

『隊長残酷う……』

『優しいつもりさ ガングレドと連絡取れるか？』

やがて光の向こうから晴れていく爆炎。

光の壁が小さくなつていき、手のひらに小さな球体収まるままで、紅き瞳のオルフェトは手の平を閉じると腕を下ろした。

そして銀の狼は仲間の通信に耳を傾ける。

『え……？』

そして目を見開く

『 冷却まだ？』
「んん……まだ」

山の山頂付近。

海に面した巨大な送電施設が見下ろせる場所にて、四機の黒いオルフェトが片膝をついて構えていた。

手元には十メートル超の大型砲台。

冷却用ファンは常に回りっぱなしで蒸氣を噴き上げ、銃身からは景色が歪む程に熱が昇っていた。

見上げればまだ撃てる状態ではなく 砲台を抱え構えたままのオルフェトから降りた獣人の少女は焦りに顔を歪めた。

「……どうじょう？」

『待つしかない。ここで動いてどうなるものじゃない』

四番機のオルフェトは三機のオルフェトの背後、両腕にライフルを抱え山道で敵の気配を探りつつ背部に装備したレドームを空に向けていた。

『……皆つまくやる。やるつて隊長は言つてた』

「……ユウ隊長」

『まだ？』

「……後一分」

『皆に伝えるよ』

『了解。私たちもそろそろ乗ろう』

三人の獣人は眼下に見下ろす夜の戦場の景色に後ろ髪を引かれながらそれぞれオルフェトへと戻る。

ドオオオオンッ

爆発と粉塵が海に面した街に広がり、ガラガラと白いドーム状の建物が崩れていく。

ソレと共にマズルフラッシュが断続的に各所で光を放ち、宵闇の中、クレーター状に広がった戦場の中で味方が散開していく。

そして立ち上る粉塵に混じって、弾幕と砲撃が巨大な送電施設の壁を崩していく。

『ぐえ！』

『七番機！後退しろ！六番機！後退しつつ五番機とバディを組め！』

『り、了解……！』

ドゥンツ

耳元を掠めるミサイルのバックファイア。

ガングレードのオルフェトは体を屈めキャタピラで地面を滑るよう
に身体をよじるままに右腕のブレードを振り上げた。

シユツと縦に真つ二つに裂ける小型ミサイル。

推進機と弾頭が分かれ後ろに爆発することなくミサイルの断片が
転がり、オルフェトは機体を屈めるままに紅いエルザへと飛び込んだ。

グツと掲げる大型のシールド。

すでに右半分を切り裂いて僅かに紅い装甲が露出し、オルフェト
はその肩を突進するままにぶつけ紅いエルザを地面へと押し込んだ。

『鈍い！』

『があああ！』

シユツと小さな音と共に関節にめり込む鋭く、同時に分厚い刃。
仰向けになる紅いエルザを組み敷くままに、オルフェトはその首
元にブレードを突き刺すとそのまま首を刎ねた。

『コウううううー！』

『黙れええ！』

ポンツと宙に舞う頭部センサー。

ドドドッ

ミサイルが脚部から発射される中、ガングレードのオルフェトは前方に飛び上がった。

そして身体をよじり頭を下に逆さになる中、肩のガトリングレー
ザーがとっさにかざした分厚いシールドに跳ね返される。

『後方機、現在の目標の損傷率を教える！』

『現在目標地点予想破壊率七十五%、もう少しです！』

『上等だ、各機異人如きにぬかるなよー！』

ズウウンツ

地面に地面にめり込む脚部。

足元から噴き上がる土煙を払うように踵を返すと、ハ連レーザーバレルを回転させ後方に下がりながらガングレドはトリガーを引いた。

闇の中レーザーラインが連續して立ち上がる紅いエルザの両脚部を貫き、赤熱した弾痕が爆発に変わる。

『があああ！貴様ああああ！』

ハ連レーザーバレルから噴き上がる煙。

そして紅いエルザはゆっくりと前のめりに倒れていく中、ガングレドは肩部装備を外し紅いエルザに背中を向けた。

グッと地面の砂を掘みにじり寄る紅いエルザ。

粘りつくような憎悪にゾクリと体毛が逆立ち、ガングレドは剣の巻に顔をしかめながらモニター越しに紅いエルザを睨む。

『……隊長は、我々のものだ』

『返せ……返せええええ！』

『人は我々を嫌悪した。故に我々の敵である貴様らが獣人に行つた事、隊長に与えた苦しみ、決して忘れん。

貴様は人で我々は獣人だ！』

『ユウ……ユウうううううう！』

『殺しはしない 隊長が悲しむからな』

腰の装甲が開き迫り出す小型の拳銃。

通信越しに吠える男の嘆きを横目にオルフェトは拳銃を左手に右手に内蔵ブレードを取り出すと、キャタピラで送電施設へと足を運ぼうとする。

土煙を上げ、走り出そうとする

掠める機関砲の発射音。

ブシュッ

尖った耳に聞こえてくる肉のちぎれる音。

コックピットの右壁が大きく抉れても、ガングレドは痛みに身体をよじるままに、左腕でオルフェトを操作する。

抉れた装甲から覗かせる狭いコックピット。

腹上部装甲が背後から迫る弾丸に飛び、オルフエトは右腕を垂らしながら慌ててターンをして左腕の拳銃で応戦する。

『ぐうううう……！』

ジクジクと痛みが頭に走り、既に右腕の感覚は全くなかつた。右腕が吹き飛んだのを感じる

霞む視界でモニターを確認すれば、そこには這いつくばりながら右腕の内臓機関砲をこちらに向ける紅いエルザがあつた。

紅く滲んだアイサイトがこちらを見上げ、無秩序に弾丸を飛ばしてくる。

嗤つている

『殺す……お前殺してコウを取り返すんだあああああ！』

『戯言を……』

血が抜けてきて、頭の熱っぽさと共に息が荒くなり、フラフラと身体を操作しながらトリガーを引き絞る。

ソレと共に拳銃の弾丸が一発、紅いエルザの頭と背部を撃ち貫き、ソレと共に紅いエルザが機関砲を飛ばす。

ドドドドッ

眼前で鈍く響く弾丸の音。

やがて黒い装甲の一部が破れ、重たい衝撃が腹にあたると共に突き刺さるような痛みが身体を走った。

『かあ……』

モニターと壁に飛び散る血飛沫。

口から血が上り、背中まで貫く分厚い装甲の破片に顔を歪めながら、ガングレードは目を血走らせモニターを覗く。

そこには頭部と背部から炎を上げる紅いエルザ。

特殊発火弾　金属の摩擦により高熱と発火現象を起こす弾丸が紅いエルザを一機に燃やし、やがて大きな爆発が起きる。

そして紅いエルザから零れた激しい憎悪と邪気が途切れる。

『……これで、隊長は……』

口の端に血を滲ませ、安堵に零れる笑み。

痛みはすでになく腹から溢れた血が身体を濡らす中、左腕のみでガングレドはオルフェトを操作して鮮血のこびりつゝヘッドマウントモニターに目を細める。

土煙を上げるキャタピラ。

抉れた装甲の隙間から火花を散らしながら、ダラリと右腕を垂らしつつオルフェトは巨大なドーム状の施設へと走る。

ドロドロと血があふれては剥がれた装甲の隙間から紅い尾を引いて、黒い鎧を濡らす。

土煙を上げる音が尖った耳から遠のいていく。

目がかすみ、やがて暗闇が視界の端から広がり始める。

もう、持たないだろう

『こんなものか。死とは……』

「イと零れる笑み。

ドーム状の白い壁がやがて眼前に見え、オルフェトは壁に沿つように行走する。

ソレと共に弾幕が降り注いで粉塵舞う壁の抉れた部分が見えてきて、オルフェトは前かがみに粉塵の中へと機体を潜り込ませた。そして施設内へと入っていく

『ふ、副長！？』

『各機へ！私が内部から施設を破壊する、完全に、確実に…』

『だ、だけど！』

『ゴルドチーム、私が施設中枢に付いたら信号を出す、その反応を撃て！』

機体を前かがみに走らせながら、ダラリと垂れた右腕が地面に擦れ、やがて肩関節から折れて外れる。

紅く赤灯の並ぶ天井へと消えていく右腕。

ソレと共に弾丸の雨から前方から降り注ぎ、通路を走りながら警備口ボットが近づいてくるのが見える。

だがそれも視界が黒くかすむと共に消えていく。

（隊長……申し訳ありません……本当に……）

それでも、耳と鼻越しに感じる敵の激しい敵意と弾丸の飛んでくる距離と速度。

滑らかな黒い装甲で弾丸を弾くようにして、機体を動かしながら、オルフェートは走るままに施設奥へと走つていぐ。
(私が死ねばあなたは悲しむでしょう……あなたが泣く所が眼に見えるようです)

困ったように、黒き狼は口の端を歪めたりと笑みを滲ませ、そして目を静かに閉じた。

なにも映さなくなつた瞳の奥、景色が見えた。

ガングレド、大丈夫か？

暗闇の中、自分を呼ぶ声がした。

(……隊長……隊長)

手を引く銀色の狼が見える。

夜風に揺れる長い尻尾。

草原に立ち、星空の下、地平線から昇る夜明けを見つめる、気高く雄々しい紅い瞳のオオカミが見える。

優しく微笑んでいる

ガングレド、行こう。お前と一緒にこの戦いを終わらせりつ。

(……はい、一緒に……どこまでも)

僅かに動く左腕で機体を動かしながら、やがて通路がすさまつていくのを感じる。

ガンガンと装甲が壁にぶつかり、やがて目の前の通路がすさまると共に周囲が開けるのを感じる。

周りには重たい重低音と共に僅かにイオン臭が漂つ。そして感じる激しい電気の感触。

血に汚れた黒い体毛がびりびりと逆立つ。

ここが

(……隊長……私はあなたが好きです……大好きです)

俺もだよガングレド。

(……よかつた……本当に……ほんとうに)

そして、最後のボタンをガングレードは押す。

ピッと短い音。

カウントダウンがモニターに走り、オルフェトが崩れ落ちるままに背後から飛んでくる弾を受けその場に蹲る。

弾幕は背中に重たい衝撃を与える、鈍い痛みと共に下半身が千切れたのを感じる。

やがて心臓すらも止まるだろ？

それでも、仲間の為にそして

『 友の為に……』

操作マニアーバから離し、ゆっくりとヘッドマウントディスプレイを外し、黒き狼は天井を見上げる。

暗く狭い天井の向こう、瞼の裏に銀の狼の微笑みを浮かべる。

そして優しく手を差し伸べる

(隊長……私は……あなたを愛しています)

そして黒き狼はつられて不器用な笑みを見せた。

(だから……)

カウントダウンが終了する。

(生きて)

ドームの施設天井を貫く程に大きな爆発が起きる。

宵闇を引き裂くほどの大規模な爆発に、山頂付近に待機していた三機のオルフェトは巨大な砲台を向ける。

トリガーに指を掛ける

『 ……ピーター……副長……死んじやつたの？』

『 撃て！』

『 でもお…』

『 戦いを長引かせて皆を殺したいのか、早く終わらせないと皆死ぬんだよ撃てえ！』

『 ……くそおおお、ピーター！』

『 各員へ！高エネルギー砲を発射する、全機後退、繰り返す全機後

『退しほおおおおー』

『撃つぞー!』

『撃てえ!』

『ゴルドチーム、撃ちます……』

闇を引き裂き進る光の奔流。

周囲の木々を吹き飛ばし、土を抉るままに砲塔から噴き上がる二つの高エネルギー砲は一つに集まってドーム施設へと迫る。

真つ二つに引き裂くままに貫く鋭い光の柱。

反対側へと細い射線が通るまさに、土煙がキノコ雲を作り、大きな爆発が海を波立たせ噴き上がった。

衝撃が周囲のエルザを飲み込み、後退しながらシールドを張るオルフェト部隊へと迫る。

そして巨大な爆発の中へとドーム状の施設が完全に崩壊し、消滅する。

ガングレードの機体と共に

『エネルギー……尽きます』

細くなつていく火線。

溶け切つた砲台から身体を離し、四機の黒いオルフェトは踵を返すまさに暗い山を下りていく。

『……』

『戻るぞ……泣ぐのは終わってからだ』

『うん……うん……』

『僕らが……僕らがちゃんとしていれば……』

『…………隊長がちゃんとしてくれる……隊長が……隊長が……』

『隊長……お兄ちゃん……お兄ちゃん……一……』

すすり泣く声が闇の中に響いた。

翌日、正式な通達として、旗艦アストライアに乗る全獣人に伝えられた。

ガングレードが亡くなつたと

夕焼けの続く午後六時。

「……ごめんね、気づけなくて」

彼女を家に送り届け彼女の家に入つて気がついたのが、拓斗の部屋の荒れようだった。

写真は全て破られていた。

残っているものは、僕と彼女の顔が割り貫かれていた。

拓斗一人だけが映る写真しか残つていなかつた。

この部屋で、彼はずつと孤独に生きてきた

「……ごめんね」

僕はそう呟き、彼女の眠る自室へと足を運んだ。
綺麗な部屋だ。

ピンクや白を基調にしたカーテンやベッドカバー、机やマットなんかがあつてそれでいてどれも綺麗で気品みたいなのがあつた。そんな部屋で、彼女はベッドに横たわつていた。

眠る姿はいつもと変わりなく、分厚い布団に身体を覆つたまま、仰向けのまま静かに目を閉じていた。

白い肌がカーテンの隙間から零れる夕焼けの光に照らされ赤らむ。

今にも、目を開けておきそうだつた。

優しい声が聞こえてきそうだつた。

大好きな、彼女の声が

「……ごめんね」

僕はずつと眠る彼女を見下ろし、僅かに笑つた。
もぞもぞと布団の下で何かが蠢く。

代謝活動を止めた骸である身体すらも関係なく、あの化け物への変化は彼女に起き始めようとしている。

死者すらも鞭打つ力。

それほどまでに、何かが世界へと浸食を始めている

「……行つてくるよ」

僕は踵を返し、変異する彼女を横目に部屋を後にした。
カツリカツリと鋭く伸びた足の爪が床を叩き、長い手の爪が壁をなぞるのが滲んだ視界に映る。

僕の姿も、化け物になってしまったのがわかる。
構わない。

この変異を止めよう。

こんなことを終わらせないと。

その為に、出来うる限りのことをしよう。

僕は彼女の家を出ると、夕焼けに目を細め、遠くと回の中心にそびえる巨大なビル、東京都庁へと目指した。

紅い光の玉が宙に浮かんで、バチバチと空を染めていく。
あの場所に多分何があるのだろう。

バイクは運転した事がない、車当然なく、辺りを見れば自転車はなく、電車は止まっているだろうし、移動手段は皆無だ。

なら、歩いていこう。

なんとしても、あの場所にたどり着かないと。
止めないと。

僕はあの場所まで歩いた。

紅い炎を灯す空の下、大きな都庁ビルを目指して、僕はゆっくりと歩いて行つた。

三年前の話だった。

暗闇の中に並ぶ試験管。

「……すごいでしょ。これ」

透き通った床の下、敷き詰められた大型の試験管には大量の食塩水が注ぎ込まれ、その中に小さな肉の塊が浮かんでいた。

それは、小さな心臓。

それ以外に胃、うねる小腸、大腸、など基礎的な消化器官から脳、肺などの心肺器官が一つ一つ、試験管に入れられていた。

それ以外には毛深い獣人の腕、足などが個別に試験管に収められ保存されているのが、細めた紅い瞳に映つた。

深いため息と共に垂れる尖った耳。

アストライア艦内、特別実験室、ニアの個人研究室内に立ちながら、ユウは苦い面持ちで辺りに漂う、人の欠片を見渡していた。

「……悪趣味だな」

「見る分にはね。……これ、誰のものだと思う?」

「実験用 倭か……」

「正解。君以外の細胞は取らなかつたからね

「ぞつとしない物言いだ……」

そう言つのは、後ろに立つていた黒い狼のガングレド。

自分の分身がすぐ傍で漂つている感覺に眉をひそめながら、銀の狼は奥へと歩いていく少女の背中を追いかけた。

そして薄暗い廊下を抜け、やがて小さな書斎へと足を運ぶ。

そこは比較的広い部屋。

書籍がびつしりと詰められた戸棚がいくつも並び、ベッドの上にも半開きの本が散らかっていて、床は足の踏み場がないように思えた。

た。

ペタンと垂れる尖った耳。

ガングレドはむず痒そうに鼻先を手で覆い、銀の狼は呆れた面持ちで肩をすくめると後ろに立つ副官に告げた。

「ガングレド、外で待つていて構わないぞ」

「い、いえ……くしゅつ」

「つたく……」

小さなくしゃみをしながら、後からついてくる黒い狼にユウは小さく肩をすくめつつ、床に散らかる本を踏みつつ部屋に入った。

部屋の奥、机の上に腰を落としあらを手招きする少女、ミアを見下ろしユウは首を傾げる。

その手には、食塩水を注ぎこまれた小さな試験管。

その中に漂うのは、光の粒子を放つ、蒼い鉱石。

優しく微笑むままに、少女は散らかったベッドに座る銀の狼を横目に、光の鉱石を覗き唇を僅かに開いた。

「……わて、少しほぐの研究を見てもらつたけど、どうかな?」

「さつきの俺の内蔵か?」

「ん」

「俺の身体だつた」

「正解。あれはね、ユウの身体の細胞を一欠けら貰つて細胞を増殖させて作つたものなんだ。」

あれはね、ユウの遺伝子設計図を基に作つているんだ」

「隊長の身体は、獣人のソレと既になつてゐるといふことが、ミアよ?」

そう言つて壁にもたれかかりながら、尋ねるガングレードに、ミアは小さく首を振つて見せた。

その反応に銀の狼はスウと紅い瞳を細め、怪訝そうに眉をひそめる。

「……何が違つ」

「……多分、ユウも見てきたと思つ、この変異、『異人』化は代謝的、生物学的な変化じやないつてことを」

「……」

「これみて」

そう言つてミアが壁のモニターへと手を添えると、大きなモニターに光が入り、ミアは机のリモコンに手を這わせた。

そこには複雑に絡む遺伝子構造が一つ、画面を一つに分け立体的

に映し出されていた。

それは、巨大な二頭の龍のようにも見え
構造映像を見つめるままに首を傾げた。
「一つは俺か？」

「もう一つは変異していない人間の死体から取つたもの。DNAの
基礎構造を見せるところなる」

そう言つてらせん構造を作る一つの塊へと焦点が走り、それはさ
らに細かな塩基配列の組み合わせが浮かぶ。
どちらも、一緒のように思えた。

どちらも、見れば見る程、一緒のようにな
「……まさか」

少女は僅かに微笑む。

「どういう事です隊長？」

「俺の遺伝子は、この体になつても変化していないと言つ事
だな、ミア」

苦々しく顔をしかめる銀の狼に、ガングレドはハツと目を見開き
顔を上げると、血眼になつて画面に視線を送つた。

そこには、ほぼ同じに見える遺伝子構造が見える。
螺旋の塔が一つ、暗闇へと向かつて伸びている

「ど、どういう事だミア」

「君たちは『人間』だつて言う事。生物学上、どんな姿にならうと、
その姿は人間であることの証明だつて言う事。

驚く事に、そこらへんの異人から取つても結果は同じだった
「……」

「ユウ。君に聞こう。これは誰が間違っていると思う? ぼくの研究
結果? それともこの遺伝子情報? ぼくらの認識の変化? ぼくらは君
たちだけを『獣人』とみて他の人を『異人』とみて、その他の人達
だけを『人間』とみている?

これは何が間違っていると思う?」

少女はそう告げてほほ笑む。

ユウは俯いていた顔を上げ、鋭く細めた双眸をニアに注ぐままに、喉を鳴らし僅かに開いた口から声を漏らした。

「……認識じゃない。特定の人間の認識が突然、そこまで細やかに見分け変化するなら、それ相応に脳に変化があるし、遺伝子に相応の変化がある。

お前は、その事を告げなかつた 僕の脳に変化はなかつたな

……

「何一つ、君は常に『人間』のままだよ」

「……なら、答えは一つだ。……この遺伝子は『人間』のソレではなくなつている

「……。本当に、君は頭がいい。惚れちゃいそつだよ……」
再び俯く銀の狼に、ニアは感嘆のため息と共にそう告げた。
と、ガングレドは怪訝そうに眉をひそめたま真首を傾げると、向かいのベッドで項垂れる銀の狼に尋ねた。

「隊長……どういう事です。私には何が何やら……」

「……セルバンテスのドン・キホーテは知つてゐるか?」

「え、ええ……名前ぐらいは」

戸惑う友人に、ユウは肩を震わせ小さな笑い声を含ませると、静かに語つた。

「難しい例を出すわけじゃない。……かつて騎士エル・キホーテは風の噂で耳にした邪悪な巨人がいるという場所に向かい彼らに戦いを挑んだ。

だがその邪悪な巨人は、傍から見れば単なる風車小屋だった。にもかかわらず彼は戦いを挑み続けた

「……彼の頭がおかしいとしか」

「だが当人の認識は風車小屋が邪悪な巨人だった。これが個人の認識という概念だ。これを世界という一人の個人に置き換えると、世界はこの肉の塊を『人間』とかつては呼び姿を与えていた。

今は違う もつともらしい説明は、まだはつきりとできないがな

ミアは「クリと頷いて見せる。

「社会学的には再現世界とも言われている。……この遺伝子を我々、というより世界は『人間』だと与えていた。

だけいまはそれが違つ、この遺伝子は『獣人』であるという定義へと置き換わっているんだ。それだけじゃない、ありとあらゆる定義、証明、存在、認識、概念がまったく別の喪に置き換わっている。ありとあらゆるもののが変異しているんだ。これは生物学的な変化ではなく世界そのものの定義の変異ともいえるね」

「故に死んだ人間も生きている人間同様に変異する……この変化は、この世界において内在的に起きたものではない。この定義は、こんな唐突に変化するものじゃないし、そもそもこちらの世界には存在しない。

ミア……この変異は外圧的に起きたもの。……何かがこの世界の概念、認識そのものを変化させているな

彼は静かにそう告げた。

ミアはギョッとするままに、感嘆にため息をつくと、机から飛び降りて俯く銀の狼へと歩み寄った。

そして俯く彼の傍に座りその横顔を覗きこむ

「……どこまで知ってるの？」

「……かつて再生技術で、変化前の細胞を使って美沙を蘇らせようとした。……だが出来たのは醜い化け物だつた。

その時、これは生物的な変化ではなく、もつと高次の異変だと気付いた。世界そのものの概念、定義すら壊れていくほどの強い力だと

と

「……かつて、こちらの世界にこんな定義は存在していなかつた。だけある日を境にこの定義が流入してきた。

ううん、そうじゃない。もっと大きなもの、世界そのものが別のもとに置き換わろうとし始めた

「あの日を境に　　か……」

「クリと頷く銀の狼に、ガングレードは只管に首を傾げたまま一人

を見比べては眉をひそめる。

「隊長……どういう意味ですか？」

「ガングレド、単純な話だ。誰かが引いた図面を書き直して別の図面を引こうとしているんだ。

ミア……この世界とは別の世界の概念、定義が流れ込んでいるんだな」

表情を強張らせ、ミアは静かに頷いた。

「世界を変えるには、同じエネルギーをもつた存在、即ち別の世界の存在を以つて為すつて言う事。この世界とは全く別の定義、概念が存在する世界が、この世界の存在定義、概念認識を塗り替えていつているんだ。

あの日、世界は別の世界へと繋がった。どんな因果かは分からない、研究なのか、それとも偶発的なのは分からぬ。だけどあの日あの場所で世界は異世界への道を開いた」

「……だが、一つの椅子に一人は乗せられない」

「どちらかしか残らない」そんな状況下で力関係は直ぐに決まつた。向こうの世界はこちらの世界を取り込もうと自動的に動き始めた。故にこの世界は今消滅の危機にある。今は人や物の概念の変異で留まっている。だけどやがて時間、空間の認識、街の景色、夕暮れの色、定義、概念、証明が全て向こう側のもの塗り替わるだろう。

ひから側の世界の全てが、向こう側の世界の概念へと全て塗り替わろうとしている

「うーん……よくわからんが……この世界が、ミアの言つ別世界へと変異していると言つ事……か。その副作用として、我々などが獣人、異人と変化している」

「お、うまくまとめたねえ。ガングレドさつすがあ」

「ありがとう……頭が痛い」

眉間を押さえる黒い狼に、ミアはクスクスと甲高い笑い声を上げると、隣で項垂れる銀の狼を見上げた。

そしてまた表情を強張らせ、彼を見つめる

「塗り替わった世界はもう一つ世界に吸収される。……その適応として、ユウはその姿に置き換わったんだ。異人はその適応の過程でバグが発生したんだ。君は既に、こちら側の人間ではなく、向こう側の人間の血を引いているんだ」

「魔法……俺のあの力も、向こう側のもの、か……」

「ユウは特別だけどね、だけど君だけでもこちら側にない『定義』、『魔法』と呼ばれる概念が存在し、また行使できるのは、向こう側の世界の定理が適用されている証拠なんだ」

「…………」

「何？」

「この変異は『適応』と言つたな」

「うん」

「適応できなかつた存在はどうなる……？」

「消滅する」

「…………」

「言つたよね世界は浸食されていくって。……こちら側の世界は言葉通りいすれ消滅し、残つた存在は向こう側の世界に立たないといけない。

この世界はいすれ消滅するんだユウ……故に適応、消滅しないためにこの世界の定義、概念、認識、そして世界そのものが、向こう側のソレへと適応しつつある

「出来なかつたものは消滅」

「そうだよ。『人間』はこの先十年以内に、全て消滅する。それはゴールドスリープに入らうがなからうが関係ない。世界の消滅に伴いこの世界に所属する全ての存在が消えてなくなる」

「…………」

「ガングレド。君なら多分ここまで聞いていたならわかるはずだ。この先どうするべきか」

そう言って目を向けるニアの視線に、ガングレドはムツと表情を

強張らせたまま、ややあつて俯くと目を閉じた。

そしてため息交じりに呟く。

「なるほど……お前が言つには、この先十年以内に『人間』は自動的に消滅する。故に我々は守りに徹しているだけで勝てる、と」「そう。やがてカウントダウンで消える存在を敢えて殺しにかかる必要なんてないってこと。或いはそっちの方が死人も少なくなるかもしけない」

「 隊長……」

ガングレドは俯いていた顔を上げ、頸垂れるユウを見下ろした。くすんだ赤い瞳は無言のまま全てを知つているかのような面持ちで足元を見下ろしたまま微動だにしない。

ただ小さなため息が僅かに続き、銀の狼はグツと拳を固めでは、手の平を広げて覗きこむ。

命を帯びたように、空中を漂う無数の光の粒。

『魔法』と呼ばれた力の源であるこの光は、暖かく銀の体毛を白く照らし、紅く滲んだ眼にまるで螢のように映る。

静かに音も無く、薄暗い部屋に光を灯す

「……ミア」

「うん」

「 向こうの世界は、どんな世界だ？」

「……」

「お前は、向こうの人間なんだろう？」

「ばれるか……」

「匂いでわかる。……この世界とは別の匂いだ」

グツと光の粒を握りしめる毛深い掌。

メガネの奥に苦笑いを零す少女に、ユウは呆れたような表情を滲ませると顔を上げ薄暗い天井を見上げた。

そして紅い瞳を閉じ、瞼の裏に闇を浮かべ、息を吐き出す。

「 ガングレド……」

「はい」

「「」の事は、他言無用だ

引き続き、組織は日本連邦軍との戦

闘を続行する」

「隊長……」

戸惑うガングレド。

銀の狼は目を閉じ天井を見上げたまま、やがて力なく頃垂れると、隣に座る少女を見下ろした。

表情を崩すことなく零れる微笑み。

ソックと毛深い手に小さな手を這わせるままに、スウと紅い瞳を細める少女にユウは眉をひそめた。

「ミア……どんな世界だ」

「平和だよ。ただあっちにゲートが出来て、僕が調査に出た。それだけ」

「漫食は……止まらないのか？」

「戻すことはできない」君の身体は、もう「」の世界に所属していないからね

「……皆も同じか」

「うん」

少女は静かに頷く。

ユウはミアから目を離し力なく頃垂れ、そして自分の足元を見つめながら、ゆっくりと目を閉じる。

瞼の奥、思い浮かぶのは、あの夕焼け。

学校の屋上。

友達の笑い声。

そしてあの日の少女の笑顔。

静かに涙が頬を伝つた。

狼は静かに目を開き、不安げに「」ちらを見つめる友を見上げた。

「……もしかしたら、向こう側に、俺達の信じる平和があるかもしない」

「……。「」の世界を見捨てるのですか？」

「それもいいさ　ただ、「」の世界には皆思い出が残るんだ。」

……捨てるには、重たい場所だ。

残っている人達も、皆生きよつとしている。世界も同じだ。俺はそんな彼らを出来る限り生かしたい

「……和平ですか?」「

「ダメだ。……一時的な和平を組んでも、いずれまた差別が始まる。我々の容姿は人が嫌悪する程に、その姿を変えた。

この身体が示す様にもはや、この世界に俺達の居場所はないだろう」

「……」

「ミア……この世界と向こう側を繋ぐ場所はどうだ?」「..」

少女は小さく頷く。

「君も、よく知つてゐる場所だとと思ひ」

「……また、あの場所に行く事になるとはな

その言葉にガングレドはハツとなるままに、壁にもたれかかっていた身体を起こした。

「隊長、もしや……」

「……どの道、あの場所に連邦の本部もある。目標は変わらない。向こう側に行つた後追つてこられても困るしな」

「……。そうですね、どの道叩かなければいけない相手です」

「ガングレド……俺は都庁に向かおうと思ひ」

「はいっ」

「……手伝つてくれるか?」「

「もちろん、貴方が望むまつに」

「ありがとう……」

強く頷くガングレドに、銀の狼は小さく頭を下げ、申し訳なさそうに笑みを滲ませた。

クイックと服を引っ張る小さな手。

振り返れば、そこには優しく微笑む少女。

「ユウ……一つ聞いていい?」「

ペタンと耳を垂らし、狼は首をかしげていると、少女は静かに尋

ねた。

「君は、何のために戦うの?」

「……」

「なぜ、都庁を目標にするの?」

「あの時、答えは出せなかつた。

ただ黙りこくつたまま、じつと見つめる少女の厚い視線から目を反らし、狼は小さなため息と共に頃垂れるだけだつた。

そして静かに目を閉じるだけだつた。

「……ガングレド」

アストライア艦内。

そこはガングレドの部屋の中。

中は整頓したまま残つていて、机も綺麗に磨かれクローゼットに

はいくつかの私服と軍服が飾られていた。

僅かにしみついた彼の匂いが突き出した鼻先を伝つた。

彼が生きていた痕がしつかりとここに残つていた。

ベッドはシーツがきちんと畳まれ、上には出撃前まで着ていた軍

服が綺麗に畳まれていた。

匂いが強く残つていて、今にも足音が聞こえてきそうだつた。

黒い狼男が目の前に立つてゐるかのようだつた

「……」

本棚にはいくつか焼けのこつた実用本とアルバム

そこには仲間と撮つた写真が残つていて、いくつかは死んでしまつた者達も写真の中に入つてゐた。

色々な場所を回つた。

アストライアに乗り世界各地を回り、紛争を処理し、仲間を集め、

オルフエトに乗って敵と戦い続けた。

いつも一緒にいた。

いつも、背中を支えられ、前線で戦い続けていた

「……」

アルバムを閉じ、銀の狼は静かに戸棚に戻す。

フワリ……

長い尻尾を翻し、踵を返すまさに、強く彼の匂いの残る部屋を後にしようと、狼は静かに床を蹴りあげる。

扉に手を掛け、自動で目の前の壁が開く

「コウツ」

聞こえてくる甲高い声。

ヒクリ……

垂れていた耳が尖り、俯いていた顔を上げると、銀の狼は霞んだ視界の中、目の前に息を上げる少女を捉える。

苦しげに胸を押さえ上下する小さな肩。

メガネの奥、不安げに紅い瞳を見開くままに、少女は立ちつくす銀の狼を見上げるなり安堵に笑みを零した。

「よかつた……やつぱりここにいたんだ」

「ミア……」

「…………ジークさんが呼んでる。新型機が搬送されたって」

「……。ミア」

「ん……」

「ガングレドは、死んだ……」

「うん……『ルドチームのみんなから聞いた』

「あのバカは……傷だらけの機体で施設に特攻して……」

「うん……」

「……。ミア、お前の言つとおりだ」

風に靡かせる長い尻尾。

コツリ……

静かな廊下に爪を擦らせ歩き出す銀の狼の背中を、少女は踵を返

すまに慌てて小走りに追いかける。

そして小さく丸まつた背中を見上げる

「ユウ……」

「お前の言つとおり、防衛に専念していれば、こんなにも被害が出ることがなかつたろう。

それ以前に無茶をして一面作戦を行つて……俺が一つに絞れば、こんなことにはならなかつたかも知れない」

「……。仕方ないよ、少しでも急ぐ必要があった。この世界は今も浸食を受けている」

「……俺が……戦う事を選んだばかりに」

「…………ユウ……」

「なんで、ユウは戦うの？」

ピタリと止まる脚。

大きな背中が丸まつたまま止まり、ニアは同じく足を止めると、彼の隣へと回り込み狼頭の横顔を見上げる。

俯いて、濶んだ紅い瞳が見えた。

とても悲しげに口を開く横顔が見えた。

「……わからない」

「…………」

「ただ俺が許せないのは、戦う目的も曖昧なまま仲間を見殺

しにした、ガングレドを見捨ててしまつた……。

なのに、なぜは俺は生きているんだ……」

「…………」

「俺は……」

ギュウッと毛深い手を握りしめる小さな手。

身体を引っ張る小さな力に、ユウは僅かに顔を上げると、両手で

一生懸命腕を引っ張る栗毛の少女がいた。

汗を額に滲ませ、苦しげに顔を紅くして狼男の重たい身体を引っ

張ろうとしていた。

「んんっ……」「ウの身体重たいつ」

「ミア……」

「……行こひつ。ユウにぼくが作った機体を見てほしいつ」

少女ははうつすらと汗を搔きながら、少し照れくさそうに微笑む。そして、少し哀しげに俯く

「ぼくは……基礎研究者だし、あんまり大した励ましなんてできない。でも、君に未来を見せることができるよ。最高の図面を引いて最高の兵器を見せることができる」

「……未来」

「ガングレードは信じていたよ。君が進もうとした未来 皆が幸

せになるって夢」

「……向こうに何かあると希望を持つたに過ぎない……」

「それでも、その為に突き進んだ君の背中を、多くの人達が見ていた。君がその為に一番前線で戦い敵を倒した姿を皆が見ていた」

「ただの欺瞞だ……俺は、ただ皆を守りたくて……」

「その先に、平和な未来がある。……皆と一緒に向こう側に行く、そう決めたんだよね。争いの果てではなく、新たな未来の光を信じて」

「俺のエゴだ。本当なら守るだけで済んだのに……俺は、仲間を殺した……」

「皆知ってるよ」

「え……」

少女は惚ける。

ギュッ

狼の両手を掴んだまま少女は少し照れくさそうに笑うと、惚ける狼の身体をぐつと引っ張った。

カツリと床を叩く爪。

ヨロヨロと歩き出す大きな体を横目に、ミアははうつすらと汗を搔きユウの身体を引っ張つて歩く。

そんな小さく、大きな背中を、紅い目を見開き狼は見下ろす

「皆、何となくわかつてゐる。コウが信じる未来。皆を守りたい事、コウの気持ち」

「……」

「そんな君だから、皆ついていく。命を賭けて無茶をする君を守らうとする」

「ニト……」

「ガングレドは……君を信じた。多分、最期まで……そして今もつすすり泣く声が微かに聞こえる。

ギュウ

強く体毛に食い込む指は痛く、そして暖かく 銀の狼は俯きながら唇を僅かにかみしめた。

僅かに、声が口の端から洩れた。

「ぐつ……ひぐつ……」

「コウ……ガングレドは自分を誇った、君の為に命を投げ出せる自分を……誇りに思つたと思つ」

「…………ごめん…………すまない…………俺が…………俺は…………」

「君の後ろには皆がついていつている……皆君を信じてる」

「ガングレド……俺は…………お前の為に何も……」

「自分を信じて……君が歩いている道は険しく遠く闇が広がり…………でも必ず光があるから……」

「…………あ…………あ…………」

コウは俯きながら何度も頷いた。

滲んだ視界に小さな少女の背中を捉えながら、丸めた背中を震わせ、それでもヨロヨロと廊下を歩く。

その向こうに広がる薄暗い闇を手探し、彼女と共にゆっくりと歩いていく

「…………あ…………」

「コウ。聞くね」

「なんで、君は戦うの？」

ゆっくりと広がる紅く澄んだ瞳。

俯いていた顔を上げ、鼻先を擦り、狼の顔を強張らせ、銀の体毛を逆立て、垂れた耳が僅かに尖る。キュッと力のこもる長い尻尾。

表情を強張らせ、濡れた目尻を拭い、銀の狼、ユウは顔を上げて闇の広がる廊下を見つめる。

グッと少女の手を握りしめる
「俺は」
握り返す、強い感触があつた。
とても暖かかった

十八話題（前書き）

へんからすこく文章が変になつとりますが気にせんでね（＊）

なぜ戦うのが、今でもはつきりとアリトには答えられなかつた。
「おお、泣きつ面晒しあつてからに……まったく坊主はこれだから
いかんつ」

「ジーク……」

「……。甥のガングレドはあなたを愛した」

「……知つている」

「應えてやれそながな?」

「……ああ」

「よかつた。それが聞けて、私の心残りがなくなつたよ
ただ、ハツキリと目に焼き付いたことがあつた。

彼女の死。

あの日の夕焼け。

仲間の死。

ガングレド……タクト……俺の友達。

多くのものが俺の中でぐるぐると渦を巻いて、俺の背中にのしか
かり、そして俺の脚を進ませていく。

重たい、重たく苦しい。

これを、俺は死ぬ最期の瞬間まで背負つていかなければならぬ
のだろうか。

辛いな。

とても辛い

「これが、新しい『ゼノアトラ』か……」

「うん……苦労したよ、素材は全部向こうから持ってきたし、君の

データをすべて打ちこんである「

だから、終わらせよう。

あの日の夕日に決別を告げ、戦い続けた日々に別れを告げよう、

そして新たな世界へと道を開こう。

その為に、俺が　　今度こそ俺が皆の前に立つ。

この道を歩いていい。う。

世界を救いたいわけじゃない、人類を守りたいわけじゃない、ただたつた二千人の仲間を守るため、俺はこの機体に乗る。

この灰色の装甲をした、狼の頭をしたロボットに

「……なあ。ミア」

「何？」

「黒く塗れるか？」

「……。わかつたつ。一日待つて、直ぐに整備班にやらせるからつ

共に行こう、ガングレド。

お前が信じた、俺が信じる未来へ、共に。

夕闇を終わらせ、夜明けを導こう、火を繋ぎ、暗闇に火を投げ、夜を明かす小さな光を求めて、この手を伸ばし、歩いていく。

共に、未来へ

『よおし。皆揃っているな』

アストライア底部、大型搬入口。

中型戦艦エルドラードを背に、そこには多く獣人達が群をなして集まっていた。

その数は約千人。

群衆の中には小型の撮影車に乗っているものもあり、カメラも人の視線も一つの方向へと集中していた。

そこには巨大なロボットが立っていた。

壁の固定用ハンガーに固定された大きな肩。

およそ十二メートルと、オルフートの一倍の大きさの全長を支える大型の脚部。

両腕にはそれぞれ収納された大型のブレードが内蔵されていて、その先端が肘の先から顔を覗かせている。

胸部中央には大型アイカメラと思しき巨大なクリスタルがはめ込まれ、その下には操縦席へのハッチが開いていた。

脚部の間から伸びる銀色の長い尻尾。

銀の後ろ髪が黒い兜、首の後ろから伸び断続的に光を放つ。紅く光った眼はじっと足元を見下ろし、お立ち台の上に立つ三人の姿を捉える。

『よおし、皆今からコウ・アトラ隊長のお言葉をよおく聞けよ！だからざわざわするなじつとしてろぞこのガキども！

コウ隊長、よろしくお願ひします…。』

そして背筋を伸ばし、ゆっくりとマイクまで足を進める銀色の狼を見つめる

『皆……これまで本当にありがとうございました。まずは俺についてくれたことに対する礼を言いたい。本当にありがとうございました。

今までの作戦のおかげで、東京全体を覆っていたシールドエフェクトが消失し、これで東京へと突撃することができる。

さて……これから俺達の最後のミッションについて話したい。これはこの船に乗る全員に関係のあるミッションだ』

皆の声が一様に静まり返る。

少し低いコウの声が響き、隣に立つミアは嬉しそうに笑みを浮かべながら、背筋を伸ばし誇らしげに立つ彼の背中を見上げる。

『最後のミッションは、この船アストライアを使い、東京にあると言われる異世界への扉から皆を新しい世界へと導くことだ。この世界に繋がるもう一つの世界、そこへお前達を導く』

ざわめく群衆。

唐突な事で無理もない　　聞こえてくる不安な声に、コウは尖った耳を震わせると小さく息を吸い込んだ。

『その為に、この船は戦線を突つ切り、東京都庁へ向かう。そして、そこに開いた接続点から別世界へと、俺達は旅立つ。

俺はこのアストライアを守るため、そしてゲートを開くためにこの機体で前線に立つ。

もちろん、道中、敵の攻撃は激しくなるだろう。その為にこの船が万が一落ちる可能性も残つてゐる』

ざわめきが大きくなつていく。

だが、ユウは噴き上がる不安を見つめ、スウと紅く澄んだ瞳を細めるままに、やがて首をすぼめ僅かに俯いた。

そしてゆつくりと目を閉じるままに、息を吐き出す。

言葉を紡ぐ

『……俺は、お前達に苦痛を強いてきた。

戦いに勝利するわけでもなく、相手に服従するわけでもなく、戦いを終わらせるために早急に和平を結ぶわけでもない。俺はこの目標の為に、多くの仲間を犠牲にしてきた。もしかしたら、新しい世界でも苦痛が待つてゐるかも知れない。

だが、それでも俺は選んだ。誰かを傷つけ征服する事を拒んだ、仲間が敵に服従するのを見たくなかつた。偽りの平和の先に、子供達がまた差別される可能性を残したくなかった。

この先に、俺達を受け入れてくれる未来があると信じ、俺はこの道を選ぶ。

皆が幸せに生きられるであろう未来を信じ、俺はこの命を皆の為に捧げよつ

静まり返る人々。

ただ僅かな息遣いが広い搬入口に響き、ユウは喋り終えて重たく息を吐き出すと、程なくして後方に控えるエルドラドを見上げた。

『俺の考えに従えないもの、この船に乗れないもの、この世界に残りたいものは、エルドラドに乗つてくれ。皆をインド半島まで送り届けた後、この作戦を実行する。

降りたいものは今ここで手を上げてくれ、或いは二十時間後舟を

出すので乗つてくれ』

静まり返つたままだつた。

コウはじつと耐え、皆が声を上げるのを待つ。

緊張に顔をしかめ、不安に喉を鳴らし、静寂に膝を僅かに震わせながら、ただ皆の返事を待つ。

「……隊長の言う事、俺ら信じます！」

最初に上がつたのは、仲間の賛同の声だつた。

「僕らずっと隊長の背中を見てきました。皆を守ろうって頑張つて、僕らそんな隊長の未来を信じます、ずっと付いてきます！」

「俺も行く、新しい世界、見てみたい。この世界よりもずっといい世界だと思つから！」

「行こりー！」

「隊長の信じる未来に行こりー。」

「行こりー！」

やがてそれらの声は大きくなり、やがて大きな歓声へと変わつていぐ。

見下ろせば、全ての人達がこちらを見上げ、目を輝かせていた。不安の色は僅かに残るもの、それでも皆、立ちあがつて拳を作つて点に向かつて腕を振り上げていた。

涙が、自然と零れた。

『……………』

コウは皆を見下ろしながら、静かにそつ咳くと、ややあつて涙を滲ませ鼻を啜りながら後ろを振り返つた。

そこにはいつも微笑む栗色の髪の少女が立つていた。

「クリと満足げに頷き、ずっと後ろにいてくれていた

『…………最後に、個人的に俺の思いを伝えたい。今まで俺を支えてくれたジークマイヤー、本当にありがとう。お前のそのでかい身体に支えられ、俺は今まで無茶をやってこれたんだ。ありがとう』

「…………つたく。若造が』

コウの後ろで、大柄な獣人ジークは照れくさそうに鼻先を指で搔

いては俯きがちに小さく頷く。

『そして、俺と出会つて約八年間……ずっと傍にいてくれたガングレド、お前がいなければ、俺は心を折つていただろう。ありがとう後ろを変えれば、そこには黒い鎧に身を包んだ巨大な狼頭の巨人がいて、コウは嬉しそうに目を細めた。

そして最後に後ろに立つミアを見下ろし、緊張に少し顔を強張らせ、コウは彼女に向き合つ。

マイクが銀のオオカミの声を拾つ

『最後にミア……ありがとう。出会つて約十年。お前のおかげでここまで来れた。お前がいたから、今のお前がいる。

ありがとう　　俺はお前が好きだ』

凍る観衆。

真っ赤になつていく顔。

『な……何言つてるのさああああ！』

飛び出すまさに、メガネが床に落ちて、紅い目を更に血走らせながら、ミアはキヨトンとする銀の狼に飛びかかった。

マイクが一人の声を拾い、更に怒声が広い搬入口に響き渡る。

『馬鹿あああ！そ、そつ言つ事普通こんなところでい、言つのおおおおー！？』

『ダメか？』

『ダメえええ！このド天然があ！こういうのひつそつとこつ、部屋の中とかでえ！』

『言つたものは仕方ない　　大好きだミアッ』

『ま、また言つたあ！ぼ、ぼくは別に君の生態とか、存在が珍しいから傍にいただけで……君のことなんか別に……別にいいいい！』
『ずっと傍にいてくれた人間を好きにならない方がおかしい、好きだミア、俺と一緒になつてくれ……』

『ふあ……ふああああ……バカあ。バカあ！バカあ、こんなことこんなで言われて……こんな……心整理なんて付かないよおー！』

『言い方が悪いのか……』

しょぼんと垂れる尖った耳。

銀の狼は泣きじゃくる少女を見下ろし、困った表情で俯いたまま頸に手を当て考える事数秒。

何か思いついたように、ピンチと尖る耳。

田を輝かせ狼は、苦しげに胸をかきむしる少女を見下ろし、満面の笑顔でマイクに声を乗せた。

『ミアッ』

『うん……うん。ユウ……その……ぼくもね……その』

『一生のお願いだ　俺の子供を産んでくれッ』

『ちょっと待つてって言つてるのにこのド天然がああああー!』

『い、言つて……ない……ぞ……』

重たい衝撃と共に腹に深く拳がめり込んだ。

「アハハハハハツ、ユウ、私は心底お前に惚れたぞつ、お前のその心意氣、躊躇いの無さ、まさに我らの隊長よ!」

「……前が見えない」

「おおつ顔がボコボコではないか、後で医務室で塗り薬でも貰つてきてやるでの」

専用ハンガーハリア。

周囲を行きかう整備員を横目に、ユウは顔中腫らしながら、背中を丸めて笑うジークに苦い表情を浮かべていた。

振り返れば、そこには壁の収納スペースに埋め込まれた黒い狼頭の巨人。

整備員の獣人に囲まれながら、装甲の隙間から火花を散らし、あるいは関節から光の粒子を吹きだしていた。

じつと遠くを見つめる紅いアイサイトは静かに遠くを見つめ、胸元の嵌めこまれたクリスタルが蒼く光を放つ。

フワリ……

長い尻尾が左右に揺れて、今にも動き出しそうに鼻から呼吸しているのが見える。

「……隊長。これの名前は？」

「秘密」

「お茶目になりましたな。余裕ができましたか？」

「……少しな」

「女が背中にはいると死ぬわけにはいきませんな」

「それ、ミアには言うなよ。今でもアイツ何か怒っているんだ」

「怖い怖い ハードラドへの搭乗人数が把握できました」

顔の腫れを手でさすりながら、振り返る銀の狼に、大柄な獣人は少し寂しげに顔をしかめた。

「見たところ、二百人ほどですな。年老いた者達はこの世界に未練があるのでしよう」

「……だろうな」

「どうします？」

「以前、ベータチームがインド半島に獣人の集落があるとの報告をしてくれた。そつちに移送する。」

「それから東京中心街にこの船で突撃する」

「それなりの回数、ショミレーションをこなしてきたが……できるものかね」

「いけるさ」

弱気を振り払う力強い声。

長い尻尾を靡かせ、銀の狼は目の前の黒い狼頭の巨人に手を伸ばし、グツと固く握った拳を突き出した。

「……必ず、道を拓いてやる。皆が躡かないように、夜明けへの道を繋ごう」

「…………隊長が言つと、重みが違いますな」

「俺以外を守備隊に全て回す。……戦うのはもう俺一人でいい」

「その辺りも、重みが違いますな」

「皆の命、預ける、ジークマイヤー・ヴィトゲンシュタイン艦長」「了解です隊長」

スッと軽く敬礼を行つと、ジークはそつと踵を返してその場を後にする。

コウはそんな彼の大きな背中を見上げ、表情も硬くすると、田の前に佇む黒き巨人へと足を進めた。

「……皆、これにはもう乗つていいか?」

「あ、はいっ。シートの調整が必要でしたらお願ひします」「わかつた」

長い尻尾を引きトンツと飛び上がる銀の狼。

飛び上がるままに身体は脚部スカート部分に止まり、コウはそのまま腹部のハツチに手を添えた。

お帰りなさい、隊長……。

ヒクリ……

尖った耳に聞こえてくる静かな声。

やがてハツチが開き、コックピットシートを覗かせる巨人に、コウはハツとなり、申し訳なさそうに笑みを浮かべた。

「遅れた……すまない」

そう咳きながら、身体を中に潜り込ませては、開けた空間が目の前に広がつた。

後方以外ほぼ全面はモニターで、田の前には大型のシート、サイドにはレバーが一つずつあった。

そしてそんな大型のシートが一つ、上下に階段状に繋がつている

「ぼくも乗るから……」

「ミア!?」

振り返れば、そこにはハツチ前に覗きこむ華奢な少女がいた。

凹凸を覗かせた体はピッチャリとしたパイロットに包まれ、メガネは無く長い栗色の髪を後ろにまとめながら、少女はコウの身体をコクピットに押し込む。

「せりあ入つて……コウは下だから」

「じ、じつして……」

「最終調整。……初戦で最終戦なんて無茶するんだから」

「……」

「本当はシブヤ戦か、三ツハマ戦に出したかったけど、アトモス社が納期をずらしてきたの……。

多分……出てくると思つ」

「……同系機か？」

「素材は一切向こうに渡してないよ。図面だけ盗まれたから、模造品……だけど」

表情は俯いたまま固く、頬を少し赤らめながらコトはたどたどしい咳きで上部のシートに身体を収める。

そこはサイドレバーなど操縦機能はなく、代わりに手すりに蒼い球体が一つ迫り出していた。

「それに……天輪の魔術を使つんだつたら、ぼくもいた方がいい。ぼくも一応使えるし、魔力增幅の為のソウルオープの調整はぼくがいないと」

「……」

「死ぬ気、ないんだよね……」

そう言いながら蒼い球体に吸い込まれる小さな指先。

俯きながらそう咳くミアに、コウはハツとなるまことに視線を反らすと、下部のコックピットに腰を収めた。

そしてサイドレバーの感触を確かめながら、『まづそいつぶやく。

「……わからない

「許さないから」

「……え？」

「……ただけ言つて死んで逃げるとか、許さないからね……」

「……」

「好きだよ、ぼくも……コウが好き……」

震えた声で、ミアは囁く。

グッとレバーを握る手に汗が滲む

「……なら」

「……子供は三人……お父様にも紹介しないといけないし……お城の皆に言わないと、大切な人が出来たって」

「……お、お城？」

「ダメだからね、逃げたら、追いかけるからね……ぼくずっと一緒にいるから」

キュッと丸まる尻尾。

狼は尖った耳困惑氣味に垂らしながら、後ろを振り返つてはミアを見上げようとする。

「み、ミアっ。どういう」

宙を漂う長い栗色の髪。

華奢な身体を起こし、浮き上がるほつそりとした腰。

前のめりに細い腕を太い首に絡ませるままに、少女は僅かに開いた唇で戸惑う狼の口元を唇で塞いだ。

僅かに牙を舐め取る小さな舌。

熱っぽい吐息が絡み、ツウと唾が糸を引いて小さな唇を伝づままで、ミアは体を離し口元を指で舐め取る。

そして紅い目を見開き惚ける銀の狼を見下ろし、恨めしげにジトリと眼を細めては頬を膨らませる。

「……ユウのせいだよ……ぼく……一人で帰るつもりだったのに……

君が欲しくなった」

「あ……あう……」

「キス……初めて？」

「いや……その……」

「ふふっ……おあいこだね」

少女は照れくさそうに笑い、ペタンと尖った耳を垂らし慌てて俯く銀の狼に嬉しそうに目を細めた。

そして濡れた唇に熱っぽいため息を零し、静かに囁く

「……一緒に帰ろう。……一緒に、向こう側に行こう」

「 ミア。……俺は……お前が好きだ……ただ、それしか……

言葉が浮かばないんだ」

「うんっ……」

「……だから……行こう……一緒に

少女は嬉しそうに頷いた。

銀の狼は戸惑いがちに笑みを浮かべ、照れくさそうに頬を染め微笑む少女を見上げていた。

だから嘘をついた。

もしかしたら、俺は死ぬかもしれないと感じていた。

ヨコハマについた時も、ハツキリと感じていた。

背筋がゾワゾワとなつて体毛が逆立ち、尻尾がぐるぐるになつて、身体が自然と恐怖した。

あの場所に、まだ怨念が残つていた。

そして、俺が向かう先、東京では、その怨念が更に大きく膨らもうとしていた。

タクト……来るんだな。

決着をつけよう。

お前に対してじゃない。

あの夕暮れの日に、別れと終わりを告げよう その為に、俺はお前に對して最大限の力を振るおう。

その為に、俺の命を差し出してもいい。

あの日、世界が終わりを告げた日に決別を告げるため、いつまでも続くあの黄昏に別れを告げるために。

戦おう。

暗き草原に夜明けを導き、昇る太陽をその手に掴む

「……行こう、ガングレド」

約一日掛かつた。

山を徒步で越えて服はボロボロになり、靴もいつの間にか、とうより最初から無くしていて、今は長い爪と長い体毛が生えていた。僕は、街にやってきた。

あの紅い球体のある大きなビル街にやってきた。

「……」

そこには異様な光景が広がっていた。

パン、パン、パン。

いろんなところで破裂音が聞こえてくる。耳は本当に最近よくなつた、鼻もよく利いて、漂う血の匂いでもげそうだった。音の方向を確かみてみれば、そこには風船のように紅く血走つて膨らむ肉瘤があつた。

その大きな肉瘤を背負つて歩く、人の姿があつた。

やがて大きな肉瘤は背負う人を飲み込んで破裂して、中から紅い糸を引いて触手が伸びていく。

紅い茨のような触手は周囲のビルに絡み、電柱に絡み、地面をはい、大蛇のように大通りを走つていった。

なんとなく、わかつた。

頭上を覆い、街を飲み込んでいくこの紅い肉の茨は、人のなれの果て何だと。

後に名前をつけられる『異人』の果てなのだと

「……美沙……」

僕は、好きな人の名前を呟いた。

眩きながら、紅い肉筋に絡まれ、暗闇に沈みつつある夕闇の街を歩いていく。

グチャリ……

足元に広がる肉の触手を踏みながら、爪が肉片を飛び散らせる。頬を掠めでは落ちる夕焼けが遮られる。

不意に見上げれば、また夕日が眼に入った。

今日も、真っ赤な夕日だった。

「…………美沙」

あの夕陽を見るたびに、美沙の姿が思い返される。僕の名前と同じ時に死んでしまった彼女の事が

「…………」

涙が自然と零れた。

悲しくはなかつたけど、自然と零れて、僕は引き寄せられるように、周りの触手と同じように脚を進めた。

そして紅い肉の触手が集まる、巨大な光の球体の下にそびえる大きなビルへと歩いていく。

紅い光に引き寄せられ、僕は歩いていく

東京都心。

そこは周りの区画のように、暗闇に沈んだ廃墟は存在しなかつた。びつしりと辺りを覆う紅い肉のツタ。

ビルとビルの間を滴る血肉が糸を引いてまるで蛇か蜘蛛の糸の如く走り、街の景色を覆い隠していた。

肉の触手は辺りを巡回する白いエルザにも絡まり、巨大な肉瘤が装甲を破いて巨人の身体にこびり付き、周囲の紅い肉の触手が糸を引いて操り人形のように肉腫に覆われた機械を動かす。

そしてそれら紅い肉の薦は繋がり集まるままに、巨大なドーム状の肉塊へと重なりあい、らせん状に伸びていた。

巨大なビルを添え木にして、紅い光の球体へと伸びていた。

紅い球体が脈打つたびに、世界が『浸食』される。

その脈動は世界崩壊のタイムリミット。

東京都心、都庁ビル。

紅い球体を頭上に浮かべ、無数の紅い肉の薦を纏つままで、巨大な紅い螺旋の塔が暗闇に聳え立っていた。

雲は黒く分厚く、光一つ入らない闇が世界に立ちこめる

闇を引き裂き、降り注ぐ光の雨。

一瞬で晴れる黒く分厚い雲。

刹那、音を立て無数のビーム包が放射状に、まるで地平線へと落ちる流星群の如く、東京の街へと降り注いだ。

着弾と共に大きな爆発が各方面で起き、闇に輝く光は瓦礫の噴出と共に周囲の触手を吹き飛ばしていく。

「オオオオオオッ」

空気を押しつぶすように重たく風を切る、滑らかな純白の装甲。噴き上がる背部ロケットブースターノット。

噴き上がる光の粒子はまるで女神の羽衣の如く、開いた装甲の隙間から漂いやらゆらと艦体を守る。

内側から迫り出した滑らかな装甲の内側には屈折鏡面式バレルが収納され、突き出た甲板の下には迫り出す巨大な砲台が大地へと向かわれる。

ドーム状に折り重なった巨大な肉の塊へと、蒼い光が砲身へと収束していく

『高エネルギー充填、主砲発射しますっ』

『違う!』

『え……?』

『ハイパー・メガ・ビーム・バスターだ!』

『……主砲発射しますね』

肉の塊を突き破る光の柱。

ドオオオオンッ

空気が重たく破裂する音を立て、艦体底部主砲から高エネルギーの光の塊が噴き出すと共に巨大な肉の塊に大穴を作る程の光が注ぎ込まれた。

光はその射線を大きくするままで、折り重なった肉の壁を次々と破り、絡まる肉の触手を焼き切っていく。

そしてスウと火線が細くなると共に、光の筋が小さくなる

「……ジーク。艦を水平に維持。以後空中で待機」

『了解。スプレッドメガビームカノン、スタンバイ!』

『……はい。拡散式副砲用意』

『お前らあ！シミュであれだけ練習しただろうがあー！』

『か、艦長のネーミングセンスが悪すぎるんですよー！』

『じゃあ……スプレッドビームフラッシュ用意！』

『うわあ』

滑らかな装甲の内側、丸みを帯びた境面体から噴き上がる蒼い光。刹那、白い翼を広げるよう、両舷から放射状に光の糸が無数に噴き出しては、再び触手が覆う東京の大地へと降り注いだ。それは羽衣を漂わせ、翼を広げるよう グツと旗艦『アストライア』が水平にその先端を戻していく。

そして水平になつた艦体前方に迫り出した発進デッキへと、鋭い爪が食い込む。

グルルルルウ……。

牙をむき出しにした口元から零れる深いうめき声。

長い尻尾を風に靡かせ、装甲に覆われた尖った耳をヒクリと動かし、鼻先から蒼い光の粒子が鼻息の様に噴き上がる。

全身の装甲の隙間から噴き上がる、蒼い光の粒子。

夜闇にぎらつく紅い瞳。

そして光を放つ胸元のカバーの中にはめ込まれた巨大なクリスタル。

蒼と赤の残光を引き、夜の闇に黒き狼頭の巨人が、発進デッキの

先端へと足を踏み出し、大地を見下ろす。

火の手が上がり、煌々と燃える触手に覆われた廃墟の街を睨み、
グッと拳を固める。

同じようにレバーを強く握る

「コウ。あの紅い球体、ゲートを発生させているポイントがあると
思う。まずはそこを破壊しよう」

「それから、この機体でゲートの発生を維持、アストライアを通して、
閉じる」

「これが最後だね……」

「……行けるな、ニア」

「うんっ。コウが傍にいるもの、ぼくは何も怖くない」

「いい子だ……」

「だつて好きな人をずっと見ることができるものっ」

「だからお前後ろに行つたな」

「えへへっ」

「つたぐ　　守備隊はフライテシステムを装備して待機、アスト
ライアを頼んだぞ！」

『了解！』

「ジーク、行つてくれるー！」

『御武運を！』

「……行こうガングレード……『ガンブレイズ』出るがー！」

トンツと地面を蹴る巨体。

風に尻尾を靡かせ、黒き巨人は体を夜空に投げ出し、吸い込まれ
るように大地へと降りていく。

風の中鋭く細める紅い双眸。

肉汁を滴らせの無数の触手が足元から迫り出し、眼下には何機も

の異人化したゾンビのようにエルザが集まつてくる。

夜風を切り両腕から迫り出す大型の内蔵ブレード。

夜闇を引き裂き尾を引く紅い瞳の残光。

口腔を開きむき出す鋭い牙。

グッと身体をよじるままに、風を切り昇つてくる触手めがけて、

『ガンブレイズ』はブレードを振り下ろす。

宵闇」と、虚空を切り裂く

立ち上る土煙が真っ二つに割れる。

空へと伸びた触手は夜風が通るままに一瞬で血煙に変わり、地面から立ち上る衝撃波の中、異人化したエルザの四肢が千切れ周囲のビルにめり込んだ。

そして衝撃波は真っ二つに割れながら、肉の茨を引きちぎり、吹き飛ばしていく

「着地完了……システムいい感じ」

ヒュンッ

風を切り土煙を晴らすままに虚空を振り薙ぐ鋭い刃。

グッと腰を深く落としていた巨体を起こし、肉の茨に覆われた街へと着地するままに黒い狼頭の巨人『ガンブレイズ』は頭を上げた。スッと腕の装甲に収まる両腕のブレード。

スウと細める紅い双眸。

身体から噴き上がる蒼い光を纏い、グッと腰の後ろに手を当てる
ままに鋭い爪で地面を蹴る。

「……後ろか」

鼻先をかすめる敵の気配。

グシャリッ

ビルのコンクリートを突き破り、まるで津波の如く無数の肉の触手が壁のように背後から飛び出してくる。

腰の装甲が開き、ホルスターに収められたナイフの柄が顔を出す。抜き取つた刃に蒼い光が走り、紅い残光を引いて、巨人は後ろを振り返る

「祖に力を与えよ、アクスファラ……」「アトラシア！」

まるで大地を抉る隕石の如き痕。

投げつけたナイフは蒼い光を放つと共に、周囲の触手を一瞬で霧に変え周囲のビルを瓦礫と変えて巻き込んだ。

そしてナイフの後を追いかけ分厚い衝撃波が渦を描いて街の景色を割り貫いていく。

土煙と衝撃波を噴き上げながら、ナイフが街を放射状に更地に変えていく

「ぱつちりっ」

「行こう、ニア」

「うんっ」

背中を向け、翻す長い尻尾。

腕を下ろしながら迫り出したブレードが音無く地面を滑らかに抉り、走り出した黒い巨人が夜風を切り、ビルの間を走る。

目の前からは壁を作るように浴びせかけられる弾丸の雨。ソレと共に無数の触手が四方から飛んでくる

「闇にまぎれる、時すら斬る力を与えよ」

「グラマテス」

闇に溶けていく巨体。

「ゼノアトラ……！」

風を撫でる鋭い金属音。

音も無く、姿なく、ただ夜を駆ける『影』

刹那、周囲の建物に網目状の斬痕が無数に浮かび上がり、飛び出した触手は『影』がすり抜ける一瞬で血煙に変わる。

音無き『闇』が走る。

降り注ぐ弾幕は『闇』の中に吸い込まれ塵に変わり、断続的に迸るマズルフラッシュに刹那、よぎる『影』が映る。

紅い残光を引き、刃を振るう黒き狼が見える

ザザザアッ

土煙を上げ腰を深く落としながら滑るように動きを止める巨體。

長い尻尾が夜風に漂い、立ち上がるままに両腕のブレードを收めると、地面を深く蹴りあげ黒き狼は歩き出す。

無尽となつて塵と風に消える無数の肉片と瓦礫を背こ

「コウ。敵が徐々に集まっているね」

「いい傾向だ」

「うん、アストライアには一切来ていない。全部こっちで受け止めよう」

「稼働時間は?」

「ユウが生きている間だけ」

バシンツ

振り上げた長い尻尾が虚空を叩くままに、うつすらと衝撃波が街全体へと走り、鋭い風がビルに絡みつく肉の触手を剥がしていく。そして近寄つてくる敵に僅かにぶつかり、波がこちらに返ってくる。

空気を震わせる波の音を、そそりたつ獸耳が正確に捉える

「アクティブソナー感知　　近いね。聞こえるだけで十何機もいる」

「パルスボム起動させるぞ」

ガンブレイズはグッと地面に爪を食い込ませては、脚部の装甲を開き数本のステークが地面に突き刺さった。

足元を突き上げる地響き。

刹那、杭の突き刺さったアスファルトが大きく割れ、足もとに大きな空洞ができると共に黒い狼の身体が飲み込まれた。

大きな瓦礫が頭上から降り注ぎ、粘りつくような暗闇を見下ろせばそこには巨大な口。

タコのような肉厚の触手が周囲の壁を叩き、巨大化したクジラの如き化け物が、落下するガンブレイズを飲み込んでいく。

バクリツと口を勢い良く閉じ、ガンブレイズが大口に呑まれて消える

「光を導き、夜を終わらせよ。宵闇を飲み干す終末の蛇よ
破裂する肉の塊。」

「エリクシュ……」

「アルト・ラナフェル！」

盛り上がりしていく地面。

地鳴りと共に地面が内側から破れるままに、アスファルトの塊が廃ビルと共に宙を舞い、血の深みから空気の振動が光の粒子を纏い迫り出した

ドーム状に光の膜が広がっては外側にいるありとあらゆるものを押し出し、取り込んだ瓦礫、肉片が光の中に溶けて輪郭を失う。

東京の地下に広がる地道は一瞬で壁と天井を破られ剥き出しになり、瓦礫を塵に変えながら押し寄せる光の波に押し潰されていく。土氣色の大地が剥き出し�になり、巨大な半透明の球体が光を放ち闇を煌々と照らす。

その中に、宙に漂う黒い狼の姿が映る。

パチンと破裂する光の幕。

深々と抉れたクレーターに降り立つままに、長い尻尾を翻し黒い狼は両腕に刃を光らせ地面を蹴りあげ飛び上がる。

そして振り下ろす刃がにじり寄つてくるエルザや触手を捉える「ミア。前にお前が言つたことだが」

闇を走る無尽の剣閃。

周囲のエルザ、触手の表面にいくつもの斬痕が浮かぶままに、バラバラになつていい敵の気配を横目にコウは後ろを振り返つた。そこには目を閉じて手すりの青い球体に手を浸す少女がいて、整つた息のまま静かに銀の狼に告げる。

「うん……もうすぐ来る。後五分」

「もう少し前に行こう……」

崩れ落ちる残骸を横目に鋭いブレードで周囲のビルの壁をなぞりながら機体を起こせば、紅い瞳に映るのは巨大なドーム状の肉の塊。それに相當に近くなってきた、空に漂う紅い球体。そしてその紅い球体に手を伸ばし肉の触手が絡む、巨大な紅い塔

グルルルルウ……！

冷たく尾を引いて闇を走る紅い残光。

身体を屈め地面を蹴りあげるままに、アスファルトに蒼い足跡を

残しながら、周囲の肉塊を引き裂きながらガンブレイズは走る。

掠める触手が装甲を掠め、身体をよじるままにブレードを振り薙げば、衝撃波と共に肉片が塵芥に変わる

前方をバリケードに囲う異人化したエルザの群れをすり抜けては、無尽に斬痕が浮かび数秒後には残骸が地面に広がる。

周囲のビルと肉塊に絡まつた紅い景色が次々とモーターに流れていき、徐々に紅い塔が近づいていく。

そして紅い球体が、狼の目に映る。

かつてあの場所へと赴いた銀の狼の目が険しくなる

『ユウウウウウウウウー!』

側面のビルを突き破り迸る紅い閃光。

視線を動かす間に、掲げた左手で迸るビームを受け止めると、走っていた足先で地面を擦り土煙を上げながら黒い狼頭の巨人は立ち止まった。

シュウウウウウウ……

僅かに白煙を上げて溶けていく黒い装甲。

だがその内側から更に新しい装甲が自動で生成されていき ガンブレイズは融解したビルの先に目を細めた。

そこには頭上を覆う肉の茨の向こう、同じ大きさの影が三つ聳えていた。

ごつごつとした赤と白の装甲。

一つのアイサイトは狼を見つめ、両腕に持っているのは巨大なライフルが一丁ずつ。

肩に大型ビーム収束器と誘導型ミサイルランチャー。背部には恐らく呼び充電タンクを増設してそこにはガンブレイズと同系機が立っていた。

『ユウウウウウー! 行かせない、お前だけ絶対に行かせないいいい

!』

鼻につく激しい憎悪と深い怒り。

そして、懐かしい匂いと、見知らぬ匂いが混じり合つて鼻先をつ

き、銀の狼は訝しげに田の前の二機に眉をひそめた。

「……タクトっ」

『貴様だけは……ここから出さない。』

「……」

『俺と一緒に……ここで死ねえええ！』

「ミア！」

グッと操作レバーを握りしめる。

ソレと共に唸り声を響かせ、巨人は腰を深く落とし、ライフルから零れるマズルフラッシュの中へと飛び込んだ。

シユツと周囲の廃ビルを切り裂きながら迫り出す両腕の内蔵ブレード。

裂けた瓦礫が宙を舞う中、振り薙いだブレードが僅かに白い装甲を抉つては、火花を散らしながら一機を後ずさらせた。

「……固いな」

「……コウ……」

「……。わかつてゐる」

ドドドドッ

仰け反りながら放たれる強化ライフル弾が身体をよじる狼の装甲を掠め弾いては周囲のビルに跳弾する。

狼は弾丸をよけ機体を更に深く潜り込ませ、足を掬つようにブレードを横に薙ぐ

「手加減しているつもりは、ないんだがな……」

「嘘つき……」

「すまない……」

火花を散らし断面に浮かぶ斬痕。

グラリと一機の両脚部が取れると共に白い機体が大きく倒れ込むのを見て、狼はその胸部を蹴りあげると共に腰に手をまわした。

そして一本の小型ナイフが手に吸いつき、宙を舞う敵機の胴体を紅い目が捉える

ドスンッ

重たい衝撃音と共に胸部に刺さる一本のナイフ。

音も無く、闇を駆け、にじり寄る紅い瞳の残光。

一本のナイフを握りしめスウと×字に胴体を切り裂くまに、敵機が目の前で爆発し、狼は空中に漂いながら眼下を見下ろす。ライフルとミサイルを撃ち込む一機の姿を捉え、スウと紅い目を細める

ドオオンツ

重たい衝撃波と共に両肩の関節を剝り貫く一本のナイフ。ザクリと投げつけたナイフが崩れ落ちる敵機の両腕と共に地面に突き刺さっては、敵はヨロヨロと頭上を見上げる。

蒼い光の尾を引き、大型ブレードを振り下ろす黒い狼を田の前にモニターに捉えて後ずさる。

機体に浮かぶ一本の刃痕。

トンツと地面に音無く吸いつく脚部。

深く落としていた腰を上げ、背を向け立ち上がるままに内蔵ブレードを収納すれば、ガラガラと音を立て崩れ落ちる同系機があった。残骸が積み上がる衝撃に地面から噴き上がる土煙に舞い上がる長い尻尾。

スウと紅い目を細めるままに、後ずさる残り一機を見据え、ガンブレイズは地面を蹴りあげる。

ドドドツ

マズルフラッシュに迸る閃光。

廃ビルにうつすらと拳を振り上げ殴りかかる黒い狼男の姿が映り、ソレと共に瓦礫と土煙を上げ白い同系機が吹き飛ぶ。

『がああああああ！ ユウハハハハハ…』

「……」

『なんで……なんでだよおおおおお！』

地面上に横たわりながら、両腕に構えた二丁のライフルが火を噴ぐ。バシンツ

長い尻尾が虚空を叩くと共に鋭い衝撃波が波紋となつて円形に空

間を走り、薄い空気の膜が弾丸の雨を弾き落とす。

グルルルルウ！

怒りに牙をむき出しにしながら、紅い目をぎらつかせ、黒い狼男は立ち上がろうとする敵機に蒼い息をふき掛ける。

「……お前は、ガングレドを殺した」

『お前が悪いんだろお！お前が勝手にあつちに行くから、俺はいつもらを皆殺しにしないといけなくなつたんだあ！お前があいつらの味方になるからあ！』

飛んでくるミサイルが掲げた左手に吸い込まれては、一瞬で蒼い光の粒子へと変換されて黒い装甲に吸い込まれる。

ノシリ……ノシリ……

紅い残光を引き、にじり寄る黒い狼から、白い同系機は弾幕を張りながら後ずさる。

「……美沙を殺した」

『お前が……お前らがあ！俺を見捨てるからあ！俺は一人になるんだよ、今でも……もう一人なんだよおおおお…』

「お前がしたことだ……！」

『もう連邦に人なんてほんどのこつちやいない。残つてる連中だつて殆ど異人化した連中だ！なのにお前だけは……お前だけは俺を置いていく、獣人になつてもう異人にならなくてすんで、なのに俺は……俺はああああああああ…』

「罪を償えとは言わない」

『コウうううううううう！俺を置いていくなああああああああ…』

「……ただ、そのまま消えてくれ……」

振り下ろした拳はそのまま相手の胸元を抉り、よろける白い機体。

ヒュンッ

虚空を掠める鋭い刃。

腰から引き抜いたナイフが一本、敵機の腕を切り裂くままに、背後のビルを抉り、そのまま肉の茨が広がる街の景色を割り貫いて進む。

空へとたどり着かんばかりに土煙が龍の如く背後から立ち上る中、両腕を失い、火花を散らし白い同系機が立ちつくす。

その紅いモニターに、何も映らない暗闇に沈んだ街が映る。

爪を伸ばし、闇の中に浮かび上がる手の平。

グシャツ

爪が頭部の装甲に食い込むままに、持ち上がってしていく白い胴体。背後に立つままに黒き狼は両腕に白い機体の頭部を片手に握りしめると、夜天に高々と掲げた。

バチバチと火花を散らす首の関節。

ググツと金属の凹む音を立てて小さくなつていぐ頭部に目を細め、黒い狼は蒼い吐息を口の端に零す。

スウと目を細める

「ミア……！」

「うんっ、ソウルオープ、フルドライブ」「ジーク！本気をやる！少し退避しろ！」

閃光を放つ胸元の輝き。

ソレと共に黒い装甲が銀色にその色を変え輝きを放ち、ソレと共に周囲の闇が蒼い光に包まれ始めた。

光は地面から浮き上がる小さな瓦礫と共に足元から噴き上がり、夜闇を引き裂く一條の光となつて一機の機体を包み込み暗い夜空へと昇つていく。

ミアは目を閉じるままにスウと息を吸い込む。

祈るように囁く

「タルカセオ……ファラクス、キエラ……光を集め、空に掲げよ。強き剣を天より下ろし、裁きを下せ」

蒼き光の柱は天へと昇るままに、夜天に巨大な光の輪を描き、東京全体へと広がつていく。

闇を払い、光を粉雪のように振り散らし、そして『力』が昇る光の柱へと収束する。

グツと操作レバーを握りしめ、銀の狼は囁く

「その身を天より晒せ、決別を告げよ、その名を現せ」

轟きを上げる夜天。

刹那、立ちつくす銀の狼のすぐ傍、天の輪の広がりより、一本の光の柱が空より降り立ち大地に突き刺さると共に、地面に衝撃が走った

柱の閃光へと呑まれたものは、その光の中に輪郭一つ残さず融け、光の柱は次々と天の輪より打ち立てられ、肉の茨が広がる街が光の中に浄化していく。

見せよー！」

回転を始める夜天の光の輪

周囲が光の柱に包まれてしまふ。ソレと共に激しい閃光が夜空全体を覆い尽くしていく。

光が降り立つ

一怒りを現世、アホクリアバズ！」

重たく力地を走る衝撃

東京全体を覆う程に巨大な光の柱が空より降り立ちては、夜を飲み入み、街の景色を覆い尽くし、大地こ光の剣を突き刺した。

呑みこまれた全てのものは消失し、大地を這う肉の茨、地面に転がる異人の群れ、配備されたエルザ、崩れた廃ビル、夜の闇、全てが蒼い閃光の中へと吸い込まれていく。

狼男が立ちつくす。

目の前で溶けていく白い同系機を掴み、紅い瞳を細める

『...』...『...』...『...』...『...』...『...』

降り注ぐ光の中に消えていく

- 1 -

収束していく光。

空に浮かんでいた天の輪が小さくなり、やがて消失すると共に降り注いでいた巨大な閃光の柱はなくなり再び闇が広がる。

黒く滲んでいく滑らかな装甲。

ガシャン……

眼前で崩れかけた白い同系機を横目に長い尻尾を翻し、遙か遠くに投げとばすと、黒き狼頭の巨人は周囲を見渡した。

そこはもう、何もない更地。

突起物一つないまっさらな大地が海の向こうまで広がり、地平線を土煙が風に乗って宵闇を横切っていた。

フワリと長い尻尾が風に舞う

「……行こう」

紅い残光を引き、険しく細める双眸。

振り返れば、そこにはまっさらな大地が背後に広がる中、巨大なドーム状に折り重なった肉の塊があつた。

都庁に絡んでいた紅い触手は消失したものの、巨大な廃ビルとの壁を這つて今も漫食を続ける肉の触手が見えた。

そしてその向こう、闇を赤々と照らし、漂う巨大な球体が頭上に浮かぶ。

そこが最後の場所だと伝えるように

「ユウ……」

「……まだ生きている」

「俺は……弱いな」

零れる苦笑い。

レバーを引き絞るままに、巨人は爪で更地を抉り、土煙を上げ巨 大な肉のドームへと走り出す。

周囲には既に敵の気配はなく、頭上には白く羽衣を漂わせる白き船。

眼前に、肉のドームが近づいてきて、その周りは先ほどの光でれ ぐれたのか、大きな溝が見えてくる。

大地を蹴り飛び出すまさに、両腕に鋭いブレードが迫り出して宵闇の風を切る。

土煙が尾を引き、大きく抉れた溝を飛び越える

闇に走る閃光。

肉のドームを一周して走る斬痕。

トンツ

片膝をつき着地する巨躯。

風に尻尾を靡かせ、黒き巨人は立ち上がるままに両腕から迫り出していたブレードを腕の中に収める。

ゆつくりと顔を上げる

「...//ア」

飛び散る無数の肉片。

肉のドームに無刃に斬った痕が浮かんでは、刹那、触手は血煙になつて内側から押し出されたようにはじけ飛んだ。

「何？」

「先に謝つておく、すまない……」

「え……？」

そして、夜風の中に紅く滲んだ塵は溶けて消えていく

「……ガングレド。頼む

シコツと開く田の前のハツチ。

そしてゆつくりと腰元のハツチ部分へと黒き狼頭の巨人は手の平を差し出すと、飛び出す銀の狼を受け止めた。

そしてその大きな手を足がかりにユウは巨大な都庁のビル前へと足を下ろす。

「ゆ、ユウうう…」

「……」

「だ、ダメだよ、ダメええええ！」

飛び出そうとする//アの姿を、大きな手のひらがハツチごと塞いで隠す。

それでも//アは真っ赤な顔をしてその指の間から顔を出し、都庁へと歩き出すユウに叫ぶ。

「ユウ！なんでお…」

「これは、俺のわがままだ。……自分に決着をつけたい」「私も一緒に！一緒にいてくれって言つたじゃない！」

「……必ず帰る！」

「嘘ばっかり、帰つて来てよーなんでそりやつて最後まで我がままなのさあ！」

ハラハラと零れる大粒の涙。

クシャクシャにした顔を真っ赤にして、巨人の指の間から暴れるニアに、銀の狼は申し訳なさそうに背中を丸め脚を止めた。
それでも背中は向けたまま、紅い瞳は薄暗い都庁の入り口ロビーを見つめたまま離れない。

グッと狼は拳を固める

「……かつて……俺はここに来た。だけど、結局何もできなかつた。
彼女を助ける」とも皆を救う事も出来なかつた。

自分で……最後までやり遂げたいんだ」

「だから僕も手伝うのに……なんでさー」

「すまない……」

「バカあーぼくがいるのに……！」

「ガングレド、ニアを頼んだ！そいつは俺の子供を産んでくれる女だからな！」

「バカああああー！バカああああー！」

「いかないと……友が待つている。彼女が、待つているから……」

「バカユウうううううう！」

尖った耳に響く甲高い叫び声。

俯きながら泣き叫ぶ彼女の姿が思い浮かべて、思わず零れる笑み。ユウは怖々と首をすくめるまに、小さなため息を夜空に零すと、地面を蹴りあげ走り出した。

腰には二丁の自動拳銃。

背中には見送るガンブレイズと、泣き叫ぶニアの声。

そして、目の前には紅い光をたたえる巨大なビル。

そしてビルの隅には、焦げ付いてくすんだ色になつた巨大な鉄く

ずの塊があった。

手足はなく、胸部のハッチは開いたまま、何かが這い出したような血の痕が地面に滲んだまま都庁の入り口まで続いていた。そしてその入り口からは、鼻がもげるほどに激しい憎悪が滲みでていた。

彼が待つている

終わらせよう。

表情を強張らせ、喉を鳴らし、風に銀の体毛を靡かせながら、ユウは崩れかけた入り口を潜り、都庁へと足を踏み入れた。あの時のように、再び

「…………」

大きなビルを覆う肉壁を破り、中に入れば、廃墟が広がっていた。
崩れた柱。

剥がれた床のタイル。

天井から零れてくる、電灯の破片。

明りはなく、窓から洩れる外の夕焼けに、長い影が僕の足元から、
薄暗いビルの中へと伸びていた。

真っ赤な夕焼けがとてもまぶしく、立ちつくす僕の背中を照らし
た。

とても紅い夕日だった。

それだけだった。

誰もいなかつた。何もなかつた。

受付には誰もおらず、警備員の姿はなく、ただ外と同じように瓦
礫の中の静寂が広がっているだけだった。

カツリ…………カツリ…………

静かに僕の足音だけがロビーに響いていた。

おそらく皆『触手』になつたのだろう。

残っているのは、ただただ破れたスーツ、作業着が何着も床に広
がるだけだった。

何も残つていなかつた。

僕はエレベーターへと足を運ぶ。

多分動いていないだろうけど ボタンを押せば、やはり電気
は止まっていて、目の前の分厚い扉は開かなかつた。

「…………」

気がつけば、僕の拳はエレベーターの扉を突き破り、吹き飛ばしていった。

ガシャン

一つに裂けた扉が奥の壁に突き刺さり、ワイヤーが切れているのか、何の障害物も無い綺麗な吹き抜けが上下に広がっていた。

僕は下を見下ろす。

そこは暗闇が広がっていた。

上を見上げれば、うつすらと紅い光が吹き抜けを通じてここまで伸びていて、だけど僕はまた下を見下ろした。

力を感じる。

嫌な気配じやない、なんとなく引き寄せられるような、心の寂しさが埋められていいくような気持ち。

トンと地面を蹴る脚。

自然と僕の身体は吹き抜けを飛び降り、重力に引き寄せられ下へと落ちて行った。

そして、どれくらい落ちただろう。

長い間、風の音を耳に聞きながら、やがて遠くに地面が見える。

トンと痛みはなく、自然と僕の足に地面が吸いつき、僕は恐らく最下層に降り立った。

「……」

目の前には、大きな扉。

開けば

「あ……」

夕焼けが広がっていた。

左右に広がる長い廊下。

右には、グラウンドが広がり、学校の生徒が野球の部活動をしているのが見えた。

聞こえてくる掛け声。明日会つ事を約束して校門で別れを告げる声。

学校の生徒が、ゆっくりと校舎の向こうへ、紅い夕焼けの中へと溶けて消えていく姿が見えた。

左の窓には教室が並んでいて、同じように窓から茜色の日差しが零れて、いくつも並んだ机が緋色に染まっていた。

そして、人影があった。

僕だった。

なんだか照れくさそうにしていて、傍には僕を見上げ可笑しそうに笑う彼女がいて、そんな僕をからかう拓斗がいた。三人とも楽しそうだった。

いつも一緒にいた。

一緒に、同じ夕焼けを見ていた

「……」

隣の教室へと足を運べば、そこには一人がいた。

僕と彼女が立っていた。

一緒に手を繋いで、二人で夕焼けを見ていた。

顔が近くて、夕焼けの中一つの影が重なってキスをしているのが見えた。

とても幸せそうだった。

そんな二人を教室の隅から、誰かの影が見ていた。

「……拓斗」

悲鳴が遠くから聞こえる。

耳が思わず震え、僕は引き寄せられるように足を運ぶと、そこには窓の向こう、組み敷かれる人影があった。

やめてお兄ちゃん！なんで、なんでこんなことするのよー！

お前が……お前らがああああ！

びりびりと破られる制服。

長く綺麗な髪がひとつつかまれ、何度も頭を床にぶつけられ、スカートがカツターナイフで破られていく。

肌はナイフに斬られて血が滲み、涙が床を伝つ。

震えている。

怖がつていてる。

泣き叫ぶ
彼女がいた。

助けたかつた。

夕君、夕君助けて、助けてええええええええ！

俺がああ！

何度もトドを開けよ」とした

開かない！

なんで

なんで……なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで。
なんでなんで。

なんで……僕は、僕はここにいるの？

ながて彼女が死んだの、

あああああ！

僕は頭を抱え、その場に蹲つた。

も、何も置きたくなかった

たゞ、三を開じ、世界が終ることを祈り續けた

何も変わつていなかつた。
見渡せばそこはあの日のままだつた。

崩れた柱。

剥がれた床のタイル。

天井から零れてくる、電灯の破片。

さつきまで夜のはずだったのに、背中の窓から夕焼けの光が降り注ぎ、長い影が俺の足元から伸びていく。

そして薄暗いビルの奥へと伸びていくのが見える

「……」

何も変わつていなかつた。

まるで時が止まつたかのようだつた。

薄暗いロビーの奥、受付の机は誰もおらず、警備員の姿はなく、ただ天井から崩れた瓦礫が広がる中、静寂が漂うだけだつた。

俺の足音が静かにロビーに響くだけ。

残つたのは、床に何着も散らばつた破れかけたスーツと作業服だけ。

誰もいなかつた。

ただ、長い影だけが夕焼けを背に伸びていた。

「……あつた」

もしかしたら、という予感は的中していた。

奥に進み、見つけたのは破れたエレベーターの入り口。

あの日と同じように、分厚い一枚の扉は奥の壁に突き刺さり、ワイヤーは千切れ綺麗な吹き抜けが上下に広がつていた。

上を見上げれば、あの紅い球体の光が吹き抜けを通して降り注いでいた。

そして下からは、圧迫感のような、強い力を感じる

「……」

吸い寄せられるように、俺は吹き抜けを飛び降りた。

そして永遠にすら思えるほどに、長く、この暗闇を下りていき、やがて風の音が、眼下に地面がある事を教えてくれる。トンツと地面に吸いつく脚。

地面に膝をついて降り立つままで、俺はあの日見た大きな扉を見

上げた。

「……」

扉は開いたままだつた。

隙間から、夕焼けの光が零れていた。

俺は扉を開け、中へと入つた。

そこはあの日の夕焼けが広がっていた。

学校の下校の景色。野球部の連中、サッカー部の連中が練習をしていて、帰宅部の連中が下校している姿があつた。

そして、左には、夕焼け色に染まつた景色。

一人、誰かの人影が夕焼けを見上げ立つていた。

一人だけだつた。

次の部屋も一人だけだつた。

俺しか、立つていなかつた。

二人は、もう俺の中にはいなかつた

「……よお」

そして、三つ目の教室の前に、『俺』がいた。

毛むくじやらの身体。

尖つた耳。

突き出た口腔

既に獣人化してしまつたその姿は間違いなく

『俺』だつた

ボロボロの制服を着て、破れた服の間から汚れた銀色の体毛を覗かせ、頭を抱え背中を丸め蹲つていた。

力タカタと身体を震わせ、尻尾を丸め、まるで子供のように耳を塞いでいた。

あの日の『俺』がいた

「……なあ、俺も、多くは語れない。まだあの日の事を納得したわけじやないからな」

話さなければならぬことがあつた。

過去の自分に、そして今の自分に

「諦めろとは言わない。だって大切な人が死んだんだ。ずっと好き

だつた人が大切な友達に殺された

「……許さない……許さない……絶対に……」

俺は蹲る『俺』の背中を摩る。

それぐらいしか、できなかつた

「ああ……その気持ちは忘れるな……だけど、その為に自分を過去に縛り付けちゃいけない。

忘れるな……彼女はもう死んだんだ

「違う！ 彼女は……彼女はここに！」

そう言つて身体を起こしこちらを振り返る『俺』がいた。

俺は、もう一人の自分を強く抱き寄せた。

グッと抱き寄せるたびに、心音が強く耳に響いた。

まだ生きていた

「辛いな……辛すぎる……」「してやればよかつた……ああしてやればよかつた。一緒に同じ空を見つめ、同じ物を食べて、同じ景色を見て。

ずっと、一緒に生きていたか？」「

「……僕は……僕は……彼女を助けたい……助けたかった……なのには……」

「なのに……何もしてやれなかつた。俺が無知だつたから……俺が傍にいてやれなかつたから」

「拓斗が……拓斗が……！」

「仕方ないんだ……もう、彼女は何をしても生き返らないから……誰を恨んでも憎んでも……彼女は居ない。どこにもいないんだ」

「ああ……あああ……」

「……だけど、俺達はまだ生きている」

「……彼女が死んだのに……どうして……どうして僕だけ……僕だけ生きてるの……なんで……！」

「多分……俺達を必要とする人達が、未来にいるからだ……」

「……僕を……」

「過去を見つめてもいい……今に絶望してもいい……でも、必ず未

来に足を進めるんだ……例え苦しくても悲しくても……お前が吼えた分だけ、未来は必ずおまえに応えてくれる。

生きる 生きてくれ……」「

「……彼女は……僕の全てだった……僕は、彼女が好きだった」「ああ。その気持ちを胸にしまい、生きよう。過去に眠るのではなく、未来を見つめ、今を生きよう。

彼女が残してくれた思いを強く胸に刻み、この絶望した世界と決別を告げよう。

この夕日に、終わりを告げよう。

俺達ならでいい もう一度……」「

「……僕は……」

光に包まれていく『俺』の身体。

やがてソレは蒼い光の粒子に変わり、俺の胸元に吸い込まれていき、俺はスースの胸元をまさぐった。

そこにはかつてアリシアの機体から抽出したソウルオープ、オルフェトやガンブレイズの動力源があった。

それは、万物の魂を標した力の鉱石

「……一緒に行こう」

蒼く光を放つ功績を胸元に收め、そして立ち上がり、俺はこの夕暮れに滲んだ廊下を進んだ。

その奥に、終わりがあると思うから。静寂の中、俺はこの道を歩いていく

都庁地下最奥部。

長い通路を辿り、窓辺に夕焼けの光を残しながら、やがて通路の向こう、遠くに光が差し込んでくる。

胸に小さく吸い込む息。

グッと腰に携えた二丁の拳銃を引き抜き、緊張に喉を鳴らし、銀の狼は静かに光を潜る。

開けた視界に紅い目を細める

「あつた……」

あの日と変わらず、これはここにあつた。

巨大なドーム状の空間。

床に不可思議な文様が円形にフロアの端から端まで余すところなくびっしりと描かれていて、僅かに蒼い光を放っていた。

「……でかいな」

降り注ぐ淡い光の雨。

そこには、地面から離れ遙か頭上、空中に浮かんだまま、ゆづくりと回転する巨大な蒼い鉱石が円形の模様の中心に漂っていた。

巨大なソウルオーブ。

いくつもの魂を封入し、今なお動き続け異界と世界を繋ぐ扉を発生させる、力の源。

十年前、世界を崩壊させた原因。

「……」

これを破壊することで、接続点は消える。

コウは小さく息を吸い込むままに、緊張に顔を強張らせ抜いた二丁の拳銃の銃身を空高く漂う光の鉱石に向かよつとした。

「シリ……」

床に響かせる冷たい爪の足音。

足元から這い上がる激しい邪氣に、逆立つ全身の体毛。

近づいてくる足音に尖った耳を震わせるままに、コウは更に表情を強張らせる。銃を下ろし降り注ぐ光の下、鋭く双眸を細めた。

そして、光の下、姿を現す人影に、銃口を向ける

「タクト……」

「……コウ……」

『人』がいた。

パイロットスーツは焼けただれ、今全身を覆っているのは灰色の体毛だった。

義手だった左腕は千切れなくなり、右腕はダラリと垂れたまま、長い爪を手の中から覗かせていていた。

片目は『異人』化したのか、ナイフで抉った痕があり、長い尻尾がゆらゆらと前のめりに歩く男の姿に合わせて揺れていた。

頭のてっぺん辺りから突き出た耳は片耳がなく、千切れた痕から血が滲んで目に垂れていた。

裂けて突き出した口腔から血が流れ落ち、身体の節々を伝って血溜まりが広がる。

覗かせる牙は折れ、虚ろな片目が、銀色の狼を捉える

「……コウ……俺は……お前に会いたかった」

「俺もさ……」

「……」

「すまないな、生かすような真似をして」

丸めた背中がビクリと震え、項垂れる灰の狼男。

強張った表情はそのままに、ため息交じりにコウは銃口を下ろすと、持っていた拳銃の内、一丁を放り投げた。

床にぶつかり、拳銃は光を放つ床を滑り、やがて歩みを止める獣人の足元にぶつかる。

ダラリと垂れた右腕が、そのまま拳銃を掴む。

ソレと同時に、銀の狼は銃把を握りつぶさんばかりに、右手に拳

銃を握ると、背中を丸めた獣人に銃口を向けた。

ナイフの刃の如く、紅い瞳を鋭く細め、睨む

「……強いな……お前、もう今までとは全然違うんだな」

「美沙に誇れる男になりたかった　　彼女が死んでも、その目標は変わらない……」

「……」

「誰かを守れるようになりたかった。……お前が悉く奪つていったがな」

「……撃てよ……」

「罪を償えとは言わない……お前も、俺に殺されたくてここのに来たわけじやあるまい」

「……。ああ」

「……半端なことはするなよ」

「……来いよ」

「決着を付けよう」

宙を舞う空薬莢。

マズルフラッシュと共に弾丸が頬を掠め、一頭の狼は前のめりに身体を屈めるままに地面を蹴りあげた。

蒼光の鉱石の下、肩をぶつけあうように、衝突する二つの影。

ガガガガッ

つばぜり合いのように二つの拳銃の銃身を擦り合わせるままに、

銀の狼と灰の狼は互いの顔を睨みつける。

互いの獣の如き、険しい表情が瞳に映る。

銃身を擦り合わせ、相手の脳天に突きつけようと地面を踏み込み腕を強く突き出す。

「……お前が美沙を殺した！」

「お前が美沙と付き合おうとしたからだ！」

「何が悪い！」

「全部だ！」

牙をむき出し、吼えるままに擦り合わせていた銃身が弾かれて一

人の手から滑るように離れた。

交差するように回転しながら黒い銃が宙を舞う
身体をよじり僅かに離れるままで、互いの銃をとり身体を屈め突
き出す二つの銃口。

バシュウ

マズルフラッシュと共に小気味いい銃声が噴き上がり、硝煙と共に
弾丸が一発、相手の目尻を掠めていく。

ダンシと地面を蹴る鋭い爪。

先に飛び出したのは銀の狼。

遅れて飛び出す灰の狼の首根っこを掴むままに、地面に叩きつけ
ては押し付けたまま引きずりあげた。

「がああああ！」

「俺は彼女が好きだ！好きだった！なのにお前はあー…」

「俺は……俺はお前が好きだった！」

「戯言を抜かすかあ！」

床を突き上げる重たい衝撃。

頭部を地面に深く叩きつけると共に、小さなクレーターが地面に
浮かび、銀の狼は灰の狼を持ち上げるままに蹴飛ばした。

壁に吹き飛ばされるままに、両足をつく灰の獣。

ジーンと痛む軽く頭を振るままに、キッと灰の狼は威嚇するよう
に咆哮すると壁に突き刺していた足の爪を離した。

そして弧を描き疾風の如く飛び込んで、鋭く踵を銀の狼めがけて
振り下ろす。

「があー！」

左腕で受け止めるままに僅かにめり込む踵。

灰の狼はそのまま蹴り飛ばしては、後ずさり、銀の狼は仰け反り
ながら右腕に握りしめた拳銃を突き出す。

噴き出す硝煙と共に宙を舞う一発の薬莢。

トリガーを引き絞るままに弾丸が左肩とわき腹を掠め、灰の体毛
を紅く濡らす。

そして左腕を突き出しトリガーを引き絞りながら灰の狼が走り出し、床に尻もちをつく銀の狼へと覆いかぶさらんと低く飛び上がる。上体を上げる銀の狼の右肩を銃弾が掠め、細めた紅い瞳に灰の狼が映る

「ユウウ「つづつづ！」」

「彼女を殺したのはお前だあ！お前が何を言おうとお！」

「そうだよ！俺が殺したあ！」

「俺は彼女が好きだつた、俺の心も彼女の心も！」

「があ！」

「踏みにじつたんだ！」

飛びかかる灰の狼腹部を蹴りあげるままに、高々と宙に舞い巨大な光の鉱石へとぶつかる軀体。

ビシリッ

光の鉱石の表面に走るいくつかの鱗。

片腕だけで背中だけで僅かに跳躍し、地面に足をつくと銀の狼は地面を蹴り飛び上がって灰の狼を追いかけた。

灰の狼は蒼光の鉱石を足がかりにドーム状の壁へと飛び出そうとする

「逃がすかあ！」

長い尻尾を掴む毛深い手。

勢いよく投げ飛ばされ放り出されるままに、灰の狼は痛みに顔をしかめ地面に大の字に叩きつけられた。

風を切る重たい拳。

ドオオオンッ

フロア全体が大きく振動し、頭上の鉱石の鱗が広がる中、灰の獣の腹部に深々と拳が突き刺さり、灰の獣は目を向きながらくの字に体を曲げる。

「か……あ

「お前が……お前が……彼女を追い込んだ……死ぬ必要なんて……死ぬ必要なんて……！」

「あ……あいつは……もつ……『異人』化を……」「知っている……一それでも、彼女は生きていた、お前に殺されるまで！」

腹部から抜き取る腕。

身体を起こすまさに、銀の狼は腕を伸ばしガシリと灰の狼の頭を鷲掴みにし起き上がらせようとする。

「答えろタクト、なぜ実の妹を殺したあ！」

そして肘に突き刺さる膝。

起き上がらされた身体をよじるままに、灰の狼は脚を振り上げると、肘を押さえる銀の狼から離れ銃を突きつけた。

「あいつがお前を取ろうとした、お前があいつを取ろうとした！俺を一人にして……俺はどうなるんだよ！」

「大切な人を探せばいいだろ！なんで俺と彼女を引き裂いたあ！」

地面を蹴り横に飛び退く白い影。

膝をつき床を滑りながら弾丸をばらまくままに、銀の獣は再び地面を蹴り、灰の狼へと飛び出した。

同じように灰の狼も地面を蹴り、拳銃を捨て拳を振り上げる銀の狼に合わせる。

『がはつ！』

めり込む拳と拳。

深々と顔に打ち付けられる痛みに顔をしかめながら、銀の狼は灰の狼の拳を押し返そうと顔を動かし、牙をむく。

クワツと紅い瞳を見開くままに、銃を捨て右手に灰の狼の首を掴む

む

「お前のエゴで……美沙は自分を死に追い込んだ……！」

「俺は！お前しかいなかつたんだ！子供の時もずっと一緒にいた、ずっと友達だつたあ！なのに……なんで美沙の所に行くんだよ！」

「美沙が好きだからだあ！」

「コウううううう！」

投げ飛ばす軀体。

灰の狼の身体が大きく弧を描きながら、蒼く光を放つ巨大な鉱石へと放り投げられ、銀の狼もまた飛び上がる。

そして放物線を大きく描き、吹き飛ばされて鉱石に背中を打ち付ける灰の狼の頭上を取り、そして拳を振り下ろす。

「友達だったのに、裏切ったのはお前じやないか！」

「俺は！」

鉱石にめり込んだ身体をよじるままに、紙一重に顔を掠めていく鋭い拳。

銀の狼の拳がそのまま、深々と蒼い光を放つ鉱石へとめり込んでいき、その表面の鱗が更に深く大きくなっていく。

そして銀の狼が拳を引き抜くままに、巨大なクレバスがいくつも浮かぶ。

瓦解の音を立て始める

「お前は、俺の友達だタクト！ずっと友達だ！」

「俺は……俺はああああ！」

音を立てて崩れる蒼光の鉱石。

二人の言葉を遮り、巨大な鉱石の残骸が、広がる鱗から大量の粉塵を噴き上げてフロア全体へと飛び散った。

その衝撃に吹き飛ばされる灰の狼。

地面上にたたきつけられながら、ヨロヨロと立ち上がりれば、そこには冬のような風景が広がっていた。

頭上に輝いていた巨大な光の塊は既になく、宙を漂う無数の残骸。飛び散る大きな鉱石の塊は地面に落ち、小さな、頭ほどの大きさの欠片がいくつも宙に浮いていた。

そして小さな破片は光を散らし落ちる。

蒼い光を灯し、舞い散る姿は雪のように

「！？ ユウ！」

鉱石の表面をよぎる銀の狼。

後ろを振り返れば、そこには光の雪の中へと消えていく銀の狼の姿があり、灰の狼は体を強張らせた。

宙に浮かぶ欠片には、其処らかしこに銀の狼の姿が映り、まるでミラーハウスのように銀の狼の姿を隠していく。

そして見えなくしていく

「……コウ……俺は、お前が好きだ！」

そして光の鉱石の中に、別の姿が映し出される。

地面に転がる大きな鉱石の塊に銀の狼の姿が横切った次の瞬間、そこには小さな小学生がランドセルを持つて映っていた。

灰の狼を見上げ、嬉しそうに微笑んでいた。

僕……僕ねタ・アトラツ、ハーフだから変な名前だけ

よろしくねつ拓斗。

少年の姿はすぐに消え、別の鉱石に別の時間の少年の姿が映る。断続的に、何度も、何度も彼の目に走馬灯のように映る

えへへつ、拓斗はやつぱりすごいね……僕拓斗みたいにスポ

ーツ頑張るからつ

大丈夫だよつ。だつて拓斗がいるから怖くない、拓斗は強いからつ。

その度に彼の目は潤み、耳を閉じながら、頭の中に響いてくる。

友人の笑い声。

微笑み。

胸を驚掴みするような、優しい言葉。

拓斗一緒に学校行こいつ。明田は部活じゃないから一緒に行けるよねつ

うんつ、ずっと友達だよ。

灰の狼は目を開き、天を見上げる

「ユウウウウウウー俺は美沙を殺した、お前が好きだから……お前が俺を頼るから……俺はあああ！」

その見上げた先に、大きな光る鉱石の向こつ、銀髪の少年が優しく微笑む。

拓斗、うんつ。ぼくも拓斗が好きだよつ。

「俺も……お前が

「

頬を伝う涙。

灰の狼は天を見上げながら、静かに微笑み、そして静寂の中に囁く。

「殺してくれ……」

「ああ……」

風を切る獣の足音。

滑り込むように、舞い散る雪の中から姿を現す銀の影。

二丁の拳銃を背中に押し付けると共に、銀の狼は背中を反らし天を仰ぐ灰の狼にスウと目を細めた。

宙を舞う一発の空薬莢。

チヨンバーが後ろに引き絞られ、弾丸が胸を貫くままに、紅い鮮血がアーチを描き、灰の狼は前のめりに仰け反る。

そして、ゆっくりと床に倒れ込み、うつ伏せに灰の狼は片腕を広げる。

「…………すまない…………ユウ…………俺のために…………」

「…………タクト…………」

滲む血溜まりがつま先へと広がり、銀の狼はゆっくりと二丁の拳銃を下ろし、腰にねじりこむ。

そしてうつ伏せに倒れた友に手を伸ばそうとする

「…………行ってくれ…………もう…………十分だ…………」

「…………」

「…………ユウ…………美沙…………」

血溜まりに沈みながら、灰の狼は嬉しそうに目を細め、うつ伏せのまま静かに微笑む。

そしてその呼吸は徐々に小さくなっていく

翻す長い銀の尻尾。

殴られた頬を摩りながら、銀の狼は地面を蹴るまさに、都庁の頂上を目指して再び走り出した。

そして降り注ぐ光の雪の中、灰の狼は静かに目を閉じる。

キラキラと舞う光の中に、いつまでもかつての少年の笑顔が映つ

そしてその呼吸は徐々に小さくなっていく

翻す長い銀の尻尾。

殴られた頬を摩りながら、銀の狼は地面を蹴るまさに、都庁の頂上を目指して再び走り出した。

そして降り注ぐ光の雪の中、灰の狼は静かに目を閉じる。

キラキラと舞う光の中に、いつまでもかつての少年の笑顔が映つ

ていた。

『ジーク、ユウとの連絡は！？』

『通信デバイスを渡していないのか！？』

『持つていってないの！』

夜闇に佇む黒き狼の巨人。

紅い光の球体を頭上に見上げながら、巨大な廃ビルの前、どこまでも広がる更地の荒野の中に立ちつくしていた。

夜風に土煙が渦を巻いて横切り、小さな雲が上空に待機する白い箱舟の滑らかな装甲を撫でていく。

そして天と地の境目、紅い球体がバチバチと閃光を上げながら脈動する。

小さくなつていく

『ミア・ミルドレシア！観測班から報告、接続点が小さくなつているぞ！』

ドクンッ

空気を震わせ激しく脈動を始める巨大な球体。

ソレと共に都庁の巨大なビルの表面に罅が入り、瓦礫が罅の隙間から崩れ落ちて、黒い装甲を叩く。

『……ユウガ、壊した』

俯いていた黒き狼の巨人の目が紅く光を放つ

『……ガンブレイズ……ガングレド？』

グッと首をもたげ、紅い球体を見上げる獸の眼光。

柔らかな光を放つ胸元にはめ込まれた巨大な鉱石。

長い爪を地面に食い込ませ、脚部補助スラスターを展開すると、

ガンブレイズは体を深く落とした。

そして脚部から噴き上がる白炎。

身体を押し上げる力に支えられ、紅いアイサイトを光らせ、ガンブレイズは地面を蹴り上げ紅い光に向かって飛び上がった。

『あっち……？ ガングレド、あっちにコウが！』

空に滲む『色』

凹凸の無い、夜に沈んだ東の地平がつづらと赤みを帯び、土氣色にくすんだ大地が熱を持ち始めた。

風に流れる雲は茜色に頬を染め、空を漂う白き箱舟は靡く羽衣を蒼く輝かせる。

黒き狼の巨人を包んでいた暗闇はゆっくりと晴れていき、空が放射状に紅く染まっていく。

夜が明ける。

夜明けがやつてくる

『ユウ……コウ！』

グアオオオオツ！

牙をむき出すまさに荒野に猛る激しい咆哮。

ビルの壁を昇りながら、ガンブレイズは口をぎりつかせ、グッとその腕を夜明けの空へと伸ばし手の平を広げる。

そして夜明けに照らされる収縮を始める巨大な紅い球体に手を伸ばす。

ビルの屋上が見えてくる

『ユウ！』

「……」

巨大な球体をすぐ上に見上げながら、夜明けの風に靡かせる長い尻尾。

殴られた片目は瞼を腫らし、尖った耳を垂らしながら、昇る太陽の光に銀色の体毛が煌めく。

空を見上げながら、夜明けに白む熱っぽいため息。

ニイと口の端が歪み、牙を覗かせ零れる笑み。

尻尾を翻し振り返るままに、眼前に脚を下ろす黒き巨人を見上げ

ては、銀の狼男、ユウは紅い瞳を細めた。

「遅い……」

『……バカツ！どれだけ待つたか、どうして連絡しないのよ！』

「……すまない』

『バカ……どうして……一人で行くのよ！』

「 ガンブレイズ、フルドライブ』

片膝を立て座っていた巨体が、頷くままにゆっくりと上体を起こし、眼前に漂う巨大な球体へと向き合う。

そして機体を覆う程に激しい光を放つ胸元の蒼光の鉱石。

全身の装甲から蒸氣のように勢いよく噴き上がる蒼い光の粒子。黒い表面が剥がれ、鎧が銀色の輝きを放つと共に、朝日を照り返すまさに銀狼の巨人は全身に光の粒子を纏う。

グルルルルルう……！

光を身にまといながら、鋭く双眸を細める銀の狼の巨人。収縮を始める眼前的紅い球体の中心へと、グッと両腕を突き出すと、ヌチュリと血飛沫を噴き上げ、両手が紅い球体にめり込んだ。

『ゲートリンク開始します！』

「頼む……」

糸を引き、左右に裂けていく表面。

大量の血飛沫を上げ、収縮を始める紅い球体を開くと銀の狼の巨人の前、紅い球体の中心に大きな空洞が出来上がった。

それは人がようやく一人通れるほどに小さな『穴』。

光は一切通らず、引き裂かれた紅い球体の中心にまるでブラックホールのような、小さな空洞が虚空に漂う。

「これが……ゲート』

『 来ます、全数値反転開始！』

「 ……』

『世界が浸食される……！』

銀の狼の巨人の前で脈動を始める『六』

一瞬で巨人を覆つほどに大きく、空を一瞬で飲み込まん程に広が

つていき、漆黒の扉が世界へと広がっていく。

世界が『消えて』いく

「ガングレド！」

グッと広がる黒い空洞の輪郭を掴む銀色の手。

全身から光の粒子を激しく放出しながら、浸食を食い止めるガンブレイズの前で、巨大な穴がビクビクと痙攣する。

それはまるで生き物のように ゆらゆらとアメーバのように 輪郭があやふやに動き、ガンブレイズはグッと巨大な空洞を狭めていく。

そして、巨大な舟一隻が通れるほどに『穴』が狭められる

『ソウルオーブ、フルドライブ！エンジン全開だ！ゲートを二つちで維持しつつ突っ込むぞ！

皆、準備はいいか！』

『はい！』

ゴオオオオオオオッ

背部から噴き上がる激しい炎。

宙に浮かぶ艦体を下方に傾けるままに、蒼い粒子を噴き上げ羽衣を靡かせながら、白き箱舟が動き始める。

巨大な廃ビルの頭上にできた、真っ黒な空洞めがけて、降下していく

『行こう、この先に隊長が信じた未来がある！』

『アストライア、フルノット！全速前進！』

『目標、新たな世界へ！』

『はい！』

『隊長、先に待っています！』

黒い闇へと飲み込まれる白き箱舟。

羽衣を靡かせ、見上げる程に約四百メートル級の巨大な舟が空を横切り、漆黒の空間へと帆を出した。

そして闇の中を突き進むままに背部から火を噴き上げながら、闇の中に輝く光へと艦首が包まれていく。

『向こう側』へと消えていく

「……すまない」

ガラガラと崩れ始める足元。

巨大な接続点の下、壁から瓦礫をいくつも吐き出しながら、亀裂を纏うままに巨大な廃ビルが音を立てて崩れ始める。

ソレと共に立ちつくすコウは僅かにバランスを崩しながら、巨大な『穴』を見上げる。

友が旅立つていた先を見つめ、寂しげに眼を細める

「……」

「ユウ！早く！」

『穴』の浸食を押し込む銀の狼の巨人の腹部装甲が開き、飛び出す華奢な体。

息苦しげに眼を細めながら、そこには『穴』へと吸い込まれる風に栗色の髪を靡かせるミアの姿があった。

幼い表情は焦りに歪み、立ちつくすコウに手を伸ばしながら、甲高い声をからす。

「ユウう！早くしないとビルが！」

「……俺は、この浸食をこちら側から止める」

「何言つてるのよ！」

「俺は、多くの仲間を見殺しにした 皆を最後まで見届ける資格がない」

ガラガラと崩れる音が激しくなっていく。

やがて巨大な『穴』を支える銀の狼野巨人の足元もひび割れていき、コンクリートが沈降を始めていく。

「あう……ユウ！」

片膝を立てて崩れ落ちる銀狼の巨人。

関節から火花が飛び散り、機体の制御があほつかくなり、ミアはハッチから顔を引っ込めると、ユウのシートに座り操作レバーを握りしめる。

ガンブレイズは広がりを続けようとする『穴』を押さえ、浸食を

止めようとする。

コウは息苦しげにそんな様子を見上げる

「ミア……行つてくれ」

『ダメ！ ガングレド、コウと一緒に向こうに行くの…絶対に行くの…』

グオオオオオツ

激しく機体を軋ませながら迸る咆哮。

コウの囁きを拒むように、ガンブレイズはヨロヨロと立ちあがり全身から光の粒子を噴き上げる。

全身を使い、漫食を押さえていく。

『コウ、早く来て！』

『美沙が……タクトが生きた世界だ。ここで死ぬのが……』

『ダメ！ ぼくは……私はコウといたい、ずっと一緒にいたい…』

『ミア……』

その声は、どこかで聞いた事のあるものだった。

『もういや……もう……一人にしないでえ！』

ドクンと跳ねる心臓。

体温が一気に上昇していき、尖った耳が興奮に震える。

吼える銀の狼の巨人に引き寄せられるように、コウは目を見開くままに銀の狼の巨人へと歩み寄ろうとする。

紅い目を見開くまま涙が滲む。

滲んだ視界に、ガンブレイズへと手を伸ばす

『…………のろくせえ』

喉を掴まれる鋭い爪の感触。

グッと力強く身体が持ち上げられ、コウは目を見開いて後ろを振り返ると、そこには頃垂れる灰の狼が立っていた。

「イと口の端を歪め、嬉しそうに笑っていた

「やつぱ……俺がいないと、お前らなんもできないんだからな……』

「タクト……！』

勢いよく投げつけられるままに、弧を描いて吹き飛ばされる軀体。

ガンブレイズが振り返るままにその手のひらを広げると、背中を装甲に打ち付け、コウの身体が巨人の手の中に収められる。そしてグッと手を閉じるままに、開いたハッチの中へとコウの身体が放り込まれる。

スッと閉まるハッチ。

更に激しく光を放つ胸元の球体。

アメーバ状に蠢く黒い輪郭から手を離すとガンブレイズは、全身から光の粒子を噴き上げるままにグッと身体を屈めた。

その背後には、左腕に大きな蒼い鉱石を握りしめた灰の狼。

僅かに胸元から血の滲んだ弾痕は塞がり、昇る夜明けに目を細めながら、銀の狼の巨人を見上げ、灰の狼は叫ぶ。

「後は……俺がやつておく。こつちは任せておけ……」

『タクト！なんでだ！』

「友達だろ、最期ぐらい……俺にやらせてくれ……俺が始めた事なんだ……」

『そんな事言うな、お前は生きているんだろ、だったら…』

「お前がくれた命だ……お前の為に使うぞ」「

『タクト、タクトおおおお！』

「生きろよ、強く、誰よりも強くな……コウ」

『タクトおおおお！』

光の尾を引き飛び出す巨躯。

銀の装甲を夜明けの光に煌めかせ、ガンブレイズは足元を蹴り上げ、巨大な『穴』へと飛び込んでいった。

そして闇に輝く光へとその手を伸ばし、新たな『世界』へと飛び出す

ガラガラガラ！

巨人が蹴りあげた衝撃で更に崩れていく足元。

巨大な都庁ビルが傾いていき、外壁が剥がれていき、やがてその骨組すらも崩れ落ちていく。

もう、もたないだろう

「……美沙……これで許してくれるか

グッと握りしめる蒼い鉱石。

頬を撫でる夜明けの光に目を細めながら、灰の狼は胸元に手を添えると、小さく息を吸い込んだ。

そして白むと息を夜明けに零し囁く

「終末を告げる地の底の大蛇よ……その息吹を世界にもたらし、その光で世界を守りたまえ。

終わりを告げ次なる朝を迎えるため、終焉を防ぐ大きな盾となれ

……

胸元の光が大きくなつていく

「エリクシユ　　アルト・ラナフェル……！」

胸元から噴き上がる光の粒。

ソレと共に足元が崩れ落ち、身体が虚空に投げ出される。

スウと重力にひっぱられ、大地へと落ちていきながら、灰の狼は片目を細め、夜明けの滲む空を見つめる。

そこには光の粒によって埋まっていく黒い『穴』があつた。

そして光の中に『穴』が消えていく。

世界の浸食が終結していく

「ユウ……美沙……ごめん……」

崩れ落ちる瓦礫にのみこまれながら、夜明けに照らされその表情は穏やかに微笑んでいた。

広げた掌から、蒼い鉱石が離れて宙を舞い、夜明けの光を吸い込んでいく。

そしてより鮮やかに光を放つ

見上げれば、そこは青空が広がっていた。

どこまでも広がる海を見下ろせる小高い丘の上、丈の短い草木に

囲まれ俺はいつの間にか、寝そべっていた。

尖った耳に聞こえるのは、風のいななき。

潮の匂いが僅かに混ざり、ぼやけた視界に柔らかな日差しが差し

込む。

暖かい。

体の感覚は薄れ、まるで魂が天国にいるようだ。

瞼が重い。

ジクジクと熱を持つたように顔の右側が痛い。

目を閉じ、俺は大きく息を吸い込む。

空気が冷たい

「……ユウ……」

聞こえてくる、すすり泣きに混じった甲高い声。

瞼を開き首を横に振れば、隣に栗色の髪を風に靡かせ、少女が草葉の上に座り俺を見下ろしていた。

幼い笑顔は涙に濡れ、まだ腫れた俺の頬を撫でては銀の体毛に指が埋もれる。

小さな手だ。

でもその手はとても暖かい。

目を閉じ、顔を寄せながら、まるで日差しが傍にあるようだつた。

「……ミア」

俺は彼女の名前を呼ぶ。

彼女は微笑み、寝転ぶ俺に抱きつく。

グッと体毛に小さな手がしがみつき、僅かな痛みに顔をしかめながら俺は体を起こすと彼女を抱きかかえた。

小さな背中がすっぽりと両腕に収まった。

トクン……トクン……

心音がはつきりと感じられた。

彼女は、ここに生きていた

「……ニア

「もう どこかに行くなんて言わないでよ……僕と一緒になる
つて言つたじやん」

「すまない……」

「許さないから……ぼくずっと傍にいるから

「ああ……」

グゥウウ……

聞こえてくる静かな唸り声。

彼女を抱き寄せたまま、顔を上げれば、そこには俺の背後に、俺の何倍もの大きさの機械の巨人が片膝を立て陸に座り俺を見下ろしていた。

強い光を放つ胸元のオーブ。

潮風に漂う長い銀色の尻尾。

頭は狼の頭をしていて装甲は黒く、紅い瞳は優しく俺を見つめていた。

まるで父親のように力強く

「……ガングレド……」

ゴオオオオツ

風を切る重たい飛行音。

大きな影が頭上を横切り、空を見上げれば、透明な羽衣を蒼穹に靡かせ大きな白い船が大空を飛んでいた。

海と空の間をよぎり、背部から炎を吹き上げながら、降り注ぐ光の中を真っ直ぐに進んでいくのが見えた。

「……アストライア」

「…………皆、ユウについてきたんだよ」

立ち尽くす俺の頭上を大きな影が海の方へと去っていく。
風が海の方へと流れていく。

「ユウツ」

「ん……」

「お帰りつ

「そうか……そうだな」

別に、向こうの世界を忘れたわけじゃなかつた。

ただこの空も、向こうの空も蒼いなら、なんとなくこの空の向こうに、向こうの空が繋がっているんじやないのか。

この空を連れば、いつかお前に会える気がする。

そう考えたら、世界が分かれている事に、意味はないと感じた。

難しい話じやない。

また、必ず会いに行こう。

彼女が向こう側に行けたよつて、今度は俺がお前に会いに行くよ。今度は皆で、一緒に

「……ただいま」

俺は彼女にそう告げた。

ぎこちない笑顔でそう告げた俺に、彼女は満面の笑みを浮かべ、俺の手を強く握りしめてくれた。

その手は潰れそくなくらい小さく、火傷しそくなくらい熱かつた。

「……行こうか。皆に会いに行こう」

「うんっ」

「共に行こう、ガングレド」

彼女を連れ、友を連れ、俺は小高い丘を下りていく。
共に、この道を歩いていく

「……」

都庁にいたはずなのに、僕は、いつの間にか、遙か遠くの小高い場所からあの紅い球体を見つめていた。

手には蒼い丸い石。

いつの間にか握られていて、僕は茫然としたまま、握られていた蒼い石を見下ろしていた。

「……僕……あの大きな光る石の上にいたのに」

本当はあまり記憶がなかつた。

あの銀色の狼男さんに抱きしめられて、一緒にあの大きな光る岩のドームの中に入つてそれから覚えていない。

覚えているのは、胸を締め付けるような悲しみ。

彼女が死んだこと。

彼が殺した事。

そしてそのことをちゃんと覚えておいてくれと、あの狼男さんに言われた事。

未来を信じ、今を生きる。

頭の中にぼやけて浮かぶ、お兄さんの言葉。

恨んでもいい。

泣いてもいい。

でもそれで脚を止めてはいけない、未来を見つめて生きていく必要がある そんな事をあの人は言った。

僕はそれを受け入れた。

「…………美沙ちゃん…………」

悲しかつた。

でもどれだけ悲しんでも彼女は多分生き返らないだろう そ

して悲しんで突つ立つて いるだけでは物事は解決しないだろう。

だから僕はあのビルに行つたんだ、この夕闇を晴らすために。

悲しみを背負うために生きるんじゃない 僕は、彼女と違つて生きているんだ。

だから 生きよう。

「…………ごめんね、美沙ちゃん」

彼女に会いに行けないことはとても悲しかつた。

でも、いざれ会えるとは思つ。

なんとなく、なんとなく、だけどそんな気がした。

だから、彼女の為、彼女に会つても恥ずかしくないよう

彼女に誇れる人間になろう。

強い人間になろう。

この世界の夕焼けを終わらせよう。

「」の街の夕焼けを見つめながら、僕はそう思った。

「……」

ヒクリと尖った耳が音を拾って震える。

ガサリガサリ

それは木々の揺れる音と共に聞こえる人の足音。後ろを振り返れば、そこにはどこからか落ちたかのように木の枝が身体に絡みつけた少女が歩いてきていた。

栗色の長い髪。

メガネをかけながら、その奥には痛みにうつすら涙をにじませた紅い瞳。

十歳ぐらいだろうか 背丈は僕より遙かに小さかった。

真っ白な肌で白衣を着たまま、そこにはお尻を押さえながら口元と歩いてくる、小さな少女がいた。

目がとても大きくて紅く手綺麗で、外国人みたいに綺麗な女の子だった。

「あう……無茶な転送しちゃった……」

「……」

「あ……」

「えと……」

「ん……あははっ、見てた？」

「……」

「おーいつ。そこの獣人さん見えてる？？」

彼女は大きく手を振つて、僕の下に駆け寄つてくる。夕焼けに照らされながら、満面の笑みだった。僕は戸惑いながら、駆けてくる少女に手を振つた。

「えと……君は？」

「ミアッ。ミア・ミルドレシアだよつ。君は？」

「……ユウ。ユウ・アトラ……」

「よひじへゴウ」

「よ、よひじへ、ア……ちやん

「ミア」

「ミア」

僕らは握手を交わした。

これが、僕の彼女の最初の出会いだった。

世界が崩壊を始める最初の日で、僕らは出会った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4601ba/>

黄昏のオオカミ The Twilight of Xenoatla

2012年1月13日21時01分発行